

この世界は悲しみに満ちている

スターダイヤモンド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それはハロウィンイベントも終り、ラブライブの最終予選に向けて練習を頑張っている最中に起こりました…。

初めはとても小さな出来事だったのに、まさかあんな事件に発展するとは…。

…

第30話（最終話）

ああ無情

2020/1/15 22時UP

…

※私が展開している『μ's 物語シリーズ』とは、一線を画すサスペンスコメディ(?)です。

※他作品も含め、ご意見・感想は随時受付中です。

頂いたコメントに対しては、極力返信致しますので宜しくお願い致します。

目次

私の上履きが無くなっちゃいました…	1
今日は何から始めよう？	5
屋上ランチ	10
ファンなんです！	16
この中の誰か？	21
アフタースクール	26
あった！	31
何事もなくて…	37
新たなる上履き	43
謎は深まるばかり	49
季節外れの怪談話	54
そんなことあるの？	59
体調不良	64
成長してる	71
どっちもどっち	79
怪しいふたり	87
w ↓ 草生えた…的…	95
ことりのおやつ	102
伝える…伝わる	110
南無三!?	118
スクールアイドルの器	129
三人寄らば…	138
想像できません！	146
みんな優しいね	154

謎は解けた!?	163
隠されていた記号	173
死ぬのは誰だ?	183
キレたのは…	193
真相究明	202
ああ無情(最終話)	211

私の上履きが無くなっちゃいました…

美しい花には棘がある。

凜 …「さあ、今日も部活頑張るにや!」

真姫 …「その前に授業を頑張りなさいよ。私のノートは見せないからね」

凜 …「…いいもん、かよちゃんに見せてもらうから」

真姫 …「あのねえ!…花陽、凜を甘やかしちゃダメよ」

凜 …「真姫ちゃんは意地悪にや」

真姫 …「当たり前のことを言ってるだけじゃない」

花陽 …「あははは…って…あれ?」

凜 …「?」

真姫 …「?」

花陽 …「…」

凜 …「かよちゃん?」

真姫 …「どうかした?」

花陽 …「えっ?…あ、うん…上履きが片方…」

真姫 …「ないの?」

花陽 …「入れ忘れちゃったかな?」

真姫 …「そんなハズないでしょ?」

凜 …「周りに…落ちて…ないか」

花陽 …「昨日、どこかに置き忘れて来ちゃったかな?」

真姫 …「どこかってどこ?」

花陽 …「屋上とか部室とか…」

真姫 …「じゃあ、花陽は練習終わりに上履きを片方だけ履いて、ここまで来たってこと?」

凜 …「真姫ちゃん、いくらかよちんでもそれはないにや!」

花陽 …「うう…凜ちゃん…いくら花陽でもって…」

凜 …「口が滑ったにや」

真姫 …「とにかく、昨日私たちと練習終わってから一緒にここまで来て…2年生とも一緒に帰ったわけだし…そこに片方しかないってことはありえないわ」

凜 …「…だとすると?…」

花陽 …「家出しちゃったのかな?」

真姫 …「なに可愛いこと言ってるのよ!普通に考えれば…悪戯された…としか考えられないでしょ!?!」

花陽 …「悪戯?」

凜 …「希ちゃんか穂乃果ちゃんの仕業かな?」

真姫 …「そうね…あの2人ならやりそうだけど…さすがに朝から、こんな面倒になることはしないとと思うわ」

凜 …「確かに…」

真姫 …「花陽…あなた…誰かに恨まれるようなことした?何か心当たりは?」

花陽 …「…うくん…」

凜 …「かよちんに恨みを持つ人なんか、いるわけないにや!」

真姫 …「わかってるわよ、そんなこと…一応、訊いてみただけよ。こういうのは考えれることを全部列举して…ひとつずつ消していくしかないのよ」

凜 …「消去法ってヤツにや」

真姫 …「正解」

凜 …「そうすると…あと考えられるのは…」

真姫 …「…逆のパターン…」

凜 …「逆?」

真姫 …「つまり花陽のファンが…盗んだ…」

花陽 …「ええ!？」

真姫 …「ありえないことじゃないでしょ？」

凜 …「うん!それは考えられることだにや」

真姫 …「まあ、ファンだからって盗んでいいってわけじゃないけど」

花陽 …「で、でも…:よりによって上履きなんて…:」

真姫 …「気持ちのいいものじゃないわね…:」

凜 …「変態さんのすることにや」

真姫 …「凜…:あなたじゃないでしょうね?」

凜 …「ぶっ…:にや?にや?真姫ちゃん!り、凜はそんなことしないにや!それは酷いにや!」

真姫 …「…:冗談に決まってるじゃない…:そんなに焦ると余計怪しく見えるわよ…:」

凜 …「…:だよね…:」

花陽 …「…:」

凜 …「にや?凜が盗んだのは、かよちんのハートだけにや…:」

花陽 …「…:」

真姫 …「…:」

凜 …「…:えつと…:職員室に行つて、先生にスリッパ借りてくるにや…:!!」

花陽 …「あ、ありがとう。じゃあ、待つてるね!」

真姫 …「…照れずに、よくああいうことが言えるわね…」

〜っっく〜

今日は何から始めよう？

：

凜 …「おっはよう！」

真姫 …「おはよう…」

花陽 …「おはようございますう」

モブA …「あっ！おはよう」

モブB …「おはよう」

モブA …「…つて…小泉さん、足、どうしたの？」

モブB …「あっ！ホントだ！スリッパ？」

花陽 …「あ…うん…上履きが片方見当たらなくなっちゃって…」

モブA …「えっ？」

モブB …「そんなことあるの？」

花陽 …「…私、ドジだから…」

モブA …「うそ？それって関係ある？」

花陽 …「ないかな？」

モブB …「ないでしょ」

花陽 …「あはは…」

モブA …「でも、どこ行っちゃったのかな？片方だけ？」

モブB …「悪戯でもされた？」

花陽 …「うくん」

モブA …「でも、この学校で小泉さんたちを嫌ってる人なんていないでしょ？」

モブB …「そりゃあね！なんて言っても、sは学校を廃校の危

機から救ったスターだからね」

モブ A …「だとしたら…他校のスクールアイドルの嫌がらせとか」

モブ B …「ああ！ありえるかも」

真姫 …「ないわよ…そう簡単に部外者が入って来れるわけないじゃない」

モブ A …「そっか…」

モブ B …「だとすると…内部の犯行になるけど…」

真姫 …「…」

凜 …「…」

花陽 …「あつ…えつと…まだ見当たらないっていうだけで、悪戯されたとか…って決まったわけじゃないし…もしかしたら、ちゃんと仕舞えてなくて、どこかに落っこちて、転がっちゃったのかもしれないし…その…ほら…おむすびころりん…的な？」

モブ A …「ぷっ！そこで、おむすびの話が出てくるなんて、さすが

小泉さんね！」

モブ B …「どれだけお米好きなのよ！」

花陽 …「へっ？うひゃあ…ち、違うよ！そういう意味じゃ…」

モブ A …「まあ、知ってるけど」

モブ B …「小泉さん、おにぎり、いつも本当においしそうに食べてるもんね…」

モブ A …「今日もお昼前に食べるの？」

モブ B …「良くあれだけ食べて太らないよね？」

花陽 …「ギクッ」

モブ A …「？」

モブ B …「何かあった？」

真姫 …「この間、強制ダイエットさせられたばかりなのよ」

モブA …「えっ?」

モブB …「強制ダイエット?」

モブA …「ええ? 私たちからみれば、全然太ってるように見えないけど」

モブB …「ねえ!」

凜 …「スクールアイドルの世界って、結構厳しいんだよ」

モブA …「なるほど。最初、あなたたちがスクールアイドルをやり始めた頃は『小泉さんができるなら私もできるかな?』…なんて思ってたけど」

モブB …「そうは甘くないってことね」

真姫 …「ちよつと、花陽でも…ってどういう意味よ?」

花陽 …「ま、真姫ちゃん!」

モブA …「あ、ほら…まだ全然、みんなの性格とか知らなかった頃の話だよ。クラスの中じゃ小泉さんが一番大人しそうで、アイドルとかやりそうになかったから…」

モブB …「それを言ったら、西木野さんも星空さんもそうだけど…特に小泉さんは…ねえ?」

モブA …「文学少女っぽい…っていうか…」

真姫 …「そういうこと?...まあ、確かに私も高校に入ってスクールアイドルをやるなんて、思ってたかったけど…」

凜 …「凜もにや」

モブA …「今は全然違うよ。3人の姿を見て、凄いなあ! やっぱり私たちには無理だわ! って思ってるけど…」

モブB :「それでも普段の小泉さんを見てると、そのギャップに驚くというかなんていうか…」

モブA :「ねえ!」

モブB :「うん」

モブA :「あつ、そうだ!ねえねえ…小泉さん、今日、お昼、一緒に食べない?」

花陽 :「えっ?」

モブB :「実は前々から思ってたんだ。おいしいおにぎりの作り方とか、*μs*の話とか…色々訊きたいこともあるし…」

モブA :「いつも3人一緒じゃ飽きるでしょ?たまには私たちと食べたって、バチは当たらないんじゃない?」

花陽 :「う、うん…」

真姫 :「…」

凜 :「凜のことは気にしなくていいにや。にこちゃんか希ちゃんとお食べるから…ダメなら最悪、真姫ちゃんと食べるし」

真姫 :「どうして私が最後の選択肢なのよ」

凜 :「凜だって、たまには違う人と食べたいにや!」

真姫 :「まあ、いいけど…ということ、私たちのことは気にしなくていいわ」

花陽 :「うん、ありがとう」

モブA :「じゃあ、決まりね!」

モブB :「だったら今日は屋上行かない?天気もいいし」

モブA :「そうね、どう?」

花陽 :「うん、いいよ。じゃあ、今日のお昼は屋上で…」

真姫 …「…」

〜
〜
〜
〜
〜

屋上ランチ

：

花陽 …「いったただきまゝす！」

モブ A …「…」

モブ B …「…」

花陽 …「ん？」

モブ A …「相変わらず大きなおにぎりだなんて」

モブ B …「思わずガン見しちゃったわ」

花陽 …「…ひとつ食べる？」

モブ A …「ありがとう…でも、そんなに大きいのはいらないよ」

モブ B …「だったら、半分つつ貰おうか？」

モブ A …「あつ、そうだね」

モブ B …「いただきます」

モブ A …「いただきます」

モブ B …「もぐもぐ」

モブ A …「もぐもぐ」

モブ B …「美味しい！」

モブ A …「うん、美味しい！」

モブ B …「やっぱりコンビ二のおにぎりと全然違うんだね！」

モブ A …「これは、つい食べ過ぎちゃうのもわかるわ」

花陽 …「…ちよつと寝めすぎだよ…でも、ありがとう！」

モブA …「いつもここで練習してるんだね」

花陽 …「うん」

モブB …「高いところ、恐くない？」

花陽 …「へっ？」

モブA …「フェンスがあるっていつても、屋上は屋上じゃない。もし落ちたら…とか考えない？」

花陽 …「うくん…フェンス際に行ったら、やっぱり恐いかな…だから、あんまり行かないようにしてるけど」

モブA …「だよね。いくら小泉さんの体型がプヨプヨしても、ここから落ちちゃったら死んじゃうよね？」

花陽 …「!!」

モブB …「ポヨ〜ンとは弾まないしね」

モブA …「あはは…そうだね…」

モブB …「気を付けてね？」

花陽 …「えっ？」

モブB …「練習…ほら、不意に事故に遭うことだつてあるでしょ？知らないでフェンスに寄りかかったら、壊れてた…とか…」

花陽 …「あっ…う、うん…そ、そうだね…それは恐いかも…」

モブA …「sは私たちの希望の星なんだから、何かあったら困るじゃない」

モブB …「そうそう」

花陽 …「あ、うん…ありがとう…それより…」

モブA …「？」

モブB …「？」

花陽 …「私ってそんなにプヨプヨしてるかな？」

モブA …「…」

モブB …「…」

花陽 …「…」

モブA …「プツ！そんなわけじゃないじゃない！」

モブB …「ダイエツトもしたんでしょ？まったく問題ないから」

モブA …「小泉さんがデブだったら、世の中の女子は、みんな自殺しなきゃいけないレベルだよね？」

花陽 …「いやいや…」

モブA …「でも、ほら…南先輩と較べたら…ね？」

モブB …「あ、先輩の名前出しちゃう？あの人はず、sの中でも別格じゃない？女子がなりたいスタイルNo. 1だもん」

モブA …「ああ見えて、出るところは出てるんだもんねえ」

花陽 …「南先輩？…ことりちゃんのことかな？」

モブA …「ことり…」

モブB …「ちゃん!？」

花陽 …「ひゃあ！ち、違うのかな…南…ことり…先輩…」

モブ A :「へえ…小泉さん、先輩のこと、ちゃん付けで呼んでるんだあ？」

モブ B :「羨ましいなあ」

花陽 :「えつと…うん…μ s の中だけの取り決めだけど…絵里ちゃんが先輩後輩を禁止しようって」

モブ A :「絵里ちゃん？」

花陽 :「あ、絢瀬先輩…」

モブ B :「生徒会長のことでしょ？」

花陽 :「う、うん…希ちゃん、にこちゃん、絵里ちゃん…穂乃果ちゃん、ことりちゃん、海未ちゃん…そっか…私たちはもう当たり前のように呼び合ってるけど…みんなには慣れ慣れしく聴こえるよね…」

モブ A :「そ…そうだね。いきなりだから、ちよつとびっくりした」

モブ B :「そうそう、本人のいないところで、裏ではそういう呼び方してるのかな？って」

花陽 :「ごめんね、驚かせて。みんなという時は気を付けるよ」

モブ A :「別に無理しなくてもいいよ」

モブ B :「私たちが知らなかったただけだから」

花陽 :「うん…」

モブ A :「それで…南先輩って何食べてるか知ってる？」

花陽 :「ん？」

モブ B :「何食べたなら、あんなスタイルになれるのかなって？何か特別な秘密があるんじゃない？」

花陽 :「秘密…かあ…」

モブ A :「ないの？なにか…」

花陽 :「うくん…知ってたら私もマネするんだけどなあ…」

モブ B :「隠さないで教えてよ」

花陽 :「そう言われても…お菓子はいつも食べてるかなあ…」

モブ A :「お菓子?」

花陽 :「うん…スナック菓子とかもそうだし…手作りのクッキーとかマカロンとかもよく貰うし…それで穂乃果ちや…高坂先輩のダイエツトも進まなかったりしたんだけど…」

モブ B :「お菓子って普通太るからダメっていうけど…嘘教えてない?」

花陽 :「嘘じゃないよう!」

モブ A :「本当?」

花陽 :「本当に!あ、あと…敢えていうなら…チーズケーキ…かなあ…」

モブ B :「チーズケーキ?」

花陽 :「うん!チーズケーキには目がないかな」

モブ A :「チーズケーキねえ」

花陽 :「美味しいお店を探して、何回か一緒にスイーツ巡りとかしたことがあるよ!」

モブ B :「ええ〜いいなあ!」

モブ A :「羨ましい!!今、一瞬、小泉さんに殺意を覚えたわ」

モブ B :「そういえば前に、2人が一緒に歩いてるの見たことがある。練習しなくていいのかな?…って思ったけど、サボってスイーツ食べに行ってた?」

花陽 :「ええ〜?いつのことだろう…多分、それは衣装の買い出しかなにかに行っただんだと思うけど…」

モブ A :「いいなあ…デート」

モブ B :「本当、ズルいわ」

花陽 :「そんなにファンだったのお?」

モブ B :「当たり前じゃない!!」

花陽 :「そ、そうなんだ…」

先輩 :「かくよちゃん!」

花陽 :「!!」

モブ A :「!？」

モブ B :「!？」

くつづく

ファンなんです！

ことり：「かくよちゃん!!」

モブA　：「うわっ！」

モブB　：「あっ！」

花陽　：「ひゃあ!...あ、こと...じゃなかった...南先輩!!」

ことり：「南先輩？」

花陽　：「い、いえ...こつちの話です...ってどうしたんですか？」

ことり：「うん、凜ちゃんと真姫ちゃんに聴いたら、今日は屋上でお昼食べてる...って」

花陽　：「あ...はい...」

ことり：「あのね、今日、授業終わったら、買出しに付き合っ
て欲しいの？」

花陽　：「えっ...あ、はい...いいですど...練習は？」

ことり：「海未ちゃんに言っておいたよ。えへへ...次の衣装のアイディアがまとまらなくって...かよちゃんに助けてもらおうかな...
て」

花陽　：「あ、はい!...私で良ければ...」

ことり：「助かるなあ」

モブA　：「あの、私たちも」

モブB　：「お供させて頂きます!!」

ことり：「?」

花陽 …「えっと…こちらは私のクラスメイトなんだけど…こと…
南先輩の大ファンらしくって」

ことり …「うわあ、うれしいなあ！」

モブ B …「は、はい…」

モブ A …「以前、サインを貰ったこともあるんです…」

モブ B …「は、はい…ここで…」

ことり …「ああ、そう言えば…そんなことも、あつたかなあ…でも、
買い出しは大丈夫だよ」

モブ A …「…ですよね…」

モブ B …「…すみません…」

ことり …「その代わり、*μ*、*s*は最終予選に向けて練習してる最中な
んだあ！だから、本大会に出られるよう、これからも応援、よろしく
おねがいします♡」

モブ A …「も、もちろんです！」

モブ B …「が、頑張ってください！」

ことり …「それじゃあ、かよちゃん、またあとで！授業終わったら教
室に来てね！」

花陽 …「承知しました」

ことり …「ん？」

花陽 …「いえ…別に…」

ことり …「じゃあ、また、あとでね！バイバイ」

モブ A ……」

モブ B ……」

モブ A ……「行っちゃった…」

モブ B ……「いいなあ、いいなあ…南先輩とデートだなんて」

モブ A ……「本当だよ！ねえ、替わって！替わりなさいよう」

花陽 ……「ははは…デートじゃないよう」

モブ A ……「私たちのこと、覚えててくれてなかったね…」

モブ B ……「それは私たちなんて、眼中にないわよ。全国に何千万人のファンがいると思ってるの？」

花陽 ……「…そんなにいるかなあ…」

モブ A ……「ああ、握手してもらえばよかった！そうすれば、先輩の記憶の中にも、少しは残るかもなのに…」

モブ B ……「それはそうだ！緊張して、すっかり頭から抜け落ちてた…」

花陽 ……「ま、また今度お願いすればいいんじゃないかな？…」

モブ A ……「わかってないなあ。そんな簡単に接触できるわけないじゃない」

モブ B ……「だよねえ！」

モブ A ……「これはやっぱり…μ sに入るしかないわね」

モブ B ……「こんな特典があるならなおさらね！」

花陽 ……「μ sに入っちゃうのお!？」

モブ A ……「なに？ダメなの？」

モブ B ……「文句ある？」

花陽 ……「…う…うん…ダメじゃないけど…あつ、チャイムだ」

モブ A ……「おっと、お昼休みが終わっちゃう！」

モブ B ……「急いで戻らなきゃ！」

花陽 …「うん！」

モブ A …「でも、取り敢えず…ありがとうございます」

花陽 …「えっ？」

モブ A …「あなたをお昼に誘ったお陰で、期せずして南先輩に会えたから」

モブ B …「うん」

花陽 …「私は何もしてないけど…」

モブ B …「これを切っ掛けに…って言ったらアレだけど、これからもたまにでいいから、一緒にお昼食べよう？」

モブ A …「うん。もつとμ、sのこととか知りたいしね」

モブ B …「…っていうより南先輩のことでしょ？」

モブ A …「あははは…バレたか！」

花陽 …「うん…いいよ」

モブ A …「よし！」

モブ B …「じゃあ、これからもよろしく！かくよちゃん！」

花陽 …「えっ？」

モブ B …「あ、南先輩がそう呼んでたから」

モブ A …「はなよ…じゃなくて、あだ名で呼ばれるなんて…小泉さんって南先輩とチョー仲いいんだね？」

花陽 …「うくん…μ、sはみんなそうだから、こと…南先輩だけ特別仲がいいわけじゃないとは思うけど…衣装作りとか手伝わせてもらってるし…確かに他の先輩と比べて一緒にいる時間は長いかも…」

モブ A …「ふくん、いいなあ…」

モブ B …「ねえ…」

花陽 : 「えへへへ…」

〜つづ〜

この中の誰か？

：

真姫　：「希…一応確認なんだけど…あなた、花陽の上履き、隠したりしてないでしょうね？」

希　　：「ん？どうしたん真姫ちゃん、藪から棒に」

凜　　：「かよちゃんの上履きが片方盗まれたにや！」

希　　：「えっ？」

穂乃果：「花陽ちゃんの…」

海未　：「上履き…ですか？」

にこ　：「盗まれた？」

絵里　：「本当なの？」

真姫　：「盗まれた…っていうのは語弊があるけど、今朝、登校した時に、片方無くなつてたの」

凜　　：「昨日帰ったときにはちゃんと仕舞ったはずだから、誰かが隠したか…悪戯したんじゃないかと…」

希　　：「それでウチが疑われとるん？」

真姫　：「そうは言っていないけど…私たちの中で、くだらない悪戯をするとしたら、あなたくらいしかいないでしょ？だから念の為に訊いてみただけよ」

希　　：「むふ！ずいぶんやねえ…ウチやったら、上履きなんかやなくて、おにぎり隠すけどなあ…」

海未　：「鬼畜ですわね！」

凜　　：「鬼畜にや！」

にこ　：「鬼畜だわ！」

絵里　：「それは花陽に殺されても文句ないレベルの所業じゃない？」

穂乃果　：「希ちゃんの冥福を祈るよ」

希　　：「冗談やって、冗談！ウチもまだまだ青春を謳歌したいやん！」

凜　　：「かよちゃんは、そんな酷いことしないにや」

真姫　：「穂乃果は？」

穂乃果　：「なにが？」

真姫　　：「悪戯……」

穂乃果　：「私が？悪戯？……しないよ、しない！そんな幼稚なことするわけないじゃん！」

海未　　：「その言葉に全面同意はできませんが……」

穂乃果　：「どういう意味さ」

海未　　：「そのままの意味です。……とはいえ、私たちの中に該当者がいるというのは、考えづらくありませんか？」

真姫　　：「わかってるわよ、そんなこと……」

絵里　　：「当の本人はなんて言ってるのかしら？何か心当たりがあるとか……」

真姫　　：「まるでないみたい」

絵里　　：「でしようね……」

海未　　：「昨日の帰りに仕舞ったのは、間違いないのですね？」

凜　　　：「凜たちも一緒だったから……転げ落ちたりすれば、わからないにや」

海未　　：「それはそうですね」

絵里　　：「だとすると、やっぱり人為的に誰かが持ち出した……ってことになるわね……」

海未　　：「はい。それが悪戯か盗んだのかはわかりませんが……」

穂乃果：「フアンの仕業!？」

海未：「選択肢のひとつにはなるかと思えます」

絵里：「でも、上履きって…」

にこ：「フアンっていうのは、その人が身に付けてる物ならなんだっていいのよー!」

希：「ひよつとして…にこっちが?」

にこ：「ぬあんですよ!! だったら凧の方が、よっぽど怪しいでしょ」

凧：「えっ? 凧?…凧はそんなことしないよ! わざわざ上履きなんか盗らなくても、かよちんの家に行けばなんだった持ってこれるんだから」

海未：「それは一理ありますね…」

一同：「…」

凧：「…って本気にしないで欲しいにや…」

希：「案外、真姫ちゃんやったりして!」

真姫：「どうしてよ!」

にこ：「ああ…なるほど」

真姫：「ああ…じゃないわよ」

穂乃果：「そっか! こういうのって『一番怪しくなさそうな人』が犯人だったりするもんね!」

希：「ストーリーテラーが実は…って、ミステリーの王道やん」

真姫：「…だったとしても、私はしないわよ…あの娘の悲しむ姿なんて見たくないもの」

絵里 …「そうね…花陽を困らせて喜ぶ人なんていないものね…」

海未 …「逆はないでしょうか…」

穂乃果 …「逆っていうと？」

にこ …「嫌がらせ…つてこと？」

海未 …「はい…誰かに恨まれているとか…」

穂乃果 …「誰かって誰さ？」

海未 …「それがわかれば苦労はしません！」

穂乃果 …「たははは…それはそうだね…」

絵里 …「だけど、あの娘が誰かの恨みを買うなんてこと…想像がつかないんだけど…」

希 …「ウチもや…」

穂乃果 …「どこかで…おにぎりを巡る争いがあったと…か？」

にこ …「ありえるわね！」

真姫 …「ないでしょ！」

穂乃果 …「いや、あるよね？」

海未 …「可能性はゼロではありません。性格的に、そういうことは起こりえるとは思いますが…」

穂乃果 …「ほらー！」

希 …「食べ物への恨みは恐いつて言うしねえ」

穂乃果 …「そうだよ！穂乃果なんか、にこちゃんに盗られたポテトのこと、未だに忘れてんだから！」

にこ …「アンタねえー！いつまでそんなことを言ってるのよ…」

真姫 …「はあ…まあ、いいわ…少なくとも私たちがじゃないってことかわかれば…」

絵里 …「そうね…何もわからない状態で、あれこれ詮索してももしかたないし…」

希 …「えりちの言う通りやね。しばらく様子を見てみよう」

真姫 …「わかったわ…みんな、ごめん、練習前につまらないこと
言っちゃって…」

海未 …「いえ、そんなことはありません。みんな大切な仲間ですか
ら。小さなことを見過ぐして大事になるよりは、よっほどいいです
よ」

にこ …「少し、あの娘のこと、気にして見るようにするわ。アタシ
たちに隠してる事もあるかもしれないし」

凜 …「隠し事…そんな風には見えなかったけど…」

希 …「世の中には近すぎて見えない…ってこともあるんよ」

凜 …「!!」

海未 …「大丈夫ですよ、凜。花陽なら何かあったら、真つ先にあな
たに相談しますよ」

穂乃果 …「今日はことりちゃんと一緒に出掛けてるから、あとでどん
な様子だったか訊いてみるね」

凜 …「う…うん…」

絵里 …「さあ、それじゃ練習を始めるわよ！まずはストレッチから
…」

真姫 …「誰なの…一体…」

くつづく

アフタースクール

…

ことり：「今日は付き合ってくれてありがとう」

花陽：「いえいえ…なんのお役にも立てず…」

ことり：「ううん、かよちゃんのお陰で『次は冬っぽい衣装にしよう！』って決心できたよ」

花陽：「本当ですか？良かったですう！」

ことり：「お礼に…ケーキでも食べて帰る？この間行ったお店だけど、新作が出たんだって」

花陽：「あっ！いいですね…って…思いましたが…今日はやめておきます…」

ことり：「ダイエット？」

花陽：「えっ!?…あつ…ま、まあ…はい、そうなんですう!…ちよつと…また体重が…」

ことり：「そうかな?全然わからないけど…」

花陽：「ダメです!花陽はプニプニのポヨ〜ンなんです…」

ことり：「プニプニのポヨ〜ン?」

花陽：「ことりちゃんはわからなくていいです!」

ことり：「?」

花陽：「ごめんなさいです。折角のお誘いを…」

ことり：「う〜ん…そう言うなら…」

花陽：「すみません…」

ことり：「うん、気にしなくていいよ。海未ちゃんが怒るとこ、見たくないもんね…」

花陽 …「あははは…」

ことり …「そういえば…昼間のかよちゃん、少し変だったよ」

花陽 …「そ、そうでしたか?」

ことり …「うん。ことりのこと、急に『先輩』なんて呼んだりして…『承知しました』とか…」

花陽 …「ああ…あれは…ばなばなしかじか…ってことがあって…」

ことり …「そうなんだあ」

花陽 …「確かに知らない人からすれば、びつくりするかな…って。特に絵里ちゃんなんて…今では当たり前のように呼んでますけど、花陽も最初は抵抗がありましたから。他の人たちからすれば『あの生徒会長を!?!』ってなりますよね?」

ことり …「そっかあ」

花陽 …「あつ…じゃあ、今日はこれで失礼します」

ことり …「うん、また明日ね」

花陽 …「はい、では…」

ことり …「ばいばい」

♪♪…

ことり …「あつ!電話だあ…もしもくし?…穂乃果ちゃん?…えっ?かよちゃん?うん…今別れたところだよ!…様子?…うん…特別変わったところはなかったけど…何かあったの?…えっ?かよちゃんの上履きが?…そういえばお昼にあつた時、スリッパだったよ
うな…あ、うん、わかった。それじゃあ、また明日ね!ばいばい…」

ことり …「…上履き…ダイエット…なにか関係があるのかな?…」

：

海未　：「どうでしたか？」

穂乃果　：「特に変わったところはないみたい。いつもの花陽ちゃんだったって」

海未　　：「そうですか：では、一安心というところでしょうか」

穂乃果　：「ねえ：そんない大袈裟な話じゃないんじゃないかな？ 本人もあんまり気にしてないみたいだし」

海未　　：「だと良いのですが：」

穂乃果　：「海未ちゃんは心配しすぎなんだよ」

海未　　：「あなたが能天気過ぎるのです…」

穂乃果　：「どうしてさ！ 余計な心配するのはやめよう！ って言うてるだけじゃん」

海未　　：「余計な心配とはなんですか！…いえ、やめましょう。またいつもの不毛な争いになりますので」

穂乃果　：「：うん、そうだね…」

海未　　：「ですが、今回は穂乃果の言う通りかもしれません」

穂乃果　：「うん？」

海未　　：「今は、あれこれ言っても仕方ないということですよ」

穂乃果　：「海未ちゃん、熱でもある？」

海未　　：「何故でしょう？」

穂乃果　：「今日の海未ちゃん、めっちゃくちや素直というかなんとか：」

海未　　：「失礼ですね。私はいつも素直ですよ！」

：

絵里　　：「希のカードで、花陽の上履きの行方、わからないの？」

希　　　：「残念ながら過去のこととはわからないよ…」

にこ　　：「役立たずね」

希　　　：「そやね：でも…」

にこ …「でも？」

希 …「この件、簡単には終わらんかも」

絵里 …「えっ!？」

にこ …「えっ!？」

希 …「ウチのカードがそう告げとるんよ!!」

にこ …「それが言いたいだけでしょ？」

希 …「ふふふ…」

絵里 …「練習のときも言ったけど、私たちがあれこれ詮索しても始まらないし、しばらく様子を見てみましょう」

希 …「そうやねえ…ウチらが下手に探偵ごっこみたいなことしても、きつと話がややこしくなるだけやろうし」

にこ …「ああ、穂乃果とか凜とか…なんでもないことを早とちりして、引つ掻きまわしそうだもんね」

希 …「そこに、にこつちが入ってないやん」

絵里 …「確かに…」

にこ …「アンタねえ！」

希 …「ふふふ…」

絵里 …「あは」

にこ …「はあ…まあいいわ…このメンツじゃ勝ち目ないから…無駄な抵抗はやめてあげるわ」

絵里 …「さすが、にこね！」

希 …「賢明！賢明！」

にこ …「嬉しくないんだけど…」

希 …「嬉しくない…か…確かにそうやね…」

にこ …「？」

絵里 …「希？」

希 …「ん？ウチ、今、何か言うた？」

絵里 …「ええ……」

にこ …「何か、すごく不安になるような言葉を発したわ」

希 …「それは…気のせいやないかな？」

にこ …「でも……」

希 …「デモもストも受け付けません！」

にこ …「また古臭いことを……」

希 …「にやははは……」

絵里 …「……」

くつづく

あつた！

：

凜 …「さあ！今日も部活、頑張るぞ！オー!!」

真姫 …「だから、その前に勉強を頑張りなさいよ！」

凜 …「ん？デジャヴユ？それとも、これがタイムリープってヤツかにかや？…」

真姫 …「何、馬鹿なこと言ってるのよ。毎日毎日、同じセリフを繰り返してるのは凜じゃない」

凜 …「…ってことは、真姫ちゃんのツツコミにバリエーションがない…ってことなんだね」

真姫 …「あなたねえ…いいわ…もう二度と勉強教えてあげないから」

凜 …「にやー!!これもいつもの台詞にや〜」

花陽 …「あはは…」

真姫 …「あら…ことりじゃない?」

ことり …「あつ！おはようございます」

凜 …「おっはようにや〜」

花陽 …「おはようございます」

真姫 …「何してるの？1年生の靴箱の前で…」

ことり …「うん…昨日、穂乃果ちゃんからね、かよちゃんの上履きが無くなっただって聴いたから…」

花陽 …「あつ…」

ことり：「冷たいなあ…一緒に
お出掛けしたのに、一言も話してくれ
ないんだもん」

真姫：「余計な心配掛けたくなかつた…
ってことですよ？」

花陽：「うん…」

真姫：「それで？ことりがここに
来たからって、何か解決するの
？」

花陽：「ま、真姫ちゃん…」

ことり：「そういうワケじゃないけど…」

凛：「にやあ〜〜…!？」

花陽：「ぴやあ！」

真姫：「凛!？」

ことり：「凛ちゃん!？」

凛：「…か、かよちんの上履き…
凛のところに入ってたにや…」

花陽：「えっ?」

ことり：「凛ちゃんのところに…」

真姫：「上履きが?」

凛：「…なんでにや?…」

真姫：「…」

ことり：「…」

凛：「り、凛じゃないからね！
真姫ちゃん、ことりちゃん！
凛じゃないよ！凛、そんなこと
しないから!!」

花陽：「大丈夫だよ、凛ちゃん！
わかってるから…よかったよ、花

陽の上履きを凜ちゃんが預かっててくれて」

凜 …「違うよ！そんなんじゃないよ！絶対凜じゃないから…」

真姫 …「そうね。昨日も今日も、凜は私たちと一緒に登下校してるんだもの。常識的に考えれば…私たちの隙を見て、自分の靴箱に花陽の上履きを入れる…なんてリスクが高すぎるわ」

凜 …「そうにや！そうにや！」

真姫 …「もつとも…夜のうちに…とか、朝早く来て…とかなら別だけど」

花陽 …「真姫ちゃん！いくら真姫ちゃんでも言っていないことと、悪いことがあるよ！」

真姫 …「あくまでも仮定の話よ。昨日も言ったでしょ？こういうことはあらゆる可能性を列挙して、ひとつづつ消していく必要があるって」

花陽 …「そうだけど…」

真姫 …「そういう意味では…この状況下だと…ことりが一番怪しい…ってことになるわね」

ことり …「ちゅん？」

花陽 …「…ことりちゃんが？…」

真姫 …「穂乃果や海未と一緒にじゃなくて…今、ひとりでここにいる…って、これ以上なく怪しいでしょ？」

凜 …「先に来て…凜の靴箱に入れた？」

ことり：「…そうなっちゃう？…」

花陽：「ことりちゃん…」

ことり：「でも、それなら…隠したときはどうだったのかな？」

真姫：「!!」

ことり：「戻したときの理屈はそれで通じるかもだけど…隠したときは？…夜に来て…とか、朝早く来てとか…なら、学校中の全員に可能はあると思うんだけど」

真姫：「…確かに…それはそうね…」

凜：「警察に届けたほうがいいかによ？」

真姫：「バカねえ！なんて言うの？『花陽の上履きが無くなったんですけど、戻ってきました。誰がやったか調べてください』…って？受け付けてくれるわけないでしょ」

凜：「そっかあ…ダメか…」

花陽：「えつと…誰がやったとかは、もう良いんじゃないかな？こうやって無事戻ってきたわけだし…あんまり事が大きくなっても、よくないと思うし…」

ことり：「お母さんには一応、報告しておくね？何も知らない…っていうのもよくないと思うし…」

真姫：「そうね…」

凜：「じゃあ、かよちん…上履き…」

花陽：「ありがとう」

真姫：「待って！」

花陽 …「!?」

真姫 …「念の為に、今日はスリッパにしたほうがいいんじゃない？
何も無いと思うけど…それは持って帰って、一度洗ったほうが…何が
付いてるかわからないし…」

花陽 …「あっ…」

真姫 …「不安にさせるつもりはないんだけど…」

花陽 …「そうだね…うん…ありがとう。そうするね！」

モブA …「おはよう！」

花陽 …「あっ…」

モブB …「おはよう…って南先輩？」

ことり …「あ、あなたたちは昨日の…」

モブA …「あっ、おはようございます！」

モブB …「お、おはようございます…みなさん、お集まりで…ど
うしたんですか？」

凜 …「かよちんの上履きが見つかったにや」

モブA …「へえ！よかったじゃない」

モブB …「ねえ！…で、どこにあったの？」

凜 …「それが、なんと、り…」

真姫 …「花陽の靴箱の中から見つけたわ」

一同 …「!?」

真姫 …「やっぱり、仕舞うときに、片方落つことしちゃったんじゃない？…それに気付いた誰かが、元に戻しておいてくれた…ってところかしら。まったく花陽はドジなんだから…」

花陽 …「あ…あは、そうだね…」

モブA …「なんだ、そうだったの？」

モブB …「それなら一件落着…ということかしら」

花陽 …「う、うん…お騒がせしました」

…

凜 …「真姫ちゃん、どうして嘘付いたにや？」

真姫 …「言ったでしょ。今は事を荒立てたくない…って。凜のところから見つかったなんていったら、面倒なことになるじゃない」

凜 …「そっか…」

真姫 …「花陽も！」

花陽 …「？」

真姫 …「余計なことを言っちゃダメよ」

花陽 …「うん…わかった…ありがとう…」

くつづく

何事もなくて…

…

穂乃果：「よかったね！上履き見つかった」

にこ：「まあよかったくう、人騒がせなんだから！」

希：「ホンマやね！ウチの心配は杞憂に終わったわあ」

ことり：「お待たせえ」

海未：「遅いですよ、ことり」

絵里：「ことりが遅れてくるなんて珍しいわね」

穂乃果：「何かあった？」

ことり：「うん、花陽ちゃんの件をお母さんに報告してきただけだよ」

海未：「それでなんと？」

ことり：「様子を見てみましょう…って」

にこ：「まあ、そう言うわね。こんなことで警察沙汰になって、ラ
ブライブに影響がでても困るし」

花陽：「…」

希：「にこっち！」

にこ：「ぬあくによく…本当のことでしょう？」

絵里：「多少、乱暴な言い方だけど、確かにその通りだわ」

花陽：「ごめんなさい」

凜：「かよちゃんが謝ることじゃないにや」

絵里：「そうね…でもこれで、練習に集中できるわね」

花陽：「はい！」

海未：「…」

穂乃果：「海未ちゃん？」

海未　：「はい!?…いえ、なんでもありません! さあ、気合入れていきましよう!」

凜　　：「いつも以上に気合を入れたら死んじやうにやあ」

一同　：「あはは…」

真姫　：「…」

希　　：「真姫ちゃん…今は練習に集中やで」

海未　：「はい、気味が悪いのはわかりますが…今は集中してください」

真姫　：「わかってるわよ…」

：

穂乃果：「じゃあ、海未ちゃん、真姫ちゃん、私たちは帰るね」

絵里　：「日が落ちるのも早くなってきたし、あまり遅くならないように」

ここ　：「あとはよろしく」

花陽　：「気を付けて帰ってね!」

凜　　：「じゃあ、また明日。かよちゃん、ラーメン食べてから帰ろう!」

ことり：「ばいばい」

希　　：「ほな、お先」

海未　：「はい、では皆さんも気をつけて…」

真姫　：「また明日…」

海未　：「…みんな帰りましたね…」

真姫 ……「そうね…」

海未 ……「…」

真姫 ……「…」

海未 ……「…」

真姫 ……「…」

海未 ……「作曲があるから残っていく…というのは嘘なんですネ？」

真姫 ……「そういう海未こそ、作詞があるなんて嘘でしょ？」

海未 ……「やはり、あの件ですか？」

真姫 ……「それしか無いでしょ？」

海未 ……「はい。今回の事に関しては、真姫と話すのが一番かと思いまして」

真姫 ……「私も同じ事を考えたわ」

海未 ……「希も何か感づいているようですが…」

真姫 ……「多分ね…あの人、鋭いから…」

海未 ……「彼女にはあとで話を聴いてみましょう。今はまだ、事を荒立てる段階ではないと思いますので」

真姫 ……「…それで…海未はどう思うの？」

海未 ……「端的に申しますと…凛の靴箱に戻されていた…というところ、犯人の悪意を感じます。仮に…花陽の上履きを悪戯…隠したのか盗んだのかは、現時点でわかりませんが…返すのであれば、元に戻すのが普通です。ですが…」

真姫 ……「あえて凛の靴箱に入れたのは…」

海未 ……「意図的と言わざるを得ないです」

真姫 ……「何の為に？」

海未 ……「真っ先に考えられるのは…やっぱり凛に疑いを持たせることでしょうか？」

真姫 :「そうね。現物がそこから発見されたんだから、そうなるわね」

海未 :「はい」

真姫 :「でも凜を犯人に仕立てたのなら、あまりに稚拙だと思わない？あんなにこれ見よがしに入れておいたら、逆に凜が犯人ではありません！つて言っているようなものだわ」

海未 :「確かに真姫の言う通りです。ですが…」

真姫 :「？」

海未 :「凜が犯人だった場合はどうでしょう？」

真姫 :「!？」

海未 :「犯人が第一発見者を装うことはよくあることです。凜が犯人であれば、現物を発見した本人は、真つ先にその容疑から外れます。自分が犯人なのに、自らその証拠を見せる理由はありませんからね？」

真姫 :「あなた、凜を疑ってるの？」

海未 :「いえ、可能性のひとつを述べただけです。ただ、それを消し去るだけの根拠は今のところありません」

真姫 :「…」

海未 :「花陽の自作自演も考えられます」

真姫 :「海未!!」

海未 :「疑いたくない気持ちはわかりますが、ここはひとつ冷静になつて、私の話を聴いてください」

真姫 :「動機は？」

海未 : 「わかりません。ですが登下校時以外に学校へ来ることが可能であれば、犯行は可能かと」

真姫 : 「そんなことを言ったら、生徒全員に可能性があるじゃない」

海未 : 「その通りです。ですから、私も真姫も：昨日から今朝までのアリバイが証明されない限り：容疑者のひとりだと言えます…」

真姫 : 「…そうなるわね…」

海未 : 「ここで問題を整理してみましよう。まずひとつ目です：花陽の自作自演でなければ、なぜ彼女がターゲットとなったのか」

真姫 : 「それがわかれば苦労しないわよ」

海未 : 「ふたつ目：なぜ凜の靴箱に戻したか」

真姫 : 「それはさつき話したわ。今の段階ではどちらとも言えない」

海未 : 「はい。では凜の犯行でなかった場合ですが：なぜ他の人の靴箱にしなかったのでしょうか？」

真姫 : 「他の人？」

海未 : 「μ, s 以外の誰かのところですか」

真姫 : 「…」

海未 : 「ここに犯人の意図があると思うのです。別に他の生徒の靴箱に入れておいても、問題ないはずですよ。いえ、むしろ、そちらの方がよっぽど自然ですよ」

真姫 : 「…そうかもね…だとすると…どうして凜のところ…？」

海未 : 「花陽と凜の関係性を知ってる者の犯行…ということでしょうか？」

真姫 : 「!？」

海未 …花陽を貶めようとしたのか、あるいは凛を貶めようとしたのか…もしくはその両方なのか…」

真姫 …「でも2人の関係性なんて、学校中に知れ渡ってるでしょ？」

海未 …「いえ、真姫の学年は1クラスしかありませんから、否が応でも2人の仲は見せ付けられているでしょうが…2年生、3年生となるとそこまでは詳しくないかと思えますよ」

真姫 …「…そう…それじゃあ、犯人は1年生の中に？」

海未 …「もつとも、そういう意味では、μsのメンバーがよつぽど詳しいと思いますが…」

真姫 …「…」

海未 …「…」

真姫 …「あなたは私を疑っているの？」

海未 …「ふたりの仲を割こうとするなら、動機はありますね」

真姫 …「はあ？…馬鹿馬鹿しい…」

海未 …「ふふふ…私もそう思います」

真姫 …「いい判断だわ」

海未 …「…すみません…今日の段階では、まだわからないことが多いすぎました。やはり今後の展開を見守る必要があります」

真姫 …「できれば、このまま何も起こらないことを期待するけど…」

海未 …「はい…」

…つづく…

新たなる上履き

：

凜 …「さあ！今日も部活、頑張るぞ！オー！！…って…このセリフ、昨日の朝のコピペかによ？」

真姫 …「知らないわよ…」

花陽 …「ぴゃあ!？」

凜 …「かよちゃん!？」

真姫 …「今度は何?」

花陽 …「花陽の靴箱に…上履きが入ってます…」

凜 …「?」

真姫 …「そののどろが変なの?」

花陽 …「花陽は昨日、真姫ちゃんに言われたとおり、上履きをおうちに持って帰りました。夜のうちに洗って…まだ干してあります」

真姫 …「あっ…」

凜 …「…ってことは…誰のによ?…」

花陽 …「…片方は…かかどに『ERI』…と書いてあります…」

真姫 …「片方は?…って…えっ、左右別々な?」

花陽 …「もう片方は…『東條』…と…」

凜 …「それって…」

真姫 …「絵里と希の?」

花陽 …「はわわわ…どうして絵里ちゃんと希ちゃんの上履きが、花陽のところ!? どうして、ねえ、どうしてなの?」

凜 …「かよちゃん…」

花陽 …「真姫ちゃん、どうして私のところに、ふたりの上履きが入ってるの!?!」

真姫 …「花陽! 少し落ち着きなさい!」

花陽 …「うう…ぐすつ…どうして…」

真姫 …「ふたりはもう学校に来てるのかしら? 凜、ちよつと電話してもらっていい? 来てれば片方無くて困ってるだろうし、来てなくても先に知らせなくちゃいけないし…」

凜 …「う、うん! わかったにや!」

真姫 …「私は少しここを離れるわ。花陽を落ち着かせてくる」

凜 …「お願いするにや!」

…

真姫 …「…どう?…少し落ち着いた?…」

花陽 …「…うん…もう大丈夫…さっきはあまりに予想外のことが起きて、混乱しちゃっただけだから…」

真姫 …「そう…よかったわ…」

希 …「おっ！ここにおったん？」

真姫 …「希！」

希 …「えりちもおるよ」

絵里 …「おまけみたいに言わないでよ」

花陽 …「あ、あの…この度は…」

希 …「ストップ！」

花陽 …「!?」

希 …「それ以上言うたらアカンよ！花陽ちゃんはなくんも悪くないんやから」

絵里 …「その通りだね。私たちに謝ったりするのは筋違いよ」

花陽 …「すみません…」

希 …「大丈夫やって。ウチらはまだ登校前だったから、被害の『ひの字』も出てへんよ」

絵里 …「そう、希が途中まで来て『枕を忘れた』って戻っちゃうから」

希 …「ん？それはことりちゃんやって。ウチが置いてきちやったのは…えりちへの愛やで」

絵里 …「まあ…」

真姫 …「何、くだらないこと言ってるのよ!!絵里もそんなことで、顔を赤らめないでよ」

花陽 …「ぶふっ！」

希 …「くだらないとか、そんなこととか、失礼やなあ…ウチのえりちへの愛は…」

真姫 :「どうでもいいから!」

絵里 :「と、とにかく希が忘れ物の私も付き合っ、家まで戻ったから、学校に着くのがいつもより遅くなったの」

希 :「そういうことやね」

絵里 :「そうしたら凜から電話があつて…」

希 :「幸い、もう片方は、ちゃんとウチらのところに入つてたよ」

花陽 :「そうですか…よかったです…つて、そういうえば凜ちゃんは？」

絵里 :「こどりのところに行つてる」

花陽 :「ことりちゃんのところか?」

希 :「一応な…ことりちゃんのお母さんには、伝えておいた方がいいやろうから…」

花陽 :「そうですよねえ…」

真姫 :「それにしても…不幸中の幸いだったわね」

絵里 :「?」

真姫 :「あなたたちが、いつも通りに学校に来て…片方無くなつてる…つてなつたら、ちよつとした騒ぎに発展してた…でしょ?」

希 :「そやねえ…少なくとも、そこらじゆうを探し回るやろね」

真姫 :「それがひとりならず、ふたりも無くなつてるのよ。いくら絵里と希であつても、冷静ではいられないんじゃないかしら」

絵里 :「…」

真姫 :「一番の心配は、そんな様子を私たち以外の生徒に見られること。そして最悪の結果が…花陽の鞆箱からそれが見つかった…と知られること」

絵里 :「その通りね」

真姫 :「だから、ふたりが登校する前で、それを未然に防げた…とということが不幸中の幸いだと思つたわけ」

絵里 :「ハラショー!」

希 :「スピリチュアルやね」

花陽 :「あはは…」

希 :「ウチ、自分でいうのもなんやけど、ラッキーガールやん!
危機回避能力が高いんやろね」

真姫 :「:そうかもしれないわね:。今回だけはそういうことに
しておくわ:」

希 :「それにしても:この生徒会コンビにちよつかい出そうな
んで、いい根性してるわあ。えりちが怒ったらどれだけ恐いか、あと
で目に物言わせてあげようぞ」

絵里 :「ちよつと、どうして私を引き合いに出すの?」

希 :「えりちのバックにはKGBが:」

絵里 :「いません!!朝から、なにくだらなことを言ってるのよ!
ほら、急がないと朝礼が始まるわよ」

希 :「ほ〜い!」

絵里 :「花陽、とりあえず今は落ち着きなさい。今後どうするか
は、またあとで考えるとして:」

真姫 :「私たち以外の人には、他言無用よ」

花陽 :「は、はい!わかりました」

絵里 :「いい返事だわ:さあ、急ぐわよ!このままだと本当に遅刻
扱いになるわ」

希 :「生徒会長として、遅刻はできんよね?」

絵里 :「あなたも副会長でしょ:…:というか、元々、希が忘れ物な
んでしなければ:」

希 :「仕方ないやん!お金なかったら、お昼食べられへんのやも
ん」

真姫 :「希の忘れ物ってお財布だったのね」

花陽 :「うん、そうみたいだね」

~^~U~

謎は深まるばかり

：

穂乃果：「さあ！練習だあ！」

絵里：「相変わらず、元気ね」

希：「そりゃあ、穂乃果ちゃんから元気を取ったら、何にも残らんもんね？」

穂乃果：「そうだね！…って希ちゃん!!」

にこ：「でも、アンタが元気でいてくれなきゃ困るのよ。なんたつてμ'sのリーダーなんだから」

穂乃果：「でしょ？でしょ？にこちゃん、わかってるう！」

海未：「調子に乗りすぎるのが、玉に瑕（きず）ですが…と…それより花陽は？」

凜：「アルパカさんのお世話をしてから来るって言ったにや」

海未：「そうですね。いくら係りの仕事とはいえ、花陽は本当に熱心に世話をされていて感心ですね。生徒会の仕事さえ人に押し付けようとする穂乃果とは大違いです」

穂乃果：「またあ…そうやってすぐ穂乃果を引合いに出すんだから」

絵里：「…」

希：「ん？えりち、どうしたん？」

絵里：「ううん…別に…どうしたら、あのアルパカと仲良くなれるのかしら…って」

凜：「凜、知ってるよ。絵里ちゃん、アルパカさんに嫌われてるもんね！」

絵里：「き、嫌われてる？…違うわ…私が苦手なだけなの！」

海未：「そういえば…小屋に行く時、絵里はいつも少し離れたところ」

ろにいますね」

絵里　：「だって：私が近づくと：怒るのよ…」

凜　　：「絵里ちゃんがビクビクするから、向こうも警戒してるじゃないかな？」

絵里　：「みんなは恐くないの？」

穂乃果：「うくん：別に恐くはないよね？大人しいし」

絵里　：「でも、あんなに大きいのよ：襲われたらひとたまりもないじゃない」

一同　：「えっ？」

絵里　：「な、なに？」

にこ　：「へえ：暗闇、幽霊、アルパカ：アンタ、意外と臆病なのね」

希　　：「ウチは、そんなえりちが好きなんやけどな」

にこ　：「あっそ…」

穂乃果：「まあ、誰にだって怖いものはあるよ」

希　　：「穂乃果ちゃんは：海未ちゃんやろ？」

穂乃果：「そうそう、世界で一番怖い：って希ちゃん!!余計なことを言わさないですよ」

希　　：「にししし…」

凜　　：「そういう希ちゃんは、何か怖いものってあるのにや？」

希　　：「ウチ？ウチはそうやなあ：焼肉かな」

凜　　：「焼肉？希ちゃんが？」

希　　：「あとは：やつぱりおうどんさんかな」

にこ　：「はあ？おうどんさん？」

希　　：「それと：穂乃果ちゃんちのお饅頭やね？」

穂乃果：「うちのお饅頭？」

希　　：「最後に暖かいお茶はもつと怖い」

海未 …「はあ…饅頭恐いですか…真面目に聴いて損をしました…」

一同 …「!?」

希 …「海未ちゃん以外、誰も知らんのか…」

海未 …「そのようですね…」

絵里 …「説明してもらえるかしら?」

海未 …「落語ですよ」

希 …「えくその昔、長屋に数名の若者が集まりました…」

海未 …「今から一席ぶつつもりですか?」

希 …「続きは『おぜぜ』を頂いてから…」

にこ …「お金取るんかい!!」

穂乃果 …「ケチ!」

凜 …「意地悪にや」

希 …「うっしっしっ…」

海未 …「そういえば…ことりもアルパカのところでしょうか?穂

乃果、何か聴いてますか?」

穂乃果 …「あれ?海未ちゃんが聴いてるかと思ってただけ…」

真姫 …「理事長のところでも行っただんじやない?」

穂乃果 …「!!」

海未 …「…そうかも知れませんね…」

にこ …「今朝のこと?この学校にもくだらないことをするヤツがいるのね…なにが楽しいのかしら」

凜 …「凜、思ったんだけど…A—RISEの嫌がらせってことは

考えられないかな？」

にこ …「!!」

穂乃果 …「A—RISE…」

海未 …「…ですか？」

凜 …「今、この時期、*μ's*に嫌がらせをして得をする人って考えたら、A—RISEしかないにや!きつと、この学校にA—RISEの手先がいるにや!!」

にこ …「凜にしてはよく考えた…って言いたいけど…ひとつ大きな間違いがあるわ」

凜 …「?」

にこ …「A—RISEは絶対、そんな卑怯なことはしないから!!」

凜 …「びくっ!」

にこ …「いくら凜でも、今後A—RISEの侮辱をしたら、ただじゃおかないわよ!」

凜 …「…」

希 …「まあまあ、にこっち…そんなに恐いこと言ったらいかんよ」

にこ …「わかってるわよ…」

海未 …「客観的に見て、凜の推理も可能性としてはゼロではないかと思えます。ですが…もし犯行が発覚した場合、彼女たちも無傷ではられません。そういうリスクを考えれば、極めて無謀な行為といえます。もちろん、予断は許しません…」

希 …「ウチなあ…えりちの苦手な幽霊の話で、思い出したことがあるんやけど…」

にこ …「幽霊？」

絵里 …「な、なに？突然…」

穂乃果 …「え、これって幽霊の仕業だったの!？」

くつづく

季節外れの怪談話

絵里　：「ゆ、幽霊の仕業？夏でも無いのに、おかしいこと言わないでよ…」

凜　　：「音ノ木坂に、そんな怪談話なんてあったかな？」

海未　：「非化学的ですね」

真姫　：「馬鹿馬鹿しい」

希　　：「待った！待った！誰もそんなん、言っていないやん。早とちりしたらいかんよ…」

絵里　：「幽霊の話じゃないのね？」

穂乃果：「あ、ごめん」

凜　　：「そうだよね…」

希　　：「えー…それは100年位以前のドイツで起きたことやった…」

ここ　：「突然始まったわね…」

絵里　：「それも、落語なの？」

海未　：「違うと思いますが…」

希　　：「雪山の登山で起きたことなんやけど…」

一同　：「ばっ！」

海未　：「なっ!?なぜ一斉に私を見るのですか!?!」

凜　　：「登山と聴いたら…」

穂乃果：「海未ちゃん」

絵里：「条件反射っていうのかしら？」

にこ：「自業自得ね」

海未：「自業自得ってなんですか！」

真姫：「それで…登山がどうしたの？」

希：「男の人2人のパーティーが、途中、吹雪いて…遭難してしまつたらしいんよ」

海未：「そうなんですか…」

一同：「ん？」

希：「海未ちゃん、なかなか、やるやん！」

海未：「!!…い、いえ…決してそのようなつもりでは…」

希：「ふふふ」

海未：「は、話を続けてください…」

希：「ほい、ほい…そんでな…緊急避難的に岩陰でビバークしたんやけど…」

穂乃果：「ビバーク？」

海未：「簡単に言えば、テントも張れず一時避難することです」

穂乃果：「ああ…」

希：「ところが…運悪く…ひとりが死んでしまった…」

絵里：「…」

希　：「幸い、吹雪はやがて収まって：生き残ったもうひとりも、亡くなった男性の遺体をシュラフに入れて、引きづりながら登山を続け：なんとか中腹にある山小屋に辿り着いたんよ」

絵里　：「ぐくつ…」

希　：「山小屋で一息ついたAさんは：亡くなったBさんを雪中に埋め、ピッケルを突き刺し、墓標を建てた。ひとりでの頂上アタックは難しいと、下山することを決めたAさん。この山小屋で一晩、過ごすこととした」

海未　：「はい、登山は『やめる勇気もつとも大事』と言いますから」

希　：「次の日：朝、目覚めると：再び外は吹雪いていた。これはちよつと出られへんなあ：と思っていたところ、彼はある異変に気が付いたんよ」

穂乃果：「なにかあったの？」

希　：「それがなあ：昨日、埋めたはずの遺体が：山小屋の前におつたんよ!!」

絵里　：「ひい!!」

希　：「正確に言えば、入口の前で倒れてたんやけど」

真姫　：「ちよつと絵里！抱きついてこないで…」

絵里　：「希：その話：今ここで話す必要があるのかしら」

海未　：「あのくよろしいでしょうか？遺体を雪の中に埋めたのでしたら、夜のうちに強風で表面の雪が飛ばされて、ついでにそれも動いただけ：ということではないですか？」

希 …「さすが海未ちゃんやね。Aさんも一瞬そうかと思ったらしいんやけど…遺体はシユラフに入れたまま、雪の中に埋めたんよ」

海未 …「!!」

穂乃果 …「だとすると…遺体がそこから這い出てきたことになるよね?」

…「断定はできないわ。その…ファスナーっていうの?…の締め方が余ったとか…条件が揃えば、そんなのどうだって理由がつくわ」

希 …「にこつちの言う通りやね。Aさんも疑問に思いつつ、そういうことがあるかもしれない…ともう一度、彼を雪中に埋葬したんやって…今度は風で飛ばされないよう、重石（おもし）を付けてな」

絵里 …「…」

希 …「吹雪は止まず、Aさんはもう一晩、様子を見ることとした。その明くる日…」

絵里 …「きゃあ!」

希 …「いや、まだ何も言っていないんやけど…」

絵里 …「でも…いたんでしょ?そこに遺体が…」

希 …「正解!」

絵里 …「ほ、ほらあ…」

海未 …「確かにホラーですね」

一同 …「…」

海未 …「えっ?絵里は今、そういう意味で言ったのではないのですか」

？」

希 「これからが面白いとこやのに…えりちと海未ちゃんに全部持ってかれたわあ」

絵里 「面白いとか、面白くないとか…どうでもいいわ」

希 「つれないなあ…」

海未 「私も狙って放ったギャグではありませんが…」

穂乃果 「それで、それで？」

希 「実は次の日も、その次の日も、AさんはBさんを雪中に埋めたんやけどな…翌朝になると必ず遺体が山小屋の前におって…」

穂乃果 「うわあ！」

にこ 「それはさすがに恐いわね！」

希 「ついにはAさんは気が触れてしもうて…自ら命を絶ってしまったそうなの…」

凜 「ど、どうして、それがわかったにや」

希 「Aさんが書いた日誌やね。そこに全て記されておったんですよ。あとから来たパーティーがそれを見つけた…ってワケやね」

絵里 「それでこの話は終わり？」

希 「おしまい」

絵里 「そ、そう…思ったより大したことは無かったわね」

一同 「…」

絵里 「…どうして、みんな怪訝そうな顔をしているの？」

くつづく

そんなことあるの？

海未　：「希らしいオカルトチックな話ですね。それが実話だとしても、そのAさんの思い込みといえますか…：極限状態における幻覚のようなものだったのではないでしようか？ 実際は起こっていないことを、さもあつたかのように感じてしまうという…」

希　　：「そういうことも、ありえるやろうね…：でも…：この事件に関してには、ある仮説があつてな…」

海未　：「仮説…：ですか？」

希　　：「遺体を掘り起こしてたのは、Aさんやたんやないか…：つていう」

一同　：「!？」

にこ　：「自分で埋めて、自分で掘り起こしてるの？」

穂乃果：「だったら気付くよね？」

凜　　：「うん」

真姫　：「…：ひよつとして…：夢遊病？…：」

希　　：「さすが真姫ちゃん！お医者さんの娘やね！」

絵里　：「夢遊病？」

真姫　：「正確には『睡眠時遊行症』って言うの。無意識の状態で起きだし、歩いたり何かをした後に再び就眠するけど…：その間の出来事を記憶していない状態を指すわ。その時間は、30秒から30分まで

の長さになり得る…」

穂乃果：「ひよえ〜」

凜　　：「真姫ちゃん、ウィキペディアみたいにや」

真姫　：「べ、別に…大したことじゃないわよ。医者を目指すものなら、知ってて当然のことだから」

にこ　：「つまり…そのAっていう人は、本人の意識が無いまま、遺体を掘り起こして…朝、起きて自分がしたとも知らず、ビツクリしてた…ってわけ？」

真姫　：「興奮状態のまま眠りに就いたり、精神的なストレスが夢遊病の原因とされているから…吹雪の雪山、パートナーが死亡…という状況で発生したというなら、ないこともないかも…」

穂乃果：「あれ？じゃあ、このあいだの合宿の時、穂乃果が岩の端っここで寝てたのも、夢遊病状態で歩いていったのかな？」

海未　：「あなたにストレスがあるようには思えません…」

穂乃果：「いやいや、それなりにあるんだよ！…海未ちゃんに怒られたりとか、海未ちゃんに叱られたりとか、海未ちゃんに…」

海未　：「もういいです!!それなら私の方がよっぽどストレスが溜まっていますよー!」

穂乃果：「…ごめん…」

真姫　：「…で…どうしてそんな話をしだしたのよ？」

希　　：「ん？真姫ちゃん、ウチに言うてるん？」

真姫　：「他に誰がいるのよ？」

希　　：「そやね…。えつと…えりちを恐がる姿が可愛くて…」

絵里　：「希!!」

希　　：「：なくんてな：」

海未　：「：ひよつとして：上履きの話ですか？」

真姫　：「上履き？：えっ？まさか：」

希　　：「そう：あくまでも可能性のひとつとしてやけど：花陽ちゃん、自覚も記憶もないまま起こしたことやないやろか：なんて思ったりしてな」

にこ　：「前フリが長いわ！」

凜　　：「かよちゃんが、眠ったまま家からここまで歩いて来たってことかによ？」

穂乃果：「それは無理だろう」

希　　：「確かに、眠った状態で：っていうには無理があるやろうね。：でも、そういう無意識の行動って、普段でもたまにあるやろ？」

穂乃果：「うん！あるある！テレビ見ながらお菓子食べてるとき、知らないうちに全部なくなってることとかあるもんね！『あれ？いつの間にか食べた？』みたいな」

海未　：「その例えが適切かどうかはわかりませんが：」

希　　：「まあ、そういうこともありえるのかなあ：っていう、うちの妄言やね。さつき誰かが言うてたけど：こんなことをして誰が得するんやろう：って考えても、思いつかないやもん」

海未　：「はい：」

ことり：「あれ？まだみんな練習始めてなかったの？」

花陽　：「本当だ。私たちが来るの待っててくれたのかな？」

穂乃果：「おお、ことりちゃん！」

凜　　：「かよちゃん！」

ことり：「ごめんね、遅くなっちゃって…そこで、かよちゃんと一緒に
なったんだあ」

海未　：「どこに行ってたのですか？」

花陽　：「あれ？伝わってなかったかな？私はアルパカさんの…」

海未　：「ええ、花陽のことは聴いてますよ。ですが、ことりは…」

ことり：「あれ？穂乃果ちゃんに言ってなかったっけ？…ちよつと
用があつて…」

穂乃果：「ええ！そうだっけ？ごめん全く覚えてないや」

海未　：「まったく、あなたって人は…」

穂乃果：「ひええ…、これも無意識な行動ってやつだよね？知ら
ないうちに聴いていた…っっていう…」

真姫　：「それはただの健忘症じゃない？」

凜　　：「アルツにや、アルツ」

真姫　：「よかつたら、いい病院紹介するわよ」

穂乃果：「お、お願いしようかな…勉強したところも、すぐ忘れちゃう
し…」

海未　：「それとこれとは話が別です!!」

穂乃果：「やつぱり…」

一同　：「あははは…」

海未　：「…では、全員揃ったので練習を始めますよ」

一同　：「は〜い!!」

~^~U~U~

体調不良

：

絵里　：「あれから1週間が過ぎたけど、そのあと特に何も無いわね」

真姫　：「相手が思ったより、私たちが大騒ぎしなかったから、悪戯を仕掛けても無駄だと思ったんじゃない？」

にこ　：「暖簾に腕押し？」

凜　　：「糠に釘？」

穂乃果　：「えつと…鬼に金ぼ…」

海未　　：「いえ、それは違います！」

穂乃果　：「早っ！」

ことり　：「あはっ」

希　　　：「KGBが動いたんや…」

絵里　　：「ないから！」

希　　　：「早っ！」

ことり　：「くすっ」

海未　　：「ところで…花陽は今日もアルパカの世話ですか？」

凜　　　：「うん」

海未　　：「こここのところ、毎日ですね…責任感を持って熱心に仕事を
するのは感心ですが…日に日に練習への参加が遅くなっていますね
…」

にこ　：「あの娘のことだから、サボッてる…ってことはないと思うけど…」

真姫　：「アルパカの調子があまり良くないみたいで『心配だ』とは言ってたわ…」

穂乃果　：「夏バテかかな？」

凜　　：「アルパカが？」

海未　：「もうすぐ冬を迎えようというのにですか？」

穂乃果　：「だよね…じゃあ…ダイエット？」

にこ　　：「アホか…」

絵里　：「真姫は何かわかる？」

真姫　：「アルパカは専門外」

絵里　：「そうなのね」

凜　　：「あ、そうだ！絵里ちゃん、ちよつと、かよちんの様子を見てきてくれないかじゃ？」

絵里　：「私が？」

希　　：「ふふふ…凜ちゃんも意地悪やなあ…」

ことり　：「私が見てくるね！」

真姫　　：「ことりが？」

ことり　：「ちゅん？おかしい？」

真姫　　：「…なんでもない…」

穂乃果　：「確かに、この中でアルパカに一番馴れてるのは、ことりちゃんだもんね！」

絵里　　：「そ、そうね！異論なし！私も適任だと思っわ」

凜　　　：「絵里ちゃん、行きたくないから必死にや」

絵里　　：「な、なんのことかしら？」

海未　　：「では、ことり…お願いしてよろしいでしょうか」

ことり：「はくい！じゃあ、ちよつと行つてきまゝす」

真姫：「…」

希：「どうしたん？合宿が終わつてから、花陽ちゃんどこりちやんが急接近してるのが気になる？」

真姫：「ヴェく…なにそれ、意味わかんない…」

希：「むふっ」

：

ことり：「あれ？あそこにいるのは…確か…かよちゃんと同じクラスの…」

モブA：「…で…だから…」

モブB：「…だし…でしよ…」

花陽：「…でも…」

ことり：「かくよちゃん！」

モブA：「!？」

モブB：「!？」

花陽：「こと…南先輩！」

モブA：「こ、こんにちわ！」

モブB：「こんにちわ…」

ことり：「こんにちわ〜！2人もアルパカさんが好きなの？」

モブA：「えっ？」

モブB：「はい…あ、あんまり近づくと、怒りますよ！」

モブA …「はい、歯を剥き出しにしてガー…って」

ことり：「アルパカさんが？ふふ…大丈夫だよ！ね？」

花陽 …「へっ？あ、はい…」

ことり：「？」

モブA …「あ、あのく南先輩は良くここに来るんですか？」

ことり：「うん！モフモフで気持ちいいから」

モブA …「そ、そうですね…」

モブB …「は、はい、モフモフですよね！」

花陽 …「…」

ことり：「あつ…アルパカさん、具合悪いの？」

花陽 …「えっ？あ、はい…食欲がないみたいで…」

ことり：「そうなんだあ…お医者さんに診てもらった方がいいのかなあ…」

花陽 …「…かも知れません…」

ことり：「お母さ…理事長に伝えておくれ」

花陽 …「はい、お願いします」

ことり：「心配なのはわかるけど…かよちゃんの出来ることも限界があるから」

花陽 …「…そうですね…」

ことり：「じゃあ、今日はここでお別れして、練習行こう？みんなも待ってるよー！」

花陽 …「…」

ことり：「かよちゃん？」

花陽 …「は、はい！練習、行きます！」

ことり …「かよちゃんも具合悪いの？」

花陽 …「ふえ？わ、私は大丈夫ですよ！ご飯もちちゃんと食べてますし！」

ことり …「うん！なら良かった！…とところで、おふたりはどうしてここに？」

モブA …「えっ？あ…少し小泉さん元気無さそうだったから」

モブB …「どうしたの？つて聴いたら、アルパカが具合良くない…つて…」

モブA …「だから少しでも、小泉さんのお手伝いが出来ないかな…つて…ね？」

花陽 …「う、うん…」

モブB …「とはいえ、何も出来ないんですけど…」

ことり …「ありがとう、かよちゃんのこと、心配してくれてるんだね？」

モブA …「も、もちろんです！」

モブB …「友達ですから！…ね？」

花陽 …「う、うん…」

ことり …「？」

モブA …「じゃ、じゃあ、私たちもこれで…」
モブB …「小泉さん、また明日ね」

花陽 …「う、うん…また明日」

モブA …「バイバイ…南先輩、さようなら」

モブB …「さようなら」

ことり …「さようなら」

花陽 …「…」

ことり …「…」

花陽 …「…」

ことり …「…」

花陽 …「…」

ことり …「…」

花陽 …「…」

ことり …「かよちゃん…」

花陽 …「はい?…」

ことり …「何かあった?…」

花陽 …「いえ…」

ことり …「隠し事はダメだからね?…」

花陽 …「!!…はい!ありがとうございます!花陽は大丈夫です!」

ことり：「うん！約束だからね！」

くっくくく

成長してる

：

海未 「ワン、ツー、スリー、フォー…あつ！花陽、危ないです！」

花陽 「ぴゃあ！」

凜 「にやつ!？」

にこ 「痛っ！ちよつと、気を付けなさいよう」

花陽 「ごめんなさい…」

凜 「凜は大丈夫にや」

にこ 「やる気あるの？これで今日ぶつかるのは何回目よ！」

花陽 「本当にごめんなさい！」

にこ 「怪我するなら、アンタひとりでしなさいよね！アタシたちを巻き込まないで！」

凜 「そんな言い方ひどいにや！」

希 「まあまあ…」

海未 「体調…悪いのですか？」

花陽 「!?!…だ、大丈夫です！なんともないです！」

絵里 「そう、ならいいけど…ただ私の目から見ても、今日の花陽は少し集中力を欠いているように思えるわ…」

海未 「…確かに今は、最終予選突破という大きな目標があります

し、ここで頑張らないと…という気持ちはわかりますが…穂乃果の二の舞だけは、踏んで欲しくないのです」

穂乃果：「まくた、海未ちゃんは、そうやって穂乃果を引合いに出すう…」

海未：「そういうつもりではありませんが…」

穂乃果：「まあ、確かに海未ちゃんの言う通りなんだけどさ…。自分で言うのもなんだけど…『良かれ』と思って頑張っても、ひとに迷惑掛けちゃうこともあるんだよね…」

海未：「はい…厳しいことを言いますが…最終予選のステージは、誰ひとり欠けて欲しくはありません。ですから、休む時はしっかり休んで頂かないと…」

花陽：「…そうですね…じゃあ、お言葉に甘えて…今日は帰ります…」

一同：「!!」

花陽：「多分…エネルギー不足です…」

凛：「あんなに食べてるのに!?!」

ことり：「だったら、お菓子持ってるよ!食べる?」

花陽：「ありがとうございます、南先輩…でも、今日は遠慮しておきます…明日からは、もっといっぱいおにぎりを持ってきますね!」

ことり：「かよちゃん…」

花陽：「では、失礼します…」

一同：「えっ?…」

ことり：「本当におうちに帰っちゃた…」

一同：「…」

一同：「…」

一同：「…」

にこ：「どうしたの？なに、みんな黙ってるのよ！練習を続けるわよ！」

凜：「にこちゃんは冷たいにや」

真姫：「あなたの一番弟子でしょ？心配じゃないの？」

にこ：「心配に決まってるでしょ！！！！」

凜：「にこちゃん…」

真姫：「にこちゃん…」

にこ：「お腹が空いた？それは嘘じゃないかも知れないけど『じゃあ帰ります』なんて…今までアイツがあんなこと言ったことある？アイドルに懸ける情熱なら誰にも負けないハズの花陽が…腑抜けた顔して帰って行ったのよ！心配しないワケないじゃない！」

凜：「…ごめん…」

真姫：「そうよね…」

にこ：「でも…だからと言って…簡単には手を差し伸べられない」

希：「にこっち…」

にこ …「花陽はああ見えて、芯の強い娘よ。何かあっても自分で乗り越える力を持つてる。アタシはそう信じてるから…」

絵里 …「さすが、にこね」

穂乃果 …「だけどさ…実際、何かあつたら困るよね?」

希 …「もちろん、それはそうやけど…そうならないように陰から支えてあげるのも大事…ってことなんやないかな」

海未 …「希が…私たちを導いてくれたように…ですか?」

希 …「はて…なんのことやら…」

海未 …「忘れたというなら、それ以上は申しませんが…」

穂乃果 …「ところで、さつき花陽ちゃん、おかしなこと言つてなかった?」

絵里 …「おかしなこと?」

穂乃果 …「ことりちゃんのこと『南先輩』って呼んでなかった?」

絵里 …「そういえば…」

凜 …「言つてたにや…」

ことり …「うくん…そのことなんだけど…実は…ちゅんちゅんしかじか…で…」

海未 …「つまり、話をまとめると…最初の騒動があつた頃から、体型を過度に気にしている様子が見られる…ということですか」

絵里 …「そして…クラスメイトから私たちへの呼び方を指摘されて、妙に畏（かしこ）まっている…」

にこ …「馬鹿じゃないの!?!どっちも今更気にするんじゃないでしよ!」

海未 …「体型維持は気にして欲しいですが…」

凜 …「むしろ、かよちゃんより希ちゃんの方が太っ…」

希 …「ほう、凜ちゃん…ウチに喧嘩売ってるん？あとでワシワシMAXのお仕置きやね！」

凜 …「本当のことを言っただけにや〜」

希 …「ウチは元々この体型やん！別にダイエットが必要なほど、太ったりはしてへんよ…あ、胸は未だ成長中やけどな」

凜 …「そんなことは訊いてないにや！」

にこ …「訊いてないわね！」

海未 …「はい、訊いてないですね！」

希 …「あっ！もしかして、花陽ちゃんも同じ悩みを抱えてるんかな」

絵里 …「胸はダイエットできないものね」

凜 …「そうなの？」

にこ …「知らないわよ！」

海未 …「はい、知りません…」

ことり …「…」

海未 …「どうしましたか？」

凜 …「ことりちゃんも胸の大きさに悩んでるにや？」

海未 …「その気持ちわかりますよ、ことり」

ことり …「えっ？違うけど…」

穂乃果 …「ぷっ！あっさり否定されてる」

凜 …「にや〜！感じ悪いにや！」

海未 …「…ことり、裏切りましたね？」

ことり：「ちゅん？」

希　　：「本題から逸れてるやん？」

にこ　：「誰のせい？」

希　　：「にこっち？」

にこ　：「ぬわんでよー！」

真姫　：「はあ…で…何か気になることでもあるわけ？」

ことり：「うくん…そういえば、さつきもあの2人がいたな…って
思ってた」

穂乃果：「あの2人って…えっと、今、話のあった、ことりちゃんファ
ンの…」

海未　：「花陽のクラスメイトですか？」

ことり：「うん」

凜　　：「あ〜！あの2人、最近、かよちゃんに付きまとってるにや」
にこ　：「ストーリーカー？」

真姫　：「付きまとってる…は語弊があるけど…随分と仲良さ気に
してるのは、その通りかしら。最近はお昼も一緒に食べたりしてる
し、ことある事に花陽の傍にいるのは確かだね」

希　　：「…で…凜ちゃんと真姫ちゃんは、その2人に焼きもちを妬
いてる…と」

真姫　：「ヴェ〜…ど、どうしてどうなるよ」

凜　　：「り、凜はかよちゃんに新たな友達が出来て、嬉しく思ってる
にや…」

にこ : 「2人とも、わかりやすい反応するわね…」

穂乃果 : 「ふくん…でも、ことりちゃんファンなら、なんで花陽ちゃんにくつついてるんだろう?」

絵里 : 「それもそうだけど…その2人は今回のことと関係あるのかしら」

海未 : 「そうですね…ことりの話が正しければ、彼女たちの花陽に対する接近と今回の事件は、時期的に重なっています…」

希 : 「動機はなんやろう?…つてことやね」

海未 : 「はい…」

にこ : 「むしろ、花陽に急接近のクラスメイトに嫉妬した凜と真姫が…激しい嫉妬から、あの娘に嫌がらせをしてる…っていう方が正解だったりして」

凜 : 「怒るよ!」

真姫 : 「いくらにこちゃんでも、さすがにそれは看過できない発言だわ」

希 : 「まあまあ…なんにせよ、1回、その2人に話を訊いてみる必要があるし、そうやね…何か知ってるかも知れんし…」

海未 : 「はい」

真姫 : 「だったら私が…」

希 : 「いや、ここは『当事者』やない人がいいんやないかな? ウチとえりちは被害に遭ってるし…ことりちゃんも2人がファンやと、言うなら除外やね…」

にこ : 「なら、アタシの出番…」

希 : 「にこつちと海未ちゃんは、相手を怖がらすだけやから…」

にこ …「ぬわんでよ！」

希 …「ここは穂乃果ちゃんが適任やね！」

穂乃果 …「わ、私!? …わかった! やってみるよ!」

絵里 …「任せたわよ」

穂乃果 …「OK! みんな泥舟に乗ったつもりでいてね!」

にこ …「沈むわ!」

海未 …「それを言うなら大舟です!」

穂乃果 …「たはは … そうだった …」

くつづく

どっちもどっち

：

穂乃果：「おはよう！」

凜　　：「おお！穂乃果ちゃん！」

花陽　：「お、おはようございます…き、昨日はすみませんでした…」

穂乃果：「いいの、いいの、気にしなくても！本当は今日、お休みするんじゃないかな…なんて思ってただけ、ちゃんと来たんだね！偉い、偉い」

花陽　：「…はい…」

穂乃果：「うん！ところで花陽ちゃんのクラスにさあ、ことりちゃんの熱烈なファンがいるって聞いたんだけど」

花陽　：「!!」

穂乃果：「どの娘がそう？」

真姫　：「今日はまだ来てないみたい…」

穂乃果：「そっか」

花陽　：「そ、それで…どうして穂乃果ちゃんが？」

穂乃果：「なんで穂乃果のファンじゃないのかなあ…って」

花陽　：「ふえっ？」

穂乃果：「そんな変わらないと思うんだけどなあ…穂乃果とことりちやんで。だからそれを確かめてみよう」と

真姫　：「嘘でしょ？そんなことを訊きに、わざわざっ…」

凛 …「どうかしてるにや」

花陽 …「あはは…」

真姫 …「あら、噂をすれば影…よ」

穂乃果 …「この娘たち？」

真姫 …「くっ」

穂乃果 …「おっはよく!!」

モブA …「!?」

モブB …「!?」

穂乃果 …「μ'sのリーダーこと、高坂穂乃果です！」

モブA …「うわっ!お、おはようございます!」

モブB …「おはようございます!」

モブA …「ど、どうされたんですか?」

モブB …「1年生の教室なんか…」

穂乃果 …「うん、ちよつと真姫ちゃんたちに用があつてね!」

モブA …「あつ…ですよねえ!」

モブB …「愚問でした…」

穂乃果 …「ねえねえ、あなたたち、ことりちゃんのファンなんだって?」

モブA …「は、はい!」

モブB …「な、なぜ、それを…」

穂乃果 …「ことりちゃんから聴いたんだ。昨日も会った…って」

モブA …「あ、はい…アルパカ小屋で…」
モブB …「お会いしました」

穂乃果：「ふくん」

モブA …「？」

モブB …「？」

穂乃果：「いや…穂乃果とことりちゃんって…そんなに違うかな？」

モブA …「えっ？」

モブB …「先輩と…ですか？」

穂乃果：「私もそういう熱狂的なファンが欲しいなあ…って思っ
てさ」

モブA …「はあ…」

モブB …「まあ…」

穂乃果：「身長だって、スタイルだって、そう変わらないはずなのに、
この差はなに？なにが違うの」

モブA …「えつと…」

モブB …「その…」

真姫 …「そういうことをムリヤリ言わせるのってパワハラじゃない
い？」

凛 …「そうにや！そうにや！」

花陽 …「う、うん…」

穂乃果：「そうかなあ？」

モブA …「高坂先輩には高坂先輩の良さがあるっていうか…」
モブB …「はい…元気で明るいところとか、それはそれで素敵だと思えます」

穂乃果：「うんうん！だよねえ！」

モブA …「ただ、たまたま私たちは南先輩の方がタイプなだけで」
モブB …「はい…見た目はもちろんですけど、声も話し方も雰囲気も…全てが好きなんです」

穂乃果：「うわぁ…結構、はつきり言うねえ…」

モブA …「えっ？あつ…す…すみません…」

モブB …「べ、別に高坂先輩が嫌だ！と言ってるわけじゃ…」

穂乃果：「な、慰めの言葉なら要らないよ…」

真姫 …「かなりショックを受けてるわね」

凜 …「哀れにや…」

穂乃果：「おっと…チャイムが鳴った！早く教室に戻らないと海未ちゃんに怒られちゃうーじゃあ、みんな、またね！」

凜 …「バイバイ」

花陽 …「うん、またあとで」

真姫 …「そうね、またあとで」

凜 …「ノックアウト寸前だったけど、ゴングに救われたにや…」

モブA …「えつと…なんだったの？」

モブB …「嵐が…吹いたみたい…」

凜 …「いつものことにや」

真姫 …「日常ね」

花陽 …「う、うん…」

：

海未 …「それで…その2人について何かわかったのですか？」

穂乃果 …「何か？って…何？」

海未 …「ですから花陽とのことですよ！」

穂乃果 …「あっ!？」

海未 …「えっ!?!…まさかと思いますが…何も訊いていないのですか!？」

穂乃果 …「あはは…」

海未 …「まったく、あなたって人は…」

穂乃果 …「いや、海未ちゃん！冷静に考えて…だよ…仮に穂乃果がその任務を遂行しようとしたとしても、花陽ちゃんがいる前じゃ、訊くに訊けないじゃん！『あなたたちは花陽ちゃんに何かしましたか?』なんて」

海未 …「それはそうですが…」

穂乃果 …「だから、今はそれをする為の事前準備っていうか…種蒔きっていうか…ねえ、ことりちゃん!…ってあれ?…ことりちゃんは?…」

海未 …「それが一緒に教室まで来たのですが、そのあとすぐに『用がある』と出て行ってしまっ…」

穂乃果 …「えっ?」

海未 …「ことりのことですから、ホームルーム前には戻ってくると思いますが…」

穂乃果 …「へえ…」

：

希 …「理事長の娘さんが、授業サボったりしたらあかんのんちゃう?。」

ことり …「!!…あつ…そういう生徒会副会長さんも…おサボりはいけませんねえ」

希 …「ウチはお腹痛くて、保健室に行ったことになってるんよ」

ことり …「そうなんだあ…じゃあ、私もお母さんのところに行つてた…つてことにしようかなあ」

希 …「職権乱用や」

ことり …「うふっ」

希 …「まあ、それじゃあ、今の状況はお互い様やっていうことで…」

ことり …「うん」

希 …「それで…こんなところで何してるん?アルパカのお世話なら、花陽ちゃんの担当やろ」

ことり …「ちよくつと気になることがあつて…。そういう希ちゃんは?。」

希 …「!!…偶然にも…ことりちゃんと一緒やねん」

ことり …「へえ…」

希 …「…で、ことりちゃんの気になることつて…」

ことり …「うくん…それは…まだ秘密…」

希 …「ん?。」

ことり：「ごめん！まだそれは言えないの…」

希　：「今回の件…まだ全容が掴めてへんけど…ことりちゃんも容疑者のひとりなんよ」

ことり：「ことりが?」

希　：「まあそれを言ったら、授業をサボってここにいるウチも、充分怪しい人なんやけどねえ」

ことり：「あはは…」

希　：「μ'sの中に犯人がいる…なんて思いたくはないんやけど…まだ確信が持てないんよ」

ことり：「確信?」

希　：「そやから、ウチもここに来た理由は、明かせない…」

ことり：「…」

希　：「お互い様やろ?」

ことり：「はい」

希　：「うむ、よきに計らえ」

ことり：「あはっ…じゃあ、ことりは先に戻りますね」

希　：「もう用は済んだん?」

ことり：「うん！昨日は暗くてよくわからなかったけど…」

希　：「?」

ことり：「こつちの話で…すーあ、みんなにはここに来たこと内緒にしておいてくださいね！」

希　：「そうやなあ…それを話したらウチもここにいたことバレ

ちやうしなあ」

ことり…に…っ

希 …「悪い娘やね」

ことり…「えへっ…でわ、でわ…またあとで…」

希 …「ほな…」

希 …「…」

希 …「…」

希 …「!!」

希 …「小屋の奥に落ちてるのは…」

希 …「…おかゆ？…いや…違う…アレやんか!!…あかん、もろ見てしもうた…うえつぶ…もらいゲーしそうや…」

…つづく…

怪しいふたり

：

にこ　：「あんたたちだけ？」

穂乃果　：「みたいだね。」

にこ　　：「ほかの連中は？」

凜　　　：「かよちゃんは、アルパカさんのところに行ってるよ」

にこ　　：「まったくアイツは、アルパカとμsとどっちが大事なのよ」

穂乃果　：「海未ちゃんも、弓道部に顔を出すって…なんか、来週大会があるらしいんだ。みんなには迷惑掛けたくない…って黙ってたみたいだけど」

凜　　　：「そうなんだ！それじゃあ、応援に行かないと！」

にこ　　：「それが迷惑だ！って言ってるんじゃないの？弓道ってよく知らないけど、精神の集中が大事なんでしょ？アンタたちみたいにするさいのがギャーギャー騒いでたら、それどころじゃない…ってことじゃない？」

凜　　　：「その言い方は酷いじゃ！」

穂乃果　：「だよね！穂乃果たちだってTKOくらいわかるよ」

にこ　　：「それを言うならTPOよ！」

凜　　　：「どういう意味じゃ？」

にこ　　：「えっ？えつと…タイム…プリーズ…オーケー？」

穂乃果　：「おお…」

凜　　　：「やるじゃ」

絵里　　：「タイム…プレース…オケーション…時と所と場面じゃない？」

穂乃果：「おお、絵里ちゃん！」

凜：「やるにや！」

にこ：「何？盗み聴き？」

絵里：「今、来たところよ。入ろうと思ったら、にこのマヌケな説明が聴こえてきたから…って…物の見事に…アナタたちしか居ないのね」

にこ：「物の見事に…って」

絵里：「他意はないわ」

にこ：「ありありじゃない」

穂乃果：「海未ちゃんは弓道部、花陽ちゃんはアルパカ…までは判明したよ」

凜：「真姫ちゃんは、希ちゃんに呼ばれたって言ってたけど…」

絵里：「それは私も聴いたわ。ちよつと真姫に相談したいことがある…って」

にこ：「ふくん…」

絵里：「ことりは？」

穂乃果：「やっぱり、用がある…って。内容までは知らないけど」

絵里：「…そう…」

にこ：「ラブライブの決勝が控えている…って言うのに、みんな、なに考えてるのかしら」

絵里：「…そうね…」

：

真姫：「アルパカ小屋？前にも言ったけど、私は獣医じゃないから、診察なんて出来ないわよ」

希：「そうやね」

真姫：「じゃあ…」

希：「真姫ちゃんにどうしても見てほしいものがあってな…」

真姫 …「なに？」

希 …「ゲー…なんやけど…」

真姫 …「ゲー?…っ…音階のソのこと?」

希 …「それはG(ゲー)やろ?」

真姫 …「合ってるじゃない」

希 …「いや、そやからそのゲーやなくて…」

真姫 …「マジックでも覚えたの?」

希 …「なんでアルパカ小屋で芸を披露しなきゃいけない?」

真姫 …「じゃあ…その…男の人同士の…」

希 …「ウチの学校は女子高やから、レズはおっても、ゲイはおらんちやう?」

真姫 …「…」

希 …「そこは引くところやうやん」

真姫 …「はあ?じゃあ、なんなの?意味わかんない」

希 …「ウエツ…つてなる方の…」

真姫 …「ああ…嘔吐のことね…ゲロならゲロって言えばいいじゃない」

希 …「いやくん真姫ちゃん、アイドルがゲロだなんて…」

真姫 …「…」

希 …「ウチにも羞恥心つてものがあるんやで」

真姫 …「…それで…それがどうしたの?」

希 …「これなんやけど…」

真姫 …「えっ!いきなり見せないでよ!」

希 …「言うたやん、ゲーを見て欲しい…つて」

真姫 …「そうだけど…!!…この吐瀉物（としゃぶつ）って…」

希 …「なあ、真姫ちゃん…アルパカってご飯食べるんやろか…」

真姫 …「どうかしら？私は聴いたことないけど…」

希 …「そうやろ…」

真姫 …「海苔も食べないと思うし、鮭も食べないと思うわ」

希 …「さすが真姫ちゃん、お医者さんの卵だけあって、冷静な観察力やね」

真姫 …「出来れば私だつて見たくないけど…」

希 …「ウチもや…暫くお鍋のあとのおじやは食べられへん…」

真姫 …「そういうこと言うのにやめてよ」

希 …「でも、真姫ちゃん、お医者さんになったら、手術の後でも、焼き肉食べたりするんやろ？」

真姫 …「知らないわよ…って、こんなものを見せる為に、ここに呼んだの？」

希 …「ここにそれがある理由…真姫ちゃんならどう考えるんかな…って…」

真姫 …「!!」

希 …「…そういうことやね…」

…

海未 …「ふう…久しぶりに矢を放ちましたが…μ sの練習とは違った疲れがありますね…少し、外に出て気分転換をしましょう…」

海未 …「!?!…おや、あれは花陽と…ことりじゃないですか…何をしてるのでしよう、こんなところで…」

海未　：「花陽は…泣いているのでしょうか…邪魔するつもりはありませんが…一連の事件と関係があるかも知れません…声を掛けてみましょう」

海未　：「花陽、ことり、どうしたのですか？」

花陽　：「!!」

ことり：「海未ちゃん！」

海未　：「部活はどうしたのですか？」

ことり：「海未ちゃんこそ」

海未　：「私は…見ての通り、弓道部の練習に参加してました。みんなには黙ってたりましたが、大会が来週あるもので…」

ことり：「えっ?」

海未　：「時期が時期ですし、*μ*、*s*を疎かにするつもりはないのですが…かと言って、こちらも退部したわけではありませんので…」

ことり：「そうなんだ…。だったら、ちゃんとやってくれば…みんなで応援に行かなきゃ」

花陽　：「うん」

海未　：「いえ…それには及びません。気持ちはありますが
：『フレ、フレ、頑張れ』という競技ではありませんから」
ことり：「ふふっ…じゃあ、静かに観てるね」

海未　：「もし来ていただけるのであれば、そうして欲しいですね。
…で、あなたたちは…」

ことり：「えっと…」

花陽　：「花陽が呼び出したんです」

ことり：「えっ？」

海未：「えっ？」

花陽：「ことりちゃんに付き合ってください…って告白しました」

ことり：「えっ？」

海未：「えっ？」

花陽：「弓道場の裏で告白したら、上手くいくって聞いたんです…」

海未：「そうなんですか？」

花陽：「恋の矢が刺さる…って」

海未：「初耳ですが…」

花陽：「ラブアローシユート♡です」

海未：「えっ!？」

花陽：「なくんて…どうもその噂は、嘘だったみたいです…ことりちゃん、さつきのごとは忘れてください！」

ことり：「かよちゃん…」

花陽：「では…私は部活に行きます！」

海未：「花陽！」

ことり：「かよちゃん！」

海未：「行ってしまいましたね…」

ことり：「うん…」

海未：「花陽は…さつき泣いていました…ことりは…断つたのですか…」

ことり：「…」

海未：「私が言うのも何ですが、二人はとてもお似合いのカップルだと思います。確かに凜や真姫のことを考えると、胸が痛いですが…」

ことり：「違うの！」

海未：「!？」

ことり：「違うの、海未ちゃん！」

海未：「違う？何がですか？…あつ…断つたわけではないのですね？」

ことり：「そうじゃないの…」

海未：「はて…」

ことり：「お願い！今、見たことはみんなに黙って欲しいの…」

海未：「は、はい…私は人の恋路を邪魔するほど、野暮ではありませんよ」

ことり：「そういうことじゃないんだけど…」

海未：「はあ…」

ことり：「とにかく、かよちゃんとことりがここに来たことは、みんなには内緒にして。お願いい♡」

海未 …!!…も、もちろんです。ことりの頼みですから、それは約束しますよ」

ことり：「ありがとう！海未ちゃん、だ〜い好き！」

海未 …だ、抱きつかないでください！わ、私はまだ、練習がありますので…一旦、戻りますよ！」

ことり：「は〜い！頑張つてね！」

ことり：「私も練習に行かないと…」

〜つづく〜

W ↓ 草生えた…的な…

…

にこ …「それにしてもアイツら遅いわね」

穂乃果…「海未ちゃんは別として、他の人たちは何をしてるんだろう…」

絵里 …「私たちだけでも、先に練習してましよう」

凜 …「うん」

真姫 …「私たちもすぐ行くわ」

希 …「遅くなってもうた」

穂乃果…「おお、真姫ちゃん、希ちゃん！」

にこ …「相談は終わったの？」

希 …「相談？」

にこ …「真姫ちゃんとコソコソなにか話してたんじゃないの？」

希 …「コソコソって…ん？にこっち、妬いてるん？」

にこ …「はあ？」

希 …「安心しい…えりちに告白するには、どうしたらいいんやろ？…って訊いてただけやから」

絵里 …「まあ！」

真姫 …「それ、真に受ける？」

にこ …「アホくさ…」

花陽 …「遅くなりました！」

凜 …「かよちゃんも来たにや！」

にこ …「遅い！」

花陽 …「すみません…」

にこ ……アルパカの世話も大切かも知れないけど、少しはこっちのことも気を使いなさいよ」

花陽 ……「う、うん…」

希 ……「ん？花陽ちゃんはアルパカ小屋に行ってたん？」

花陽 ……「へっ？う、うん…」

希 ……「…？…」

真姫 ……「…？…」

花陽 ……「？」

ことり ……「ごめくん、遅くなっちゃった！」

穂乃果 ……「そして、ことりちゃんがゴメンで登場！」

にこ ……「どこかで聴いたことあるフレーズね…」

凜 ……「ことりちゃんは何してたんにゃ？」

ことり ……「ことり？ことりは…えつと…海未ちゃんの激励？あ、海未ちゃん、来週、弓道の大会があるって…」

真姫 ……「そうね…忘れてたけど、そう言えば海未って、弓道部だったのね」

希 ……「来週大会なんや！」

穂乃果 ……「みんなには気を遣わせるから黙ってて…って言われたんだけどね」

希 ……「そんな水くさいやん！これは応援に行かないと…やね」
ことり ……「うん！でも、来るなら静かにして下さい…って言ったよ」

希 ……「うくん…ウチらには一番苦手なことやね」

絵里 :「ウチら…って、私を含めないでよ」

真姫 :「右に同じ」

希 :「つれないなあ…ウチらは『一心同体、少女隊』やん！」

にこ :「ぷっ！また随分昔のネタ、ひっぱり出してきたわねえ」

穂乃果 :「なにそれ？」

花陽 :「80年代のアイドルグループが出ていたCMのキャッチコピーです」

凜 :「希ちゃんは博学だにや」

希 :「勉強には、なくんの役にも立たんけど」

真姫 :「いるわね、そういう人…」

凜 :「凜、思うんだ！希ちゃんは絶対、歳を誤魔化してる！…って。本当は50歳くらいなんだよ」

希 :「だとしたら…ウチ、メツチャ若いやん！美魔女やね、美魔女！」

にこ :「はあ？」

希 :「ハッ!!」

一同 :「!?!」

希 :「それでこないだのハロウィーンの衣装、ウチは魔女やったん？」

ことり :「ちゅん？」

真姫 :「関係ないんじゃない？」

花陽 :「あはは…」

にこ :「まったく…真顔で何を言い出すかと思えば…アンタたちと喋ってる調子狂うわ」

絵里 :「アンタたち…って、私を含めないでよ」

真姫 :「右に同じ」

にこ …「だあ！かあ！らあ！そういうのいいから！遅刻組はさっさと着替えて、上に来なさいよ！私たちは先に行くわよ！」

穂乃果 …「いつてらっしやくい」

凜 …「バイバクイ」

にこ …「じゃあ…つて、アンタたちも一緒に行くのよ！」

一同 …「あははは…」

…

穂乃果 …「うう…風が冷たいねえ…」

にこ …「なんだかんだで、もう11月も半ばだからねえ」

凜 …「炬燵が欲しいにや」

穂乃果 …「おっ！いいねえ！」

にこ …「なにバカこと言ってるのよ！そこはストーブでしょ」

絵里 …「どっちもどっちじゃない…」

凜 …「絵里ちゃんは寒くないにや？」

絵里 …「そこまでは…」

穂乃果 …「さすがロシア人！」

絵里 …「クォーター！4分の1しかロシアの血は混じってないわよ」

にこ …「育ってきた環境の違いじゃない？」

絵里 …「確かに、それはあるかも…なんて話をしてても、身体は

暖ったまらないわ！早くランニングから始めましょう」

凜 …「ラジャーにや！つて…あれ？」

絵里 …「どうしたの？」

凜 …「下を見て！チョコレートでなにか書いてあるにや！」

絵里 …「えっ？」

穂乃果 …「チョコレートで…」

にこ …「なにか書いてある？」

：

真姫 ……で、あなたたちが上がってきたときには、すでにこれが書いてあった…」

穂乃果 ……「そうなんだよ！ナスカの地上絵か！っていうくらい、こんなにおつきく！」

真姫 ……「それは見ればわかるけど…」

希 ……『※デブはタヒね!!』…』

凜 ……「どういう意味かによ？」

ことり ……「単なる落書きじゃないのかな？」

穂乃果 ……「ならいいんだけどさ…でも気になるじゃん！上履き事件とかあったばっかりだし…」

にこ ……「…」

花陽 ……「…」

絵里 ……「誰が書いたのかしら」

真姫 ……「こここの出入り口は、施錠されてるワケじゃないし…誰でも入れるから…」

希 ……「お昼をここで食べる人もおるしね」

凜 ……「でも、sがここで練習してることは、みんな知ってるよね？敢えて、こんなこと書いて行くかによ？しかも、こんなに大きく」

にこ ……「アタシたちへの脅迫と見て間違いないわね」

一同 ……「脅迫!?!」

にこ …『タヒね』はネット用語で『死ね』っていう意味よ」

一同 …「!!」

にこ …「カタカナの『ネ』と漢字の『申』って書いて『ネ申』で神つてしたりするのと同じ」

穂乃果…「ああ、なるほど…そう言われてみれば『死』って見えなくもないね」

凜 …「じゃあ…『デブは死ね!!』って書いてあるってこと?」

にこ …「単なるイタズラ書きで残すような言葉じゃないわ」

絵里 …「穏やかじゃないわね」

凜 …「凜たちがここで練習していることを知ってて、書いていったの?」

穂乃果…「だとすると…このデブって…」

凜 …「希ちゃん?」

希 …「ウチなん?」

凜 …「他にいないにや!」

希 …「あとでワシワシMAXスペシャルの刑やからね!」

凜 …「にや〜!!」

絵里 …「希…あなた、なにかした?」

希 …「はて…なんやろ?…恨まれるとしたら…えりちに手え出したことくらいやろか…」

穂乃果…「手え出したの?」

凜 …「それは重罪だにや」
にこ …「責任問題だわ」

絵里 …「ちよつと、希！変なこと言わないでよ」

希 …「むふっ」

絵里 …「笑ってる場合じゃないわよ」

真姫 …「その前に、これが本当に私たちへの脅迫かどうか…断定するには早すぎると思うんだけど」

希 …「そうやね。このままやと、ウチがデブって認めてしまうことになりそうやもんね」

凜 …「いや、そこは否定できないにや！」

希 …「凜ちゃん…ワシワシされ過ぎて、元々ペツタンコな胸が、
抉（えぐ）れて無くなつても知らんよ！」

凜 …「にや〜！希ちゃんなんかタヒんじやえ〜！」

一番 …「あははは…」

花陽 …「…」

〜つづく〜

ことりのおやつ

がちや…

一同 …びくっ！

モブA …「あの…失礼します」

穂乃果 …「びつくりしたあ!!…あら？あなたは今朝の…」

モブB …「あつ…はい…」

海未 …「その方たちは？」

穂乃果 …「例のことりちゃんファンだよ…」

海未 …「!？」

真姫 …「今、練習中なんだけど…何か用？」

花陽 …「ま、真姫ちゃん！」

モブA …「あつ、ごめん…邪魔するつもりはないんだけどさ…えつと…これ差し入れ…」

穂乃果 …「差し入れ？…うわあ、えっ？チーズケーキ？」

ことり …「ちゅん？」

モブA …「たいした物じゃないですけど…少しでも皆さんの力になれば…って思いました…ね？」

モブB …「うん。私たちもμ'sの一員になれたらいいんですけど、それは無理そうなので…こんなことしかできませんが…」

穂乃果：「全然、全然！こういうことは大歓迎だよ！」

絵里：「お断りするわ！」

一同：「えっ！」

穂乃果：「絵里ちゃん？」

絵里：「あなたたちの気持ちはとっても嬉しく思うわ。まずは素直に：ありがとう：と言うべきね。でも、学校の存続が決まった今、私たちがμsを続けている理由は『ラブライブに出場したい！』という至極、個人的な理由。だから一般生徒に『施（ほどこ）し』を受けてまで応援してもらおう：というのは、何か違う気がするの。だから：その：気持ちだけは頂くわ」

希：「久々に賢い方のえりちやね」

穂乃果：「えく、せつかく、持つてきてもらったんだから、頂くのは頂こうよ！ナマ物だし：持つて返れ！ってというのは、逆に失礼だよ！」

絵里：「それはわかってるわ。2人の気持ちは本当にありがたいと思ってる。だけど、これを良しとして受け入れてしまうと、次から次へと差し入れやらプレゼントを頂くようになって、やがて歯止めが掛からなくなるわ：なんてことをいうのは：ちよつと自惚れすぎかしら？」

にこ：「まあ、アタシはμsの実績を考えれば、なんかしら感謝の気持ちを形にして欲しい：とは思ってるけどねえ」

絵里：「にこ……」

凜：「絵里ちゃんは真面目すぎるにや」

絵里：「でもね、凜：私たちはアイドルである前に学生なの。少し目立つ存在ではあるかも知れないけど、むやみやたらな物品の授受は避けるべきだと思うわ」

モブA ……」

モブB ……」

希 ……」さすが、えりち…元生徒会長らしい意見やね」

絵里 ……」私、間違ったこと言ってるかしら？」

海未 ……」いえ…絵里の言う通りだと思いますが…」

希 ……」そやけど…穂乃果ちゃんの言うことも理解できるんよ。
折角の好意を無碍に断るのも、どうなんやろか？」

絵里 ……」希…」

希 ……」今回はありがたく頂いておけば？今後については…まあ
校内でアナウンスとかして、周知徹底すればいいんじゃない？」

穂乃果 ……」は、いい、じゃあ、それは現生徒会の私たちが引き受けま
す」

海未 ……」また勝手に…」

ことり ……」ふふふ…」

絵里 ……」まったく…仕方ないわね…」

穂乃果 ……」…というわけで…そのチーズケーキ、ご馳走になります
！」

モブA ……」あ、はい…どうぞ…」

穂乃果 ……」…って…そういえば、何故チーズケーキ？」

ことり ……」うわあ…！…もしかしてこれ…あのお店で出たばかりの
新作!？」

モブA ……」やっぱり、わかりますか？」

ことり ……」うん…この間、かよちゃんと食べて帰ろうと思ったんだけ

ど：行き損なっちゃったから…ね？」

花陽　：「あっ…」

モブB　：「だったら調度よかったです！南先輩はチーズケーキ大好きだって聞いたので…」

ことり：「ちゅん？」

モブB　：「えっ？あっ…小泉さんに教えてもらいました。他にもマカロンとかクッキーとか、自分で作るほどのお菓子好きだって…」

穂乃果：「おお！なるほど、そういうことか！」

凜　　：「どうしたにや？」

穂乃果：「えつと…つまり…」

真姫　：「穂乃果、その話はまたあとでしましょう」

穂乃果：「えっ？あ…うん…」

凜　　：「？」

穂乃果：「じゃあ、頂くね…」

凜　　：「あれ…1、2、3…全部で8つしかないよ？ひとつ足りないにや？」

穂乃果：「あ、本当だ…μ sは9人いるって知らなかった？」

モブB　：「い、いえ…もちろんそんなこと無いです。ちゃんと知ってます」

モブA　：「実は…残りのひとつは…これなんです！」

一同　：「お、おにぎり？」

凜　　：「あっ、凜、これ、知ってるよ！今、コンビニで大ヒットしてる『地獄のおにぎり』だね？かよちんの好物にゃ」

穂乃果：「地獄のおにぎり？」

凜　　：「ひとつのおにぎりの中に具が3種類入ってて…確か…陸上強豪校の寮母さんが最初の作ったんじゃないかな？」

穂乃果：「へえ…」

凜　　：「とにかく美味しくて、ついつい食べすぎちゃうんだって…」

穂乃果：「それで後からダイエットに苦しむことになる…と。それは確かに『地獄』だね」

海未　：「なぜ私の顔を見ていうのですか？」

穂乃果：「いや…別に…」

モブA　：「小泉さんは無類のお米好きだと知っていますので…チーズケーキよりはこっちのほうがいいかと…」

モブB：「はい」

花陽　：「う、うん…ありがとうございます」

海未　：「あまり、嬉しそうじゃありませんね？」

花陽　：「そ、そんなことないよ！私だけひとり、気を使ってもらって悪いなあ…って」

穂乃果：「なあんだ…強制ダイエットのことを思い出して、憂鬱になってるのかと思ったよ」

海未　：「ですから、なぜ私の顔を見て言うのですか？」

凜　　：「かよちんがおにぎりなら、次の差し入れは、カップラーメンがいいにゃ！」

穂乃果：「えっ？そんなリクエストありなの？じゃあ穂乃果は菓子

パンがいいかな？」

希 …「ウチは焼肉やね」

真姫 …「それ、差し入れて言わないわよ」

穂乃果 …「絵里ちゃんは？」

絵里 …「私はチョココレ…だから、今後、差し入れは頂かないって
言ってるでしょ!!」

一同 …「あはは…」

モブA …「では…私たちはこれで失礼します…」

モブB …「どうも、お騒がせしました…」

穂乃果 …「うん、わざわざありがとう」

海未 …「あとで、ごちそうになります」

モブA …「はい…では…つて…あれ？」

モブB …「どうしたの？」

モブA …「下に何か書いてない？」

一同 …「!!」

モブB …「あつ…本当だ…」

モブA …「…デブは…死…ね…」

モブB …「えっ？」

モブA …「えっ？」

穂乃果 …「ああ…これね…誰が書いていったんだろう？ 私たちが来た
ときには、すでにあっただ」

にこ …「まったく、くだらないことをするヤツがいるのよねえ」

凜 …「本当だよ。希ちゃんに喧嘩売るなんて、どうかしてるにや

！」

モブA …「えっ?」

モブB …「東條先輩に喧嘩?」

希 …「そやから凜ちゃん、ウチはちよつとばかり胸が大きいだけやから…勝手にデブ扱いせんといて!」

モブA …「ちよつとばかり…」

モブB …「…ですか?」

希 …「言えんやろ? 本人たちを目の前にして『カップにして7つも違うやん』…なんて」

凜 …「聴こえてるにや」

にこ …「B、C、D…H? Hなの?」

海未 …「エッチ…ですね…破廉恥です!!」

モブA …「そ、それはそれとして…こんなこと書いてあつたら…」

モブB …「いい気はしないですよね」

絵里 …「でも、固有名詞が書いてあるわけじゃないし、そもそも私たちあてに書かれたものかどうかもわからないから…気にしないようにしているわ」

海未 …「はい、今は大事な時期ですし…練習に集中しなければ…なので」

モブA …「そうですね! 改めてですけど…最終予選、頑張ってくださいー!」

モブB …「はい、応援してます!」

絵里 …「ありがとう! 当日は、お友達をいっぱい誘って観に来てね

！」

穂乃果：「ああ！それそれ、それが大事！ファーストライブみたい
に幕が開いたら、誰もいなかった：：なんてことはゴメンだもんね！」

モブA　：「はい！」

モブB　：「みんなで観にいきます！」

絵里　：「ありがとう。じゃあ、楽しみに待っててね」

くつづく

伝える…伝える

：

海未 …「さつき練習中に、穂乃果が言い掛けたことですが…」

穂乃果 …「なんだつけ？」

海未 …「差し入れをしてくれた1年生のことですよ」

穂乃果 …「ああ…」

海未 …「なんとなく、花陽とことりには聴かせたくなかったもの
すから…」

穂乃果 …「えっ？…うん？…そうなの？」

海未 …「なんとなく…です」

穂乃果 …「…」

海未 …「誤解しないでください、別に仲間外れにするとか、そうい
うことではありませんから」

穂乃果 …「そうは思っていないけど…」

海未 …「あの時穂乃果は…あのふたりが、ことりの情報を聴き出す
為に、花陽を利用している…と言いたかったのではないでしょう
か？」

穂乃果 …「利用している…って言い方は、どうかと思うよ！…そう
じゃなくて、ことりちゃんのが好きで、でも直接は色々聴けない
から、花陽ちゃんに教えてもらってるんじゃないかな…って…あれ？
同じ意味かな」

海未 …「いえ、すみません…私の言葉が過ぎました。言い方ひとつ
で、ニュアンスが変わりますね…。はい、彼女たちが、純粋にことり
ファンであることは、間違いないと思います。それは否定しません」
穂乃果 …「穂乃果にも、あんな熱心なファンがいてくれたらなあ…毎
日、差し入れ食べ放題なのに」

海未 …「ふふふ…まったたく、あなたって人は…」

穂乃果 …「へへへ…でも、それがどうかした？なんでことりちゃんた

ちに聴かれちゃいけないの?」

海未 :「…こここのところの2人の様子…なんとなくおかしいと思
いませんか?」

穂乃果 :「へっ?ま、まあ…でも花陽ちゃんはあることがあったし
…」

海未 :「では、ことりは?」

穂乃果 :「ん?」

海未 :「単独行動が増えていると思いませんか?今日も私たちと
は一緒に帰らずに、部室に残っているようですし…」

穂乃果 :「あつ、いや…でも…衣装のこととか、理事長に報告に行っ
たりもあつたし…ねえ?」

海未 :「はい…それはそうですが…」

穂乃果 :「えっ?まさか、ことりちゃんも今回の事件に関わってる
…っていうの?」

海未 :「…それは…」

穂乃果 :「…」

海未 :「よくわかりません」

穂乃果 :「ズコッ!」

海未　：「ですが…1年生のあの2人…花陽…ことり…今は点と点
でしかありませんが…いずれ線となるかもしれません…」

穂乃果　：「…」

海未　：「もちろん、取り越し苦労に終われば、それはそれでよいの
ですが」

穂乃果　：「希ちゃんは？」

海未　　：「希…ですか？」

穂乃果　：「さっきの…屋上の落書き…」

海未　　：「えっ？あ、あれは…希を指したものでしょうか？」

穂乃果　：「やっぱり、違うよねえ…」

海未　　：「ひよっとしたら…穂乃果のことかもしれませんよ」

穂乃果　：「むっ!？」

海未　　：「あなたは私が目を離すと、すぐにサボりますから」

穂乃果　：「だとしたら、あれを書いたのは…海未ちゃんってことにな
るよね？」

海未　　：「そうかも知れませんか？」

穂乃果　：「残念ながら、あれからはちゃんと適正体重をキープしてま
すよ…だ！」

海未　　：「はい、頑張ってくださいね。太ったら…『死が待っている』
ようですから…」

穂乃果　：「ゴクツ…う、うん…そうだね…頑張るよ…」

：

絵里　　：「それで…希はあの落書きの犯人に心当たりはないの？」

希　　　：「ん？えりちまでウチをデブ扱いするん？」

絵里 …「そ、そういうわけじゃないけれど…」

希 …「うくん…ウチが自覚ないだけなのやろか…にこつちはどう思う?…」

にこ …「…知るか…」

希 …「…と、まあ…にこつちみたいなのに、ウチの、この『超絶ダイナマイトボディ』に嫉妬されることはあるかも…やけど…」

にこ …「…アホか…」

絵里 …「じゃあ、あれは誰がなんの為に?…」

希 …「単なる悪戯…って言っても納得しない感じやね」

絵里 …「そうね…」

にこ …「…」

絵里 …「にこ?…」

にこ …「…アンタの言う通り、嫉妬かもね…」

希 …「!!」

絵里 …「!?!」

にこ …「ただ、希ひとりに対して…って言うよりは、*μ*、*s* に対する…って言う方が正しいかも知れないけど…」

絵里 …「えっ?…」

にこ …「『出る杭は打たれる』ってことよ」

希 …「必ずしも、ウチらがこの学校で望まれた存在やない…ってことやね」

にこ …「まあ…特にアタシなんか、ずっと日陰の立場だったから、

急に『スターぶってるんじゃないわよ』って思ってるヤツが多いかも」

希 …「それを言ったらウチらもそうやね」

絵里 …「私たちが…ここに無関心だったから？」

にこ …『今さら、日和ってるんじゃないわよ！』ってね…」

絵里 …「…そう…そうかも知れないわね…」

希 …「にこつちもそう思ってるん？」

にこ …「さあね…」

絵里 …「…」

にこ …「でも…言わせておけばいいのよ、そんなのは…」

絵里 …「にこ…」

にこ …「アタシたちは、やりたいことをやる！もう、廃校がどうか関係なくなっただんだし、ラブライブでA—RISEに勝って、本大会に出場する！本大会で優勝する！…誰にも邪魔させないんだから！…だから…その為にはアンタたちの力が必要なの。もう、過去に何があつたかなんて、どうだっていい！今のアタシには、アンタたちが必要なのよ!!」

絵里 …「…にこ…」

希 …「嬉しいなあ！にこつちから、そんな言葉が聴けるなんて！なあ、録音するから、もう一回言って」

にこ …「言うか！」

希 …「むふっ」

絵里 …「ふふっ」

にこ …「な、なによ…えっと…違うわよ、アタシが言いたかったことは、そういうことじゃなくて…例えば…嫌いな相手がいるなら『ブス』『デブ』『チビ』『ハゲ』くらいの悪口は言うわよ。実際そうじゃなくともね…」

希 …「にこっちもそうやって、ネットに書き込んでたん？」

にこ …「そう、相手を貶めるにはね…って何を言わせるのよ！」

絵里 …「…」

にこ …「何よ…その目は…ふん！やってたわよ!!…μ'sに入るまではね…。だから、もし落書きの犯人が、そういう動機だとしたら…気持ちはわからなくは無いわ」

絵里 …「にん…」

にこ …「でも…今は…反省してるし、自分が如何に卑怯なことをしてたかって、後悔してる…」

絵里 …「…うん…」

希 …「そんなら、そんな犯罪者の心理に詳しいにこっちの見解は？」

にこ …「ぬわんでそうなるのよ!!」

希 …「にひひ…」

にこ …「誰が犯人だなんて、わからないわよ…ただ、気になることはある…」

希 …「ん？」

にこ …「一般人は…『タヒね』なんて文字は使わない…」

希 …「ほほう…」

絵里 …「どういうこと？」

にこ …「ネット用語よ…完全に…」

絵里 …「えっ？」

にこ …「何かの拍子に知ったかも知れないし、そういう言葉を調べて使った可能性もあるけど…普通は使わないでしょ？『タヒね』なんて言葉」

絵里 …「ええ…」

希 …「もっと大事なことは…自分が知ってても、相手に伝わらなかったら意味ない…ってことやね」

にこ …「そう。例えばアンタが『タヒね』って脅かされても、意味がわからなかったら恐がることはないでしょ？」

絵里 …「そ、そうね…」

にこ …「つまりアレを書いた『犯人』は『対象者』が『タヒね』って言葉を知ってる前提で書いたっていうことよ」

絵里 …「にこは…知っていた…」

にこ …「そうなるわね…」

絵里 …「じゃあ…あれはにこが書いた言葉なの？」

にこ …「…言っただでしょ！アタシはアンタたちの力が必要なのよ」

！こんな大事な時にそんなくだらしないことするハズないじゃない！」

絵里　：「…よね…じゃあ…:ここにに向けての言葉？」

ここ　：「だとしたら、アタシも舐められたものね」

希　　：「でも、にこっち…:そうとも言ってられへんかも…」

ここ　：「!!…:さすが希ね…」

絵里　：「えっ？」

希　　：「もうひとり…:μ sの中でネットに精通している人物が…:」

絵里　：「!!…:まさか!?!…」

ここ　：「アイツが書いたのなら…」

希　　：「ターゲットは…:にこっちってことになる…」

ここ　：「…:そうみたいね…」

絵里　：「そんな…:嘘でしょ…」

くつづく

南無三!?

：

絵里 …「はわあわあ…」

希 …「あくび?」

絵里 …「あつ…ごめんなさい…ちよつと寝不足で…」

希 …「?」

絵里 …「気にしないように…とは思ってるんだけど…どうしても『あのこと』が…」

希 …「ひよつとしてウチのこと、心配してくれてるん?」

絵里 …「当たり前でしょ!しないわけないじゃない」

希 …「それはそれは、ありがとさん♡」

絵里 …「何、喜んでるのよ…命が狙われてるかもしれない…って言うのに」

希 …「えりちがウチのことを気遣ってくれてるんやから、嬉しくないわけ…ないやん?」

絵里 …「べ、別に…希だから心配ってわけじゃなくて…」

希 …「そやけど…ちよつと複雑やな…」

絵里 …「?」

希 …「だって、それって…ウチのことをデブ扱いしてる…ってことやろ?えりちにそう思われてるなんて、逆に傷付くわあ…」

絵里 …「だ、だから…そういう意味じゃなくて…」

希 …「いひひ…冗談やって…ん?…」

絵里 …「どうかした？」

希 …「ウチの靴箱に…こんなものが…」

絵里 …「メモ書き？」

希 …「『死ぬのはアタジじゃない』…やって…」

絵里 …「…」

希 …「…」

絵里 …「…これって…あの落書きのことを言ってるのよね？」

希 …「みたいやね…」

絵里 …「よかったわ。狙われてるのは希じゃないのね！」

希 …「言ったやん！ウチはデブやないって」

絵里 …「うん」

希 …「まあ、そうすると…誰のことを言ってるんやろ？…って話なんやけど」

絵里 …「そ、そうね…」

希 …「この紙、えりちのところには入ってへん？」

絵里 …「わ、私のところ？…入ってないみたいだけど…」

希 …「…」

絵里 …「えっ？何？私も対象なの？」

希 …「うくん…そうやないんやけど…ほら、昨日にこっちが言ってたやん。相手を罵る為なら実際の容姿がそうでなくても『デブ』とか『ブス』とか『ハゲ』とか使うかも…って」

絵里 …「…うん…」

希 …「だとしたら…どうしてこのメモがウチのところに入ってる、えりちのところには入ってないんやろ？」

絵里 …「えっ?…」

希 …「このメモに書いてあることを信じるなら、ウチはターゲツトやないということやけど…えりちも違うなら、同じものが入ってて然るべき…やろ?」

絵里 …「た、確かにそうね…えっ?じゃあ、やっぱり私もそのターゲツトに含まれてるってこと?」

希 …「うくん…他の娘たちにも訊いてみないと、なんとも言えへんのやけど…」

絵里 …「…」

希 …「ただ…ひとつわかったことが…」

絵里 …「わかったこと?」

希 …「ウチのところにこれが入ってるってことは、あの落書きはやっぱリミュ…」

…「ひやあああゝ!!」

絵里 …「!？」

希 …「!？」

絵里 …「今の声…」

希 …「花陽ちゃんや!」

絵里 …「どこから?」

希 …「アルパカ小屋?」

絵里 : 「行くわよ！」

希 : 「もちのろんや！」

:

がやがやがや…

絵里 : 「この人だから…やっぱリアルパカ小屋？」

希 : 「…やね…」

絵里 : 「あつ…あそこで倒れているのは…花陽？」

希 : 「みんな、ちよつと道を開けてもらえる？…ごめんなあ…生徒会長のお通りやで！」

絵里 : 「ちよつと、こんな時にやめなさいよ…あつ…真姫！凜！」

凜 : 「う、うう…絵里ちゃん…か、かよちゃんが…死んじゃったよお…うう…」

希 : 「えっ！」

絵里 : 「ウソでしょ！」

真姫 : 「凜！勝手に殺さないでよ!!少し気を失っただけだから」

凜 : 「本当に？」

真姫 : 「呼吸もしてるし、心臓も動いてる…見ればわかるでしょ！」

凜 ……「うう…でも…かよちん…バタツて…」

希 ……「何があつたん？」

真姫 ……「アルパカよ」

絵里 ……「アルパカ？…はっ!!…えっ？死んじやったの？」

希 ……「南無阿弥陀仏…」

真姫 ……「待つて！アルパカも死んでないわよ！」

希 ……「そうなん？」

絵里 ……「どういうこと？」

真姫 ……「花陽が…アルパカの元気がないから…つて、教室に行く前にここに寄つたら、2頭とも倒れてて…そつちも呼吸はしてるみたいだから、まだ、最悪の事態にはなつてないと思うけど…」

希 ……「それで花陽ちゃんがショックを受けて…」

絵里 ……「気絶した？」

真姫 ……「まあ、そんなところね…」

絵里 ……「そう…なにか事件に巻き込まれたわけじゃないのね？」

真姫 ……「…だといいけど…」

絵里 ……「真姫？」

希 ……「その話は後やで！まずは花陽ちゃんを保健室に運ぶのが

先やから」

絵里　：「そ、そうね…凜、手伝ってくれる？」

凜　　：「う、うん…あう…凜が…負ぶっていくにや…」

絵里　：「大丈夫？」

凜　　：「かよちゃんはデブじゃないもん！」

絵里　：「そういう意味で言ったわけじゃ…わかった、じゃあお願いするわ。私も一緒についていくから」

凜　　：「凜に任せるにや!!…よいしょつと…」

真姫　：「しばらくベッドに寝かせておけば、やがて目を覚ますと思うから…」

凜　　：「うん」

真姫　：「ちゃんと傍にいてあげなさいよ。その役割は『あなた』じゃないとできないんだから」

凜　　：「わ、わかってるにや！」

絵里　：「じゃあ、希…またあとで」

希　　：「ほいな！」

穂乃果：「希ちゃん！真姫ちゃん！」

ことり：「今のは…かよ…ちゃん？」

海未　：「一体、何があったのですか？」

希　　：「真姫ちゃんの話によると…」

：

穂乃果：「こういうのはなんて言えばいいのかな？不幸中の幸い？」

海未　：「いえ違うと思います…が…適切な言葉は思い当たりませんね」

ことり：「獣医さんの診断だと…アルパカさんは、ストレスからくる食欲不振で衰弱したんだろう…って言って言ってたけど…」

海未　：「事件性はない…ということですね…」

穂乃果：「元気になるように注射してもらったし、これからしばらく様子を見てくれるんでしょう？ひとまず良かったよ」

ことり：「良くないよ!!」

穂乃果：「ことりちゃん…」

海未　：「ことり…」

ことり：「全然良くないよ…ことりがもつと早くかよちゃんの相談に乗ってあげて…1日でも早く、獣医さんに診てもらってれば…こんなことにはならなかったのに…」

海未　：「それは…」

穂乃果：「ことりちゃんの責任じゃないよ！」

海未　：「はい…」

ことり：「そんなことないよ！いくら飼育係だからって、その面をかよちゃん1人に任せた学校の責任だよ。学校の責任ってことは…お母さんの責任だもん！お母さんの責任ってことは…ことりの…」

海未　：「ことり！落ち着いてください！気持ちはわかります。それを言ったら私たちだって…アルパカの調子が悪いことは聴いていましたし…花陽が一生懸命面倒を見ていたことを軽視していた部分がありますので、そういう意味では同罪です」

穂乃果：「μ、sとアルパカと、どっちが大事？なんて言っちゃったしね…」

海未　：「はい…私たちも、こうなる前に手を差し伸べることができませんでしたから…」

ことり：「…」

穂乃果：「花陽ちゃん、大丈夫かな…」

海未：「…しばらくは…」

ことり：「…」

穂乃果：「…」

海未：「いえ、なんでもありません…。大丈夫ですよ！花陽には、真姫も凜もいますから」

穂乃果：「う、うん…そうだよね…」

ガラツ：

にこ：「その中にアタシが入ってないじゃない！」

海未：「にこー！」

穂乃果：「にこちゃん！」

にこ：「立ち聞きしてたわけじゃないわよ！珍しく、ことりの大きな声が聴こえたから、ちよつと入りづらかっただけで…」

ことり：「…」

穂乃果：「あ、そうだった。花陽ちゃんには、にこちゃんもいたんだった」

にこ：「『も』って、何よ！『も』って…ふん！アンタたちの頭の中はどうなってるのよ！失礼にも程があるわ」

海未：「すみません…」

にこ：「それより…今日はこのまま練習を中止するなんて言わな

いわよね？」

穂乃果：「へっ？」

にこ　：「当たり前でしょ？こんなことくらいで、オタオタしてるんじゃないよ！」

ことり：「こんなことって…」

にこ　：「いい？アンタたちが留学するのしないので、s崩壊しかけた時『この場所』を守ったのは花陽なのよ！」

穂乃果：「!!」

ことり：「!!」

にこ　：「今度はアンタたちが、花陽の帰ってくる場所を守ってあげる番じゃないの？」

穂乃果：「…」

ことり：「…」

凜　　：「そうにや、そうにや！かよちんと凜で守ったんだにや！」

真姫　：「私もね…」

にこ　：「あっ！…アンタたち…」

海未　：「凜、もう傍にいてあげなくていいのですか？」

凜　　：「うん、もちろんずっと一緒にいたかったけど…絵里ちゃんと希ちやんが、凜も少し休んだほうがいい…って」

穂乃果：「それで…花陽ちゃんの様子は？」

凜 …「あれから間もなくして目を覚まして…しばらくはずっと泣いてたけど…今は、かなり落ち着いたかな…」

海未 …「まだ、保健室に？」

真姫 …「ううん…さつき、その2人が花陽と一緒にタクシーに乗って、家まで送って行ったわ。『これは上級生の仕事』とか言ってる…」

海未 …「そうですか…」

にこ …「やっぱり、今日は解散！」

一同 …「えっ?」

にこ …「さつきああは言ったけど…さすがのアタシも、この雰囲気練習でできるだけのメンタルは持ち合わせていないから…」

一同 …「…」

にこ …「なに?おかしなこと言った？」

一同 …「ぶんぶん」

にこ …「まあ、アルパカもなんとか無事だったみたいだし、花陽も明日にはシヨックから立ち直るでしょ!アイツを気持ちよく迎えてあげる為に、アンタたちも気持ちを切り替えなさい!」

凜 …「ほえく…にこちゃん、部長みたいにや」

にこ …「みたいじゃなくて、部長なの!」

一同 …「あははは…」

~ ~ ~ ~ ~

スクールアイドルの器

：

モブ A :「おはよう『か・よ・ちゃん』」

花陽 :「ぴゃあ!!」

凜 :「?」

真姫 :「?」

モブ A :「あら、学校に来て、クラスメイトに挨拶した…ただそれだけのことなのに…何でそんなに驚くのかな?」

モブ B :「私たちだって、それなりに心配してたんだから」

モブ A :「それとも、私たちに…『襲われる』…とても思った?」

凜 :「!!」

真姫 :「!!」

花陽 :「ううん…」

モブ A :「ふふふ…だよね!」

真姫 :「あなたたち、なに言ってるの?」

モブ A :「別に深い意味はないわよ。ただ、一昨日、差し入れに行った時に、屋上で見た『落書き』…私たちもアレが気になって…だから、ちよつとした冗談っていうか…」

真姫 :「まったく笑えないわ」

凜 …「真姫ちゃんの言う通りにや」

モブA …「少しでも元気出してもらおうと思って言ったんだけど
…気に障ったのなら、ごめんね！謝るわ」

モブB …「…っていうか、『小泉さんが倒れた』って聴いたときは、
逆にそっちを疑ったよね？『誰かに襲われたの？』って」

モブA …「『えっ？なんで!』って、かなり、焦ったよね？」

真姫 …「…」

モブB …「それで、どう？元気になった？」

花陽 …「う、うん！もう大丈夫だよ」

モブA …「良かったあ!!さすがスクールアイドル！メンタル強い
わあ」

真姫 …「?」

凜 …「?」

モブA …「自分が面倒見てたアルパカが、あんなことになっても、
1日で立ち直って出て来れるんだから、大したものよね」

モブB …「しばらく休校するかと思ってた」

モブA …「前に『小泉さんがスクールアイドル出来るなら、私たち
も出来るかも』みたいなことを言ったけど、やっぱり無理だわ」

モブB …「それは人前に出て歌ったり、踊ったりするんだもん、並の
精神力じゃ、出来ないでしょ」

真姫 …「否定はしないけど…」

凜 …「なんか言い方に悪意があるにや」

モブA :「勘違いしないで、誉めてるんだから」
モブB :「そうそう」

真姫 :「ふくん…とてもそうは見えないけど…」

モブA :「それより…」

花陽 :「？」

モブA :「今回の騒動、あなたの『自作自演』って噂が広まってるけど？」

花陽 :「!!」

凜 :「にあ？何言ってるの!？」

真姫 :「誰がそんなこと言ってるのよ!!」

モブA :「誰って…ねえ？」

モブB :「う、うん…そこかしこ…から？」

凜 :「かよちゃんがそんなことするワケないにや！」

真姫 :「…アンタたち…私たちに喧嘩売ってるの？」

モブA :「待って！待って！そんなつもりはないから！…わかってるわよ…私たちだって…小泉さんが、どれだけ一生懸命アルパカの世話をしてきたか知ってるし」

モブB :「そうそう…私たちは知ってるよ、もちろん…だから、たぶん一部の心ない人が言ってるんだと思うけど…」

モブA :「基本的に、常にアルパカに接触してたのは小泉さんしかいなかったわけだし…そういう意味では疑われても仕方ないというか…」

モブ B :「火の無いところに煙は立たず…みたいな?」

真姫 :「だいたい、花陽がそんなことして、何のメリットがあるっていうのよ!?!」

モブ A :「そ、それは私たちに言われても…ねえ?」

モブ B :「う、うん…私たちもビックリしたんだから…どうしてこのタイミングで?…って」

真姫 :「このタイミング?」

モブ B :「あつ…えつと…ほ、ほら…μ sも今は大事な最終予選に向けて、練習に集中しなきゃいけない時期でしょ?そんな時に…ってという意味で…」

モブ A :「そうそう、そんな時に…ね。想像しないでしょ?アルパカが倒れるなんて…」

モブ B :「あ、でも…お医者さんに診てもらったんだよね?」

花陽 :「…うん…ストレスから来る食欲不振の影響だろう…って」

モブ A :「へえ…逆にアルパカは、ああ見えて繊細な生き物なのね…」

花陽 :「うん」

モブ A :「でもストレスって何?」

花陽 :「それは…」

モブ A :「あなたが原因だったりして」

花陽 …「!?」

真姫 …「アンタたち…死にたいの?」

凜 …「1回、殺されてみるにや?」

花陽 …「凜ちゃん!!真姫ちゃん!!そんなこと言っちゃダメだよ!」

真姫 …「花陽…」

凜 …「かよちん…」

モブA …「ま…まあまあ、二人とも、最後まで聴いてよ!…こここのところ小泉さん、少し元気がなかったから、そういう雰囲気はアルパカも感じたのかな…って話よ」

モブB …「う、うん…アルパカが元気なくて、小泉さんがそうなったのか…小泉さんが元気なくて、アルパカがそうなったのか…どっちが先かはわからないけど…ストレスが原因っていうなら、そういうこともあり得るかな?…って」

花陽 …「…そうかも…」

凜 …「かよちん…」

真姫 …「花陽…」

モブA …「まあ、不幸中の幸い…っていうか、なんていうか…事件性はないみたいだし…自作自演説に対しては、私たちがきっちり否定してあげるから」

モブB …「小泉さんは元気出して、頑張ることね!」

花陽 …「…うん、ありがとう…」

凜 ……
真姫 ……

：

海未 ……私と真姫は練習終わりに…作詞作曲の打合わせがある
…という理由で残っていくと言っても違和感はないと思いますが…
真姫 ……あなたも残っていく…って言った途端、みんな怪訝な顔を
してたわ」

希 ……「そんなあ…ウチもたまには仲に混ぜてほしいねん！二人
かどんな様子でイチヤイチャしてるか見たいやん？」

海未 ……「なっ！…イ、イチヤイチャとは何ですか！私と真姫はそう
いう関係では…」

希 ……「そうなん？残念やなあ…ウチはまた、イチヤイチャのあ
と、ダキダキして、ブチューって」

海未 ……「は、破廉恥です！」

真姫 ……「くだらないこと言ってるんで、素直に例の事って言えばい
いでしょ！…あなたも…そんなことくらいですぐに、カツカしないの
！子供じゃないんだから…」

海未 ……「す、すみません…つい…」

真姫 ……「まあ、それはそれとして…わざわざ残ってまで話をするつ
てことは、それなりに何かあるんでしょ？まあ、電話やLINEで話
すっていうのも色々面倒だから、この方が手っ取り早いけど」

希 ……「さすが真姫ちゃんね…」

真姫 ……「おだてても何にも出ないわよ」

希 ……「出して欲しいわあ…事件を解くヒントくらいは…」

真姫 ……「えっ？」

希 ……「…これなんやけど…」

海未 …「メモ…ですか？」

真姫 …「『死ぬのはアナタじゃない』…」

海未 …「これは一体？」

希 …「昨日の朝、ウチの靴箱に入ってたんよ」

海未 …「!？」

真姫 …「!？」

希 …「その反応を見ると…海未ちゃんと真姫ちゃんのところには、入ってなかったようやね」

海未 …「はい、私のところには…」

真姫 …「私のところにも無かったわ」

希 …「本当は昨日、確認しようと思ったんやけど…あんなことがあつて、ドタバタしてたから…他に誰かこんなメモが入ってた…つて話、聴いてないん？」

真姫 …「さあ…」

海未 …「少なくとも、穂乃果とことりからは聴いてませんが…」

希 …「…」

真姫 …「どういうこと？ちゃんと説明してくれない？」

希 …「これ、屋上にあつた『落書き』に対する『報告』やと、思うんよ」

海未 …「はい、それはなんとなく想像は付きますが…」

真姫 …「そうね」

海未 …「だとすると、なぜ、希だけに？…となりますね」

真姫 …「今のところ…はね。私たちが、知らないだけかも知れないし…」

希 …「ウチが自作したものかも知れんし…やる?」

真姫 …「…」

海未 …「…」

希 …「そやね…お互い疑心暗鬼になってるのはわかるんよ。だから、ウチの話を信用して…とは言うてない。ウチも二人をまだ、どこかで疑ってる部分があるし…」

真姫 …「…」

海未 …「…」

希 …「そやから、ここでこんな話をするのはリスクがあるかもやけど…もし二人のウチ、どちらかが犯人やったら、逆にプレッシャーを掛けることができるやないかな?…なんて…ふふふ…一瞬の心理戦やね」

真姫 …「無駄な戦いね…私が犯人であるはずないもの」

海未 …「もちろん、私もです」

希 …「まあ、そう信じてるから、話すんやけど…」

真姫 …「で?そのメモから何かわかったことがあるの?」

希 …「ターゲットは…ウチやない!」

海未 …「はい?」

真姫 …「なに、それ意味わかんない…」

希 …「いや、わかるやろ」

海未 …「ええわかりますが…というか…まんまですよね？」

希 …「…やね…」

真姫 …「言いたいことは…たったそれだけ？」

希 …「そんなわけないやん」

真姫 …「だったらもったいぶらずに早く言いなさいよ」

希 …「犯人は…あの時…あそこにいたんよ…」

海未 …「なっ…」

真姫 …「ウソでしょ!？」

希 …「ウソやあらへんよ…なぜなら…」

くっくくく

三人寄らば…

希 ……と、その前に…あの落書きが誰に向けたものか…って話
なんやけど…」

海未 ……十中八九、私たち…つまり、sのメンバーに向けられた
ものかと」

真姫 ……」

希 ……「…どうして、そう思うん？」

海未 ……「この屋上は、朝、解錠されてから、私たちが帰ったあと
施錠されるまで、基本的に出入りは自由です。現に私たちもお昼を食
べに行ったりしますし」

真姫 ……「そういう意味では、誰でもあれを書き込むことが出来るっ
てことね」

海未 ……「はい。ただし、書き込んだ時間は、放課後…ホームルーム
が終わってから、私たちが練習の為に上がってくるまでの間でしよ
う」

真姫 ……「どうして？」

海未 ……「仮に昼休みに書いたとしたら、その姿を誰か見られるリス
クがありますし……かといって、授業を抜け出して……というのも現実的
ではありません」

真姫 ……「それは確かにそうね」

海未 ……「では、なぜ、そうする必要があったのしょうか？……それは、
あのメッセージが私たちに向けてのものだからです」

真姫 ……「だから、どうして断言出来るのよ」

海未 ……「はい。まず……メッセージと言うのは、相手に伝わらなくて

は意味がありません。あれが『本当に何の意味もない落書き』だしたら『まったく検討違いな話』になってしまいますが…少なくとも、そうでないならば、誰かに伝えたいからこそ、あそこに書いたのだと思います」

真姫 : 「その相手が…私たち?」

希 : 「…の誰か…ということやろなあ」

海未 : 「先ほども申しましたが、この屋上は誰であろうと出入り自由ですので、条件によつては私たちより先に、あの落書きを見つかる人もいない…とは言えません。しかし、どうでしょう? それを見たからといって、気にする人がいるでしょうか?」

真姫 : 「何か書いてある…とは思つても、気には留めないかも。一読しただけじゃ、意味がわからないから、気持ち悪さは残るけど」

海未 : 「はい。では、次に…私たち以外に、毎日、屋上に行く…という人はどれくらいいるでしょうか?」

真姫 : 「…お昼を食べに行く人はかなりいると思うけど、毎日必ずつてワケじゃないわね」

海未 : 「もし、あの落書きに意味があるのであれば、いつ来るかわからない相手に、メッセージを残したことになるんです。しかも、チョークで書かれたものですので、それほど長くはもちません、すぐに消えてしまいます。つまり、それだとメッセージの意味を持たないのです」

真姫 : 「なんらかの手段で呼び出して、見せる…ってことは、考えられない?」

海未 : 「なるほど。それは、あるかもしれませんね。ひとつの可能性として残しておきましょう…希、いかがでしょうか? 私の推理は…」

希 : 「言うことなし! やね…ウチもそう思つてるんよ」

真姫 : 「私も薄々そうじゃないかと思つてたけど…どこかで否定したい気持ちがあつて」

海未 : 「それは私も同じですよ」

希 : 「さて…次はウチの出番やね! ターゲットがμ, s…の根

扱、その2!...や」

海未 :「お願いします」

希 :「それがこのメモなんやけど」

真姫 :「それが根拠なの?」

希 :「よく思い出してほしいんよ、あの時の会話を…。うち、凜ちゃんにデブ弄りされたやん?」

海未 :「されてましたね」

真姫 :「してたわね」

希 :「何度も言うけど、胸が大きいだけやのに」

海未 :「何度も言わなくていいですよ」

真姫 :「そうね、余計な一言ね」

希 :「でも、このメモは『デブはウチやない』と書いてあるんよ」

海未 :「そうは書いていませんよ」

真姫 :「『死ぬのはアナタじゃない』とは書いてあるけど、太っていることに対する否定は、どこにもないわね」

希 :「意識すれば、そういう意味やろ?」

海未 :「…」

真姫 :「…」

希 :「いやいや、黙らんといて…」

海未 :「話を続けて下さい」

希 :「冷たいんやから…」

真姫 :「私たち、暇じゃないもの…」

希 :「ほい、ほい…まあ、今、言った通りなんやけど…凜ちゃん
がウチをデブ弄りした会話を知ってるのって…」

海未 :「!!」

真姫 :「!!」

希 :「なあ…ウチらしかおらんやろ?…百歩も二百歩も譲って
…犯人がウチのことをデブやと思ってたとしても…このメモの意味
が本当なら、『それでも死ぬのはウチやない』…そう言うてるんよ。つ
まり、それは…あの時、あそこにいた人物やないとわからない…つて
事やないかな?」

海未 :「た、確かに…」

真姫 :「待って!…何かの拍子に、ターゲットがμ sメンバーだ
と思われてることを知った犯人は、それを否定する為に書いたものだ
とは考えられない?」

海未 :「つまり…希ひとりが対象外ではなく、メンバー全員がそう
だ、と知らしめるため…ということですか?」

真姫 :「そう」

希 :「それなら、ウチにのみ、このメモが入れられていたこと
について、説明がつかないんよ。この文章が『アナタたちではない』な
ら、そうかも知れんのやけど」

海未 :「そうですね。全員にそれが入っているなら、話は別です
が」

希 :「今、確認できる範囲で、それはないやん」

真姫 :「今の段階ではね。入ってたことを隠している人もいるか
も知らないし」

海未 …「何のためにでしょうか…」

真姫 …「それは…」

希 …「真姫ちゃん…あの落書きが誰に向けたものか…って話に戻らんやけど…そもそも、あのメッセージがμ sに向けたものやったら、でも『死ぬのはアンタたちやないで!』って、おかしいやろ?」

真姫 …「μ sに向けたメッセージだけど、標的はμ sじゃない…そうね、それはないわね…」

海未 …「つまり…狙われている人は…希を除く…9分の8…ということですか…」

希 …「このメモを信じるなら」

真姫 …「それ、希が自分で書いたものだとしたら?」

希 …「ふふ…自分で『死ぬのはアナタやない』って書いてるのに、自ら死ぬのは道理が通らないやろ」

海未 …「はい…なので…希は標的から除外して構まないかと思いません。…ですが…」

希 …「?」

海未 …「犯人の可能性が少しだけ高まりました」

真姫 …「そうね…確実に死なない人が1名確定したってことだもの…」

希 …「そやなあ…ウチかも知れんなあ…」

真姫 …「…」

海未 …「…」

真姫 …「ねえ…今までの話を纏めると、狙われているのは私たちの

…希を除く誰か…ってことはわかったわ…認めたくなけど…。でも、どうしても腑に落ちないことがあるの。自分で言うのもなんだけど…私たちって、あそこに書かれたような体形の人なんていないでしょ？じゃあ、誰が狙われてるの…って話じゃない？」

希 ……にこつち曰く…相手を罵るのに『チビ』『デブ』『ブス』『ハゲ』くらいの単語は普通に使うんやって…『お前のかあさん、でべそ』くらい幼稚な言葉やけどな。そやから…もしかしたら、あの『デブ』にはそこまでの意味がないかもしれんよ。単なる憎悪の対象物に向けた煽り文句…」

海未 ……なるほど…だとすれば、その言葉だけで誰かを絞り込むことはできませんね」

真姫 ……」

希 ……と、ここまでが落書き事件に関する考察や。犯人が実行に移すかどうかは不明やけど、あの言葉はμ'sに向けて書かれもの…そして、それを書いた人物はあの中にいた…盗聴でもされてない限り、ウチがデブ扱いされたことを知ってる人はいないから」

海未 ……盗聴…ですか？」

希 ……「なんでアタックしないとかんの！…？登頂やなくて盗聴やって!!」

海未 ……「そんなこと言ってませんが」

希 ……「条件反射で言うてしもうた…」

海未 ……「はあ…」

希 …「では、ウチは？」

真姫 …「…？…」

海未 …「…？…」

希 …「東條やん！」

真姫 …「…」

海未 …「…」

希 …「いや、そんな目で見んといて…」

真姫 …「それで？」

希 …「？」

真姫 …「希は今回のことと、これまでの一連の事件と、関連性があると思ってるわけ？」

希 …「…ウチはあると思ってる…けど…まだ結びつかんのよ…点と点が…」

真姫 …「海未は？」

海未 …「私も同じです…特に…上履きの件以来、花陽の様子がおかしいのが気になります…アルパカのことは事件とは言えないようですが…」

希 …「それなんやけどな…」

海未 …「はい」

希 …「…花陽ちゃん…ウチらに嘘ついたんよ…」

海未 …「!!…花陽が…嘘…ですか…」

真姫 : 「そう、私にまで…ね」

海未 : 「真姫…」

真姫 : 「あの娘の性格だから、絶対に何か理由があるはずだけど…」

海未 : 「理由もなく嘘をつく人などいませんよ」

真姫 : 「それはそうだけど…」

海未 : 「そうですか…花陽が…」

希 : 「海未ちゃん？何か思い当たることがあるん？」

海未 : 「…ええ…いえ…まあ…その…まずは先にそちらの話を聴きましょうか。私の話は事件と関係ない可能性が高いですし…」

希 : 「…そうなん？それじゃ…実はな…」

くつづく

想像できません！

希 …「花陽ちゃんが練習を早退した日…ってあったやん?」

海未 …「はい、確か…お腹が空きすぎて、力が出ない…と言っていた日のことですよね?」

希 …「ウチ、ふと気になって、翌朝アルパカ小屋に行つたんよ」

海未 …「アルパカ小屋にですか?」

希 …「虫の知らせ…って言うんかな? まあ、ずっとアルパカの具合が悪いつて言うてたし、もしかしたら、そこに何らかのヒントがあるかもって」

海未 …「はあ…」

希 …「そうしたらなあ…そこにあつたんよ…」

海未 …「なにがでしよう?」

希 …「ゲーが…」

海未 …「アルパカが『お手』でもしたのですか?」

希 …「それは芸やろ? 芸…やなくて、ゲーや」

海未 …「では、音階のソですか?」

希 …「それはゲーやなくてG（ゲー）や」

海未 …「合ってますが」

希 …「合ってるけど、ソって落ちるものやないやろ」

海未 :「意味がわかりません」

希 :「真姫ちゃんの真似はいらんよ」

真姫 :「余計なことは言わなくていいから」

希 :「ゲエ…や…ゲエ…」

海未 :「：殿方同士が愛し合う？…ってアルパカ小屋でなんて破廉恥な!!」

希 :「それはゲイや!…って、なんで真姫ちゃんと同じリアクションするん?」

真姫 :「だから、今、私のことは関係ないでしょ!」

海未 :「ですから、なんのことでしょう?」

真姫 :「吐瀉物があったのよ」

海未 :「としゃぶつ?」

真姫 :「嘔吐よ、嘔吐」

海未 :「オート?自動ドアか何かですが?」

真姫 :「はあ…あなたも意外に鈍いのね。吐いたあとよ」

海未 :「ああ、そちらの!!…で、でしたら、まわりくどい言い方をしないで、初めからそう言ってください」

希　：「こう見えて、ウチにも乙女の恥じらい…ってあるんですよ。だって…ゲロって言えんやん、ゲロとは…って…うつぷ…あかん、口にしただけでも吐きそうやわ…」

海未　：「失礼しました…言わなくてもいいです…そ、それで…それがどうしたのですか？」

希　　：「放課後、真姫ちゃんに来てもらって、分析した結果…それは、おにぎりを吐いたあとだとわかったんですよ」

海未　：「おにぎり？…アルパカはおにぎりを食べるのでしょうか？」

真姫　：「食べないと思うわ」

海未　：「では、そのおにぎりは…花陽がアルパカに無理やり食べさせた…と？」

希　　：「おう？ふふふ…そ、その発想はなかったわあ」

海未　：「へっ…違うのですか」

真姫　：「普通は花陽が吐いたもの…って考えない？」

海未　：「あっ…そ、そうですね…少し難しく考えすぎました…花陽がそのようなことをするはずないですからね…お恥ずかしい…」

希　　：「いや、そういう自由な発想が、意外と事件解決につながるかもしれないよ？」

海未　：「ならよいのですが」

真姫　：「ここでは花陽が吐いたことを前提に話を進めるわ」

海未　：「はい」

希　　：「食べた物をリバーズしてしまったのなら…お腹が空いて力も出ない…っていうのも筋が通るやろ？」

海未　：「そうですね…ですが…あの時は…何かが食べる？』と訊いていたのを断っていたかと。花陽のことですから、そこまでお腹が空いていれば、ありがたく頂いていたのではないのでしょうか」

真姫　：「それを受け入れられる胃の状態じゃなかった…ってことでしょ？」

海未 …「!!…まさか…花陽に限ってそんな…は、破廉恥です!!」

希 …「ん?」

真姫 …「はあ?」

海未 …「そ、それで…今、何か月目なのでしょう?相手は誰なのですか?いえいえ、そもそも安定期に入るまでは、ダンスなどとしてはいけないのでは?」

希 …「ちよ、ちよい待ちい!海未ちゃん、何、勘違いしてんねん」

真姫 …「はあ…あなたはもう少しまともだと思ってたけど…

ちよつとは付き合う友達、考えた方がいいんじゃない?」

海未 …「えっ?…妊娠すると食べ物好みが変わるとか…酸っぱいものが欲しくなるとか…ご飯の炊ける匂いで吐き気を催す…とか聞いたことがあるのですが…」

真姫 …「それはそうだけど…その前提が間違ってるのよ」

海未 …「…といますと…」

真姫 …「花陽は妊娠なんてしてないわよ!!ただ単に『胃の調子が良くないときに、食欲はわからない』って言っただけ」

海未 …「!!」

希 …「いや、こつちがびっくりやわ。どれだけ今日の海未ちゃん、ピントがズレてんねん」

海未 …「そうですかあ…よかったです、安心しました…まさか花陽に限って…と思ったものですか…」

真姫 : 「私はアナタのことが不安になったけど…」

希 : 「そやけど、花陽ちゃん、妊娠してそんななったら、どうなってしまうんやろ?」

海未 : 「文字通り『死活問題』ですね」

希 : 「『お米を食べるなんてありえないですう』…なんてなあ」

海未 : 「ふふふ…そんなことになったら転変地位が起きますね」

真姫 : 「ほらほら、話をそらさないで…」

海未 : 「あつ…すみません!…えつと…それで…嘘というのは…それを隠していた…ということでしょうか?」

希 : 「うくん、それもそうなんやけど…真姫ちゃんにゲーを検証してもらった後、ウチら、遅れて部室に行ったんよ」

真姫 : 「それからしばらくして、花陽が来たんだけど…」

希 : 「『どこ行ってたん?』って聴いたら『アルパカ小屋にいた』…って」

真姫 : 「でも、そこにはいなかった」

希 : 「ウチらがずつといたんやから、花陽ちゃんがくれば、当然わかるハズやん。何か別の用があつて遅れたのは、間違いないと思うんやけど…嘘をついてまでしなきゃいけない用ってなんやったんやろ?」

海未 : 「ひよつとしてその日は…私が弓道部に顔を出していた日のことでしょうか?」

希 : 「…えつと…確かそうやわ…ことりちゃんが『海未ちゃんの試合が近いから応援に行ってた』って遅れて来たんやなかったっけ…」

海未 :「!!」

希 :「海未ちゃん?」

海未 :「そうですか…」

真姫 :「どうかした?」

海未 :「その日、その時刻、ことりと花陽は弓道場の裏にいました」

希 :「!?」

真姫 :「!?」

海未 :「私がひと休みしようとして表に出たとき、二人に姿を見つけたのです。花陽は泣いていたようですが…何を話していたかはわかりません。見て見ぬふりもできたのですが…やはり気になってしまい、近づいて声を掛けました」

真姫 :「それで花陽はなんて?」

海未 :「申し訳ありません…今、ここで話すのは…」

真姫 :「つまり…そういうこと?」

海未 :「どうなのでしょう…私もそれを疑っているのですが…いえ…本当にわからないのです。ことりも教えてくれませんでしたので…人の恋路をなんとか…ではありませんが、もしそういうことでしたら、私が口を挟むことではありませんし…」

真姫 :「そうね…」

希 :「海未ちゃんの心当たりって、その事?」

海未 :「はい…それが今回のことにつながるかどうかは、定かでは

ありませんが…」

希 …「ウチなあ…あの時花陽ちゃんが来たら、そのゲーの件を聞いただそうと思ってるやけど…結局、現れなかったんよ。…ウチがいることに感づいて、小屋に行くのを『回避した』のかと思ってるやけど…ことりちゃんと会ってたって言うんなら…」

海未 …「偶然そうだったのかもしれないね」

真姫 …「…」

希 …「真姫ちゃん？」

真姫 …「…ミュンヒハウゼン症候群…」

希 …「!!」

海未 …「えっ？今、なんと」

希 …「ミュンヒハウゼン症候群…平たく言うと『かまってちゃん病』やね」

海未 …「かまってちゃん病…ですか？」

真姫 …「平たく言いすぎだから」

希 …「聞いたことない？周りの気を引くために、仮病を使ったり、自傷行為を繰り返したりする…一種の精神疾患やね」

海未 …「あっ…」

真姫 …「さすが希、無駄に知識が広いわね」

希 …「言うたやん、勉強にはなんの役にも立たんけど…って」
真姫 …「もし花陽が…ことりの気を引くためにしでかした事だと

したら…」

希 …「上履き隠したんも…具合が悪くなつたんも…あんな落書きしたんも…すべてはことりちゃんに振り向いてもらいたいがため？」

海未 …「なんとなく辻褄は合いますね…」

希 …「そして告白して…フラれた？」

海未 …「…」

真姫 …「…」

希 …「…だとしたら、かなり厄介な話やね…」

海未 …「…はい…」

真姫 …「…」

くつづく

みんな優しいね

：

凜　：「さあ、お昼にや！かよちん、一緒に食べよう」

花陽　：「うん！」

真姫　：「私もいいかしら？」

花陽　：「うん…って…あれ？」

凜　　：「どうしたにや？」

花陽　：「…」

真姫　：「花陽？」

花陽　：「ふえっ？…あ、うん…やっぱり今日は…食べるのはやめておくね…だから、二人で食べて…」

凜　　：「にや？」

真姫　：「何かあった？」

花陽　：「ううん、別に…」

凜　　：「ダイエット？」

花陽　：「そ、そんなところかな？」

真姫　：「ありえないから！あなた、こここのところ色々あつて、太るどころか寧ろ痩せてきてるわよ…それなのにダイエットなんて」

凜　　：「うん、凜はいっぱい食べるかよちんが好きにやあ！ご飯を

食べないかよちんなんで、スキップする真姫ちゃんくらい、らしくないにや」

真姫 …「なにそれ？意味わかんない」

凜 …「にやは」

真姫 …「とにかく食べないなんて、私が許さないわよ…つて、もしかして…あの落書きの言葉を気にしてるの？」

凜 …「あっ！」

花陽 …「ち、違うよ！そんなじゃないよ！」

真姫 …「…だったらいけど…いい？花陽の魅力はね、その適度な『やわらかさ』にあるんだから！私はガリガリに痩せた花陽なんて、見たくないからね」

凜 …「真姫ちゃんの言う通りにや」

花陽 …「う、うん…二人とも…ありがとう」

凜 …「よし！じゃあ食べよう！」

花陽 …「…」

真姫 …「なに？まだ何かあるわけ？」

花陽 …「…うくん…実は…忘れちゃったみたいなんだ…」

凜 …「えっ？」

真姫 …「お弁当？」

花陽 …「う、うん…ちゃんと入れたはずなんだけど…見当たらないで…」

凜 …「ちゃんと探したにや？」

花陽 …「うん」

真姫 …「机の中とか」

凜 …「ポケットの中とか」

花陽 …「うん」

真姫 …「珍しいはね。凜が自ら宿題やるくらい珍しいわね」

凜 …「にや?…」

真姫 …「ふふふ…さっきのお返しよ」

凜 …「にやあ…」

花陽 …「あは…」

真姫 …「冗談は置いておいて…それなら素直にそう言えいいじゃない!」

花陽 …「う…ん…なんか恥ずかしくって…」

真姫 …「なんの為に、私や凜がいるのよ、分けてあげるわよ、お弁当くらい。それで練習に力が入らないなんて言われても困るから…あ、ちよつと待ってて…今、みんな呼ぶから」

花陽 …「へっ?呼ぶって?」

真姫 …「…これで…よし…と。μ sのメンバーにLINEを送ったから」

花陽 …「えっ、いいよう…花陽がドジってみんなにバレちゃう」

真姫 …「それは今に始まったことじゃないでしょ!」

花陽 …「はう…」

真姫 …「…えっと…パスタでいいかしら? ご飯じゃなくて申し訳ないけど…」

花陽 …「全然、全然…気持ちだけで充分だよ…」

凜 …「凜は…チキンラーメンなら持つてるよ!」

真姫 …「どうやって食べるのよ…お湯もないのに」

凜 …「にゃ? 真姫ちゃん知らないにゃ? これ、そのまま食べられるんだよ!! 凜の非常食にゃ」

真姫 …「そ、そうなの?」

花陽 …「ありがとう、凜ちゃん」

にこ …「ちよつと花陽! なにやってるのよ!」

花陽 …「に、にこちゃん!」

真姫 …「早いわね…」

にこ …「当たり前でしょ!」一番弟子が困ってるっていうのに、助けないわけいかないでしょ!!」

花陽 …「あう…にこちゃん…」

にこ …「まったくアンタはマヌケなんだから…はい、にこ自慢の特製唐揚げ!!」

花陽 …「い、いいの?…」

にこ …「まあ本当言うと、作りすぎちゃったから、みんなに配って

周ろうと思つてただけど…そういうことなら、それ全部あげるわ」

花陽 …「あ、ありがとう…」

希 …「唐揚げだけやとバランス悪いやろ？ウチのカルビもどう？」

絵里 …「つて、それもお肉じゃない」

花陽 …「希ちゃん！絵里ちゃん！」

希 …「つていうえりちは、なに上げるん？」

絵里 …「ごめんなさい、私は…これしかなくて…」

凜 …「あつ、チョコレートにや！つて絵里ちゃんのお昼ご飯はチョコレートにや？」

絵里 …「食後のデザート!!いいでしょ、別になに食べたつて…」

花陽 …「そんな、悪いよ…」

絵里 …「あつ…全然気にしなくていいわよ。かなりハイカロリーだから、毎日はお薦め出来ないけど、お腹は満たされるんじゃないかしら？」

凜 …「絵里ちゃんは、冬山の登山家みたいにや」

希 …「そんなこと言ったら海未ちゃんが来…」

海未 …「私がどうかしましたか？」

凜 …「出たんにや！」

希 …「ほらね！」

海未 : 「呼ばれたから来たのですが！」

ことり : 「かよちゃん、お弁当忘れちゃったんだって？」

穂乃果 : 「よかつたら、これ食べていいよ！焼きそばパン！」

花陽 : 「えっ？あ…でもそうしたら穂乃果ちゃんの分が…」

海未 : 「大丈夫ですよ！穂乃果は家からパンを持ってきたのを忘れて、また購買で買ってきってしまったみたいですから」

真姫 : 「天性のバカね…」

穂乃果 : 「あはは…両方食べようと思ったら、海未ちゃんに怒られちゃって」

海未 : 「当たり前です」

ことり : 「ことりは休憩の時にみんなで食べようと思ったた、マカロイン持ってきたよ！」

海未 : 「…パスタにラーメンに焼きそばパン…唐揚げに焼き肉…チョコレートにマカロン…随分と偏ってしまいましたね」

花陽 : 「そんな、贅沢です」

穂乃果 : 「つていう海未ちゃんは？」

海未 : 「私ですか？私は筑前煮を…」

一同 : 「渋っ」

海未 : 「なにか問題でも？ですが、とりあえずバランスは悪いですが、これだけあれば、放課後まではもちますよね？」

花陽 : 「あ、ありがとう…本当にみんな、ありがとう」

モブA：「わあ…いいなあ、小泉さん…先輩方に囲まれて、めっちゃ人気者だね」

花陽：「!!」

絵里：「あら、あなたたち…先日はごちそうさまでした」

穂乃果：「すごく美味しかったよ！またお願…」

海未：「穂乃果！」

穂乃果：「…じゃなかった…うん、ごちそうさまでした」

真姫：「具合はよくなったの？」

海未：「具合？」

真姫：「さつき体育の授業中、貧血だつて保健室に行ったから」

モブA：「う、うん…もう大丈夫…一瞬、ふらつとしただけで…それより、小泉さん、お弁当忘れちゃったの？珍しいね」

花陽：「…ちゃんと入れたと思っただけ…」

モブA：「疲れが溜まってるんじゃない？」

花陽：「…うくん…」

モブB：「よかったら、これ食べる？」

花陽：「えっ？あつ…おにぎり？…」

モブA：「小泉さんに、美味しいおにぎりの作り方を教わったから頑

張って、作ってみたんだ」

モブB：「上手にできたなら食べてもらおうと思って持ってきたんだけど…やっぱりあのレベルには届かなくて」

モブA：「これじゃ、恥ずかしくて出せないよね…って言ったところなんだ」

モブB：「だから…味を気にしなくていいなら…ね？」

モブA：「うん、お腹の足しにはなると思うけど…」

花陽：「…あ、ありがとう…」

モブA：「その代わりに…南先輩が作ったマカロン…ひとつもらってもいい？」

ことり：「！」

花陽：「へっ？あっ…」

モブB：「ちよつと…それは厚かましいよ」

ことり：「どうぞ！いっぱい作ってきたから、好きただけどうぞ！じゃあ、これは私から、この間のチーズケーキのお返し…ってことで」

モブA：「わあ！いいんですか？ありがとうございます！」

モブB：「ありがとうございます！」

モブA：「では、さっそく…」

モブB：「頂きます…」

モブA：「！！」

モブB：「！！」

モブA：「南先輩ってお菓子作りの達人なんですね」

モブB：「プロの味です！お店出せますよ」

ことり：「そんなことないよう…」

モブA：「いやあ、やっぱり持つべきものは友達だね？」

モブB：「本当！小泉さんと仲良くなれたおかげで、こんないいことにであるなんて」

花陽：「…う、うん…」

希：「…」

海未：「…」

真姫：「…」

にこ：「じゃあ、私たちは戻るわよ！」

花陽：「あ、はい！」

絵里：「早く食べないと時間なくなるわよ」

ことり：「ばいばい！」

穂乃果：「じゃあね！またあとで！」

花陽：「うん、みんな本当にありがとう」

くつづく

謎は解けた!?

：
教師　：「それでは、また明日…ああ、星空はあとで職員室に来るよ
うに」

凜　　：「にや？凜が？」

花陽　：「凜ちゃん、なにかした？」

凜　　：「身に覚えがないにや」

真姫　：「なくはないでしょ？どう考えても成績のことじゃない？
宿題忘れたとか、テストの点が悪かったとか…日常茶飯事でしょ
？」

凜　　：「にやあ…かよちん、真姫ちゃん付き合って」

真姫　：「いやよ！呼ばれたのはアナタなんだから、自分ひとりで
行つてきなさい！」

花陽　：「ごめんね…付き合ってあげたいのはやまやまんだけど
…ちよつと用があつて…」

凜　　：「用？…あ、うん、いいよ…それなら仕方ないにや…そうし
たら待たせるのも悪いし、部活、先に行つてて」

真姫　：「わかつたわ…じゃあ、私たちは部室に行つてるから…」

凜　　：「うん！」

花陽 …「…」

真姫 …「さあ、花陽、行きましょ」

花陽 …「あのね、真姫ちゃん…私、今日は用があるから部活お休み
させてもらうね」

真姫 …「えっ?」

花陽 …「急でごめん。今日のお昼、あの二人に助けてもらっちゃっ
たから、どうしても『お礼』がしたくて」

真姫 …「あの二人…って…あの二人?」

花陽 …「うん。たいしたことはできないんだけど…」

真姫 …「そう…少しお裾分けしてもらったくらいで、大袈裟な気
もするけど…花陽がそう言うなら…」

花陽 …「うん、ありがとう」

真姫 …「…」

花陽 …「…ごめんね、お待たせしちやって」

モブA …「話は終わった?」

花陽 …「うん」

モブB …「じゃあ、行こうか」

花陽 …「じゃあね、真姫ちゃん。みんなに宜しく伝えておいてね」

真姫 …「…わかったわ…」

…

凜 …「かよちゃん、いる〜?」

希 …「部室に来て早々、第一声がそれなんや…本当に凜ちゃんは花陽ちゃんのが好きなんやねえ」

凜 …「えへへ…」

真姫 …「それがね、凜…花陽なら『今日は休む』って言ってたわよ」

凜 …「え〜!?聴いてないにや〜」

真姫 …「私も凜が職員室に向かったあと聴かされたんだけど…『あの二人』にお礼がしたいから…って」

凜 …「あの二人?ああ、お昼の件で?」

真姫 …「そうみたい」

希 …「花陽ちゃんは律儀やなあ」

海未 …「はい」

穂乃果 …「お米は花陽ちゃんにとって生命線だもんね!きっと命の恩人くらいに思ってるんだよ」

にこ …「命の恩人?...大袈裟ねえ」

真姫 …「それで…凜はどうして呼び出されたの?」

凜 …「あつ…それが…『学校の裏庭におにぎり散乱してたんだけど、星空、お前、何か知らないか?』って」

一同 …「!?」

絵理 …「おにぎりが散乱?」

穂乃果 …「おにぎりが卵産んじやったの?じゃあ、中身はタラコか…イクラだったのかな?」

希 …「ふふふ…穂乃果ちゃん『産卵』やなくて『散乱』やないかな?飛び散らかる方…」

穂乃果：「じよ、冗談だよ、冗談！……うん、もちろん知ってたよ！知ってた！」

海未：「一瞬、おにぎりから稚魚が飛び出してくる様子を想像してしまいました……」

にこ：「やめなさいよ！……そういうこと言うと、今後食べるのに支障が出るじゃない」

海未：「私が悪いのですか？そもそも、穂乃果が……」

穂乃果：「わあ、海未ちゃん！ストップ、ストップ！……え、えっと……それで……凜ちゃんと、そのおにぎりと……どういう関係があるの？」

凜：「それが……凜に……『これは小泉が撒き散らかしたものじゃないのか？』って……」

希：「!!」

真姫：「!!」

海未：「!!」

凜：「ん？どうかしたにや？」

海未：「い、いえ……」

穂乃果：「そっかあ……先生も『おにぎりⅡ花陽ちゃん』っていうイメージがあるんだね」

凜：「早弁してるところ、見られたりしてるからね」

絵里：「だとしたら、どうして直接訊かないのかしら？」

にこ：「確証がないからでしょ？疑ったはいいいけど、そうじゃないかなったら、色々面倒だから……一番、仲の良さそうな凜にさぐりを入れてみた……ってことじゃない？」

絵里：「なるほど……」

真姫 …「それで、あなたはなんて答えたの？」

凜 …『違うと思います！』って言ったにや」

絵里 …「そうね。どんな状況であれ、花陽が食べ物を粗末にするなんて、ありえないもの」

にこ …「ましてや、自分で捨てるなんて」

希 …「…そやけど…自作自演やったら…」

真姫 …「…でも…いくらなんでも…」

海未 …「…そこまでするでしょうか…」

絵里 …「希？」

凜 …「真姫ちゃん？」

穂乃果 …「海未ちゃん？」

にこ …「どうかした？」

希 …「ん？」

真姫 …「えっ…べ、別に…」

海未 …「はい…それで…」

凜 …「うん！凜もちろん、そう言ったよ。『かよちは、お米命の人だから、絶対にそんなことするハズない！』って」

にこ …「当たり前」

凜 …「それに…『今日のかよちん、お弁当忘れて来ちゃったから、そんなことできないし』って。そうしたら『まあ、そんなハズはない』って。他に思い付く者がいなかったから一応訊いてみたんだが…そっか…それじゃ、小泉じゃないな』って…」

穂乃果 …「そうだ！今日、花陽ちゃん、お弁当忘れちゃったんだもん」

ね！」

凜 「穂乃果ちゃんなら、持ってきたのを忘れちゃうことがあるかもしれないけど」

穂乃果 「凜ちゃん？」

絵里 「そういえば、穂乃果はパンを持ってきたの忘れて、パンを買っちゃった…って言ってたわね」

にこ 「バカなのよ、バカ。天然とかじゃなくて、何にも考えてないのよ、アンタは」

穂乃果 「うう…ことりちゃん、みんなが虐めるよう…」

海未 「(苛める?)」

穂乃果 「…って、あれ? そういえばことりちゃんは?」

海未 「えっ? あっ…来てないですね…穂乃果は聴いてないので…すか?」

穂乃果 「私? えっ? 聴いてないけど…」

にこ 「アンタ、またいつかみたいに忘れてるだけじゃないの?」

穂乃果 「そうかな? そう言われると自信ないけど…」

海未 「まったく、あなたって人は…」

穂乃果 「いやいや海未ちゃんこそ、聴いてないの?」

海未 「はい」

穂乃果 「勘違いってことない?」

海未 「断じてありません!!」

穂乃果 「あはは…そうだよね…」

真姫 「(まただわ…また花陽がない時に…)」

穂乃果 「…で…どこ行ったんだらう?」

絵里 「さあ…理事長のところかしら?」

穂乃果：「今日、花陽ちゃんがお弁当を忘れちゃったんだよ…って報告しにいったのかな？」

にこ　：「アホか」

凜　　：「でも、それなら家に帰ってからでもよくないかにや？」

穂乃果：「そうだよね」

にこ　：「だからそもそも、そんな報告しないでしょ！前提が間違ってるのよ」

真姫　：「…!?…前提が間違ってる?…:…」

穂乃果：「えっ…」

真姫　：「…なによ、それ…だとしたら私たちは、何かとてつもない思い違いをしてるかも知れない…」

凜　　：「真姫ちゃん、どうかしたにや？」

真姫　：「…なんでもない…独り言…」

穂乃果：「あっ…ねえねえ…さっきのおにぎりの話だけどさ…実は…もらったおにぎりがあんまり美味しくなくて、花陽ちゃんが捨てちゃった…ってことはないかな？」

希　　：「!!」

真姫　：「!!」

海未　：「!!」

絵里　：「ないわね！」

凜　　：「あるわけがないにや!!」

にこ　：「絶対ないから」

海未 ……なんでしよう、この違和感は…先生はなぜ凜に話を訊いたのでしょうか…」

穂乃果：「…おお？みんな冷たいなあ…速攻で全否定されたよ…でもさ、偶然だとしたら怖いよね？花陽ちゃんがお弁当忘れた時に、おにぎりが庭に散らばってるなんて」

凜 ……「本当に不思議にや」

穂乃果：「何かの怨念だったりして」

絵里 ……「やめてよ、そういうこと…言うの…」

希 ……「怨念がおんねん…なくんてな…」

一同 ……「…」

希 ……「まあ、今のはウチが悪かったやね」

にこ ……「はいはい、つまらないコメしてないで、ほら、さっさと着替えて、練習に行くわよ」

希 ……「!!…コメやって?…」

にこ ……「な、なによ！急に大きな声出して！コメントのことよ…言うでしょ？コメする…って…アタシ、おかしなこと言った？」

穂乃果：「ああ、お米とコメントを掛けたんだね？」

凜 ……「にこちゃん、寒いにやあ」

にこ ……「寒いって言うな……たまたま、その話題に言葉が引っ張られただけだから」

希 ……「…なんやろ…今、一瞬頭の電球が光った気がするんやけど」

…コメする…コメ…する…)

絵里 …「希?」

希 …「ごめん、ちょっと黙ってて!!…」

絵里 …「ひえっ?…ええ、ごめんなさい…」

海未 …(…)

真姫 …(…)

希 …(…)

穂乃果 …「…」

にこ …「…」

凜 …「…」

海未 …「あっ!」

真姫 …「あっ!」

希 …「あっ!」

真姫 …「わかったわ!」

希 …「ウチもや!」

海未 …「はい、私もです!」

穂乃果 …「なにがさ?」

海未 …「今回の事件の…犯人…です」

穂乃果 …「今回の…って、おにぎりの?」

海未 …「はい。そして恐らく…」

希 …「例の落書き事件も同一犯やね」

真姫 …「そうね…はあ…どうして気が付かなかったのかしら…
まったく我ながら情けないわ…」

凜 …「誰にや？」

絵里 …「待って…聴くのが怖いんだけど…」

穂乃果 …「でも…そうも言ってもらえないんだよね？」

海未 …「はい…」

にこ …「それで誰なのよ!？」

希 …「犯人は…」

くつづく

隠されていた記号

：
花陽 ……二人とも…『色々してくれて』ありがとう…お陰様でよろい層々、sメンバーへの感謝の念が深まったよ」

モブA ……へえ…小泉さんって『皮肉』が言えたりするんだあ？」

モブB …まさか『あなる』とは予想外だったけど…喜んで貰えたのなら、結果オーライね」

モブA …小泉さんは…いい先輩と友達を持つてるのね」

モブB …正直羨ましいよ」

花陽 …「自分でもそう思う。入学前は考えてもみなかったことだから」

モブA …そして…色々運がいい…」

花陽 …「そうだね、否定はしないよ」

モブB ……ところで…『私たちが作ったおにぎり』は気に入ってくれたかな？」

花陽 ……みんなから、いっぱいお裾分けしてもらったから…申し訳ないけど…あのおにぎりは、まだ、口にしてないんだ」

モブB …「あら、残念ね」

モブA …「あなたの為に精一杯作ったんだけど」

モブB …「まさか…捨てたりしてないよね？」

花陽 ……」

：

希 …「まず、落書きの件やけど…もう一度あの時の状況を思い出してほしいんよ」

穂乃果 …「あの時の状況？」

絵里 …「私たちが屋上に行ったときには、すでに書いてあったわ」
穂乃果 …「凜ちゃんが最初に見つけたんだよね？」

希 …「なんて書いてあったん？」

凜 …「確か…『デブはタヒね！』だったにや…読めなかったけど…」

希 …「そうなんよ…実はずっとそこが引つ掛かっててなあ…あれを『死ね』だと教えてくれたのは誰やったっけ？」

穂乃果 …「にこ…ちゃん？」

にこ …「!!…そうよ、アタシだけ…」

希 …「そう、にこっちやったね」

にこ …「…」

海未 …「『タヒ』を『死』と読めた…ということは…当然『書ける』ということでもあります」

真姫 …「そして意味もわからず『タヒ』なんて書く人はいない…」

海未 …「はい」

穂乃果：「えっ？じゃあ…まさかにごちゃんか」

絵里：「うそでしょ？」

凜：「ひどいにやあ!!」

にこ：「ぬわあんでよ!!そりやあ、読んだのはたまたまアタシだけど…他に知ってたけど口にしなかったヤツがいるかも知れないじゃない!」

真姫：「そうね」

にこ：「疑いたくはないけど…花陽だってかなりヘビーなネットユーザーなんだから、絶対知ってたと思うわ」

海未：「ええ…恐らく知っていたでしょう」

絵里：「花陽が…」

穂乃果：「書いたの？」

凜：「そんなハズないにや!」

にこ：「もちろん、そう思いたいけど…つまり、それだけのことじゃ、犯人をアタシだって特定できない…ってことよ」

希：「そうやね…でも、ウチはにごっちが犯人やなんて、一言も言うてへんよ」

にこ：「はあ？」

海未：「そして…花陽だとも言うておりません」

穂乃果：「えっ？」

希 …「そやから、あの時のことを、もう一度よく思い出してほしいんよ」

海未 …「にこ以外にあれを『死』と読んだ人はいませんでしたか？」

凜 …「誰にや?…」

絵里 …「誰だったかしら?…」

穂乃果 …「誰だっけ?…」

…

花陽 …「私ね…*μ* sに入って本当に良かったと思ってるんだ…背も低くて、声も小さくて…なんのとリエもなくて…ただアイドルが好き…っていうだけだった私が…あの人たちに出会って…こんなに幸せで充実した時間を送れるようになった…」

モブA …「そういうの、なんて言うか知ってる? 『身分不相応』って言うのよ」

花陽 …「えへへ…そうだね…。本当に、本当に…花陽にはもったいないくらい、みんな優しくてあったかくて…だから毎日『私がここにいていいのかな?』って自問自答してるよ」

モブB …「よくわかってるじゃない」

花陽 …「だけど…ううん…だから…かな?…こんな私を受け入れてくれるみんなの期待に、絶対応えなきゃいけない…って」

モブA …「期待?あなたに?」

モブB …「それ、勘違いじゃない?」

花陽 …「勘違い?…そうかも…だけど…それをいうなら、二人も花

陽のことを勘違いしてると思うよ」

モブA …「えっ?」

モブB …「どういうこと?」

花陽 …「花陽は…半年前の花陽じゃないってことかな…」

…

絵里 …「:ねえ…:そういうえば…:あの時じゃなかったかしら?…:例
のことりファンが差し入れを持ってきてくれたのって」

穂乃果…「ああ、そうだね!絵里ちゃんが堅いこと言うから、チーズ
ケーキを食べそびれるとこだった時だ」

絵里 …「私はただ、生徒会長として…」

にこ …「今はそんなことどうだっていいでしょ!」

絵里 …「もう…:にこに怒られたじゃない…」

穂乃果…「ごめん」

凜 …「えっと…:そのあと帰り際に二人が落書きに気が付いて、そ
のことでちよつと話した気がする…」

にこ …「デブって誰だ?…:話になって…:凜が希だつて」

希 …「:…:ウチはデブやないけどな…」

にこ …「あっ!!」

一同 …「!?!」

にこ …「:…:そういうえば…:あの文字になんの疑問も持つことなく『ス
ラッ』と呼んだヤツがいたわね…」

穂乃果…「えっ?」

凜　：「いた？」

絵里　：「誰なの？」

にこ　：「そう…そういうこと？…アイツらが…」

海未　：「やっと思い出しましたか」

にこ　：「はあ…もつと早く気が付くべきだったわ…あんなの読めて当たり前だと思つてたし…あつーじゃ…じゃあ…あの記号は…」

希　　：「そういうことやね」

にこ　：「あのバカ！なんで黙ってるのよ！」

真姫　：「そういう娘じゃない…」

絵里　：「記号つて何かしら？」

穂乃果：「完全に置いていかれてるんだけど」

凜　　：「凜たちにもわかるように説明してほしいにや」

：

モブA　：「勘違いかあ…そうかもね…ここまであなたがしぶといと思わなかったから…それはそうかもね」

モブB　：「でも、仲間に迷惑を掛けたくないなら…これ以上続けるのって逆効果じゃない？」

モブA　：「そうそう、誰がどう考えても『あなたが辞めればすべて丸く収まる』話じゃない」

花陽　：「私は辞めないよ！どんなことがあっても」

モブA :「強情ね」

モブB :「それとも…まだ刺激が欲しいの?」

モブA :「私たちはμ sが好きだし、これからも頑張っしてほしい
と思ってるから、できるだけ事を荒立てたくないと思ってるんだけ
ど」

モブB :「警察沙汰なんてことになったら、私たちにもμ sにも
デメリットしかないしね」

モブA :「でも…あんまり聞き分けがないようなら…多少手荒な
こともしちゃうかも…」

花陽 :「…ふくん…」

:

にこ :「…落書きした犯人は…差し入れを持ってきた二人組よ…」

凜 :「にや?」

穂乃果 :「ことりちゃんファンの?」

絵里 :「なんですすって?」

にこ :「そして…『死ね』って書かれたのは…花陽…」

凜 :「にやあ!!」

絵里 :「花陽が…」

穂乃果 :「殺されちゃうの?」

にこ :「アイツらを落書きした犯人とした根拠は、さつき海未たち
が説明した通りよ。あの二人、なんの疑問もなく『デブは死ね』って
読んでたわ」

絵里 :「たまたま知ってた…ってことは?」

希 : 「なくはないやろな…そやけど…」

真姫 : 「色々と考えると、逆に彼女たちしか有り得ないのよねえ」

海未 : 「タヒね…と読んで、知らないフリもできたのでしようが…どちらかというと私たちの前だったので、思わず口走って、そう言っ
てしまった可能性があります」

穂乃果 : 「どういうこと？」

海未 : 「あのメッセージは…花陽だけに理解して欲しかったので
す」

凜 : 「かよちんだけ？」

真姫 : 「花陽がネット用語に精通してることを二人が知っていた
…っていうことが前提としてあるけど…ここのところずっと付きま
とってたし、それくらいの情報は入手してるでしょ」

絵里 : 「でも…仮に花陽が見ればわかるのだったら…敢えてあの
場に来て、そんなこと言う必要あったのかしら？」

真姫 : 「念には念を…ってことじゃない？書いてみたのはいいけ
れど、私たちがそれに気付かなかったら、まったく意味がないから」
希 : 「『ここにこんなんありますけど、花陽さん…そして、s
のみなさん見てくれましたか』ってね」

穂乃果 : 「なんの為に、そんなことしたんだろう」

海未 : 「花陽に圧力を与かけるためですよ」

穂乃果 : 「圧力？」

海未　：「プレッシャーです。なぜ『死ね』と脅されていたかはわかりませんが…精神的には堪えるのではないでしようか」

凜　　：「なにそれ、意味わかんない」

真姫　：「ちよつと凜！こんな時に私のマネは…」

凜　　：「わかんない！意味がわかんない！どうして、それがかよちゃんに向けられたメッセージなの？どうして、かよちゃんが死ねって言われなきゃいけないの？意味わかんないよ！」

にこ　：「凜…落ち着いて聴きなさい…この記号…アンタたちならどういう時に使う？」

絵里　：「『※（アスタリスク）』？」

穂乃果：「えっと…注意書きとか…そういう時に使うかな。文章の前に付けて」

にこ　：「そう、普通はそう使うわね」

希　　：「あの落書き…正確には『※デブはタヒね!!』って書いてあったんよ」

穂乃果：「あつた？」

絵里　：「そう言われてみれば、そんな気がするわね…」

真姫　：「その記号が書いてあったことさえ、忘れたでしょ？」

海未　：「あの時点でそれに注目していた人はいないと思いますよ…ただひとりを除いては…」

凜　　：「ただ…ひとりを除いて？」

希 ……あの落書きの『※』には違う意味があつたんよ」

凜 ……「違う意味…」

海未 ……「絵里は先ほど、これをアスタリスクと呼びましたが…もつと一般的な呼び方はありますんか…穂乃果は実家の職業柄、わりと目にするかと思うのですが…」

穂乃果…「一般的な呼び方?…えっ?…あつ! 『米印(こめじるし)』!?’

海未 ……「正解です」

ここ ……「ネット用語じゃ、ただ単に『コメ』とも言うわ」

穂乃果…「あつ!じゃあ…あの落書きは…」

ここ ……『コメデブは死ね!』…よ」

くつづく

死ぬのは誰だ？

：

モブA：「それで…わざわざ『スクールアイドル辞めない宣言』をする為に、こんなところに呼び出したの？」

モブB：「てつきり『諦めます宣言』なのかと思ったけど」

花陽：「残念ながら、その期待には応えられないよ…μ、sのみんなに『花陽は不要だ』って言われたら考えるけど…」

モブA：「自覚がないって怖いねえ。先輩方は優しいから口にしなだけで、本当は辞めてほしいと思ってるんだよ？」

モブB：「そうそう…私たちはそれを代弁してあげてるわけ」

花陽：「…余計なお世話…だよ…」

モブA：「はあ？」

モブB：「なんか言った？」

花陽：「ふふふ…余計なお世話だよ…って言ったんだよ？聴こえなかった？」

モブB：「えっ…」

モブA：「随分強気じゃない」

花陽：「言ったよね？今の花陽は半年前の花陽じゃないって！あなたたちがどんな嫌がらせしよう…私は負けないから」

モブA：「偉そうに」

花陽　：「μsは私が見つけた自分の居場所…。みんなと一緒に歌って踊って、おしゃべりしてご飯食べて…この大切な時間をあなたたちの嫉妬で奪われたくない！だから…私はどんな嫌がらせをされても耐えるって心に決めたんだ」

モブA　：「嫌がらせ？冗談じゃないわ」

モブB　：「そうだよ…人間きの悪い…」

モブA　：「まさか、おにぎりが無くなったことも、私たちのせいにしてようとしてるわけ？」

モブB　：「いやだなあ…自分で忘れたのを人のせいにするなんて…」

モブA　：「ふふふ…まあ、疑うのは勝手だけど…それなら証拠を見せてみな…ってね」

モブB　：「でも、こつちもたかだかおにぎりのひとつやふたつのこと、因縁付けられても、困るんだよね」

花陽　　：「…たかだか…おにぎり？」

モブA　：「な、なによ…」

花陽　　：「…わかったよ…」

：

絵里　　：「コメデブ…って…つまり…それが花陽のことなの？」

希　　：「花陽ちゃんをデブと呼ぶのは、いささか忍びないんやけど…お米を食べすぎてダイエツトさせられた実績があるし…他に当てはまるメンバーもおらんから…」

凜　　：「うう…許せないにや…許せないにや!!」

真姫　：「凜、落ち着いて」

凜　　：「落ち着いてなんていられないよ!!かよちゃんが殺されちゃうかもしれないんだよ!!」

真姫　：「わかっているわよ!私だって頭にきてるのは一緒よ!今の今まで、そのことに気が付かなかったことにもね!」

凜　　：「…真姫ちゃん…」

希　　：「これはあくまで推測やけどな…あの時差し入れ、みんなはチーズケーキやったけど…花陽ちゃんだけ、おにぎりやったろ?あれ、そういうことやったんじゃないやろか…」

絵里　：「そういうことって?」

希　　：「ウチらには『花陽ちゃんのことを想って、おにぎりを用意した』…と見せかけておいて…実は…『わかっているやろな?このコメデブってというのは、お前のことやからな』っていう…」

絵里　：「脅しの道具?…」

穂乃果：「じゃあ、花陽ちゃんは最初から最後まで知ってたってこと?だとしたら、どうして黙った単だろう」

希　　：「そこはこれから確認しなきゃ…やけど…」

真姫　：「『ひとに迷惑を掛けたくない』…って、たぶん…ただそれだけじゃない?…」

穂乃果：「真姫ちゃん…」

真姫　：「花陽って、そういう娘でしょ？」

穂乃果　：「わかってるけどさ……」

凜　　：「打ち明けてほしかったにや！」

真姫　：「凜……」

凜　　：「凜、かよちんのことならなんでも知ってると思ってたし……困ってるなら相談してほしかったのに……親友失格だにや」

にこ　：「そう思ってるのは、アンタだけじゃないわよ。アタシだって、なにか悩んでるのを知ってて手を差し伸べなかつたんだから……こんなことだとわかってれば、もっとやりようがあったのに」

凜　　：「……にこちゃん……」

絵里　：「そうね……でも、今それを言っても始まらないわ。ここまでこのことは花陽が考え抜いて出した結論だと思うの。だから、今はその気持ちを汲みましよう」

穂乃果　：「そうだね！」

凜　　：「で、でも……かよちん、このままじゃ殺されちゃうかもしれないんでしょ……なんとかしないと」

にこ　：「!!……ねえ……アイツ、今日『二人にお礼しないと……』って言ったんでしょ?……その意味って」

海未　：「!!……ま、まさか!? 『お礼』ってそういう意味ですか!？」

希　　：「……うそやん……花陽ちゃん……」

海未　：「大変です!!花陽を止めないと!」

絵里　：「……どういふこと?」

希 …『お礼参り』…虐げられていた側が『報復行為』をする…
隠語やね…」

穂乃果 …『卒業式に不良が先生を襲う』っていうアレだよね」

絵里 …「!!」

にこ …「真姫ちゃん！花陽はどこ行ったのよ!?!」

真姫 …「わ、わからないわ…『じゃあ、行こう』って言ってたから、
教室からは出て行ったとは思うけど…」

希 …「凜ちゃん、電話！」

凜 …「今、掛けてるけど…電源…入ってないにや」

にこ …「あのバカ!!」

海未 …「とりあえず、校内を手分けして探しましょう！」

絵里 …「学校内にいるかしら？」

海未 …「わかりません。ですが、やみくもに外を探しに行っても意
味がありませんので」

希 …「そやったら、靴があるか確認すればいいやない？」

海未 …「そうですね。では、まずはそちらに向かいましょう」

…

モブA …「それで…」

モブB …「なにがわかったの？」

花陽 …「あなたたちを…許すことができない…ってことかな」

モブA：「許すことができない?」

花陽　：「…私は何をされても耐えるよ…どんな有名なアイドルだって『アンチ』は必ずしるし。ちよつとバツシングされただけでつぶれるようなら、芸能界なんて生き残れないんだろうから」

モブB：「へえ…言うわね」

花陽　：「でも…でも…お米への冒涇だけは…絶対に許さないからあ!!」

モブA：「はあ?」

モブB：「そこ?」

モブA：「絶対に許さない…つて、どうかされちゃうのかしら? 私たち」

モブB：「だけど…そんなことしたら…あなたはおろか、*μ*sにも学校にも迷惑かかるんじゃない?」

花陽　：「…だから、なに?」

モブA：「えっ!?!」

モブB：「へっ!?!」

花陽　：「今の花陽は怒りに打ち震えてるよ! たぶん…花陽の人生史上、一番怒ってる…だから…謝るなら今のうちだよ?」

モブA：「バ、バカじゃないの? たかが、おにぎりくらいで」

モブB：「キレるところがおかしいでしょ」

花陽：「死ぬのは私じゃなくて…」

モブA：「!？」

モブB：「!？」

花陽：「あなたたちかもしれないね？」

モブA：「えっ…」

モブB：「な…」

：

凜：「かよちゃんの靴…ないにや…」

海未：「…ということは…少なくとも校舎内にはいない…ということですね」

穂乃果：「どうする？」

希：「花陽ちゃんは、まだ校内におる！」

一同：「えっ？」

希：「ウチのカードがそう告げてるんよ」

にこ：「当てになるの？」

希 …「任せとき！」

にこ …「いいいわ、信じわよ…溺れるものは藁をも掴む…ってこう
いうことを言うのね」

穂乃果 …「おお！難しい言葉を知ってるねえ！」

にこ …「常識よ！」

絵里 …「そんなこと言ってる暇はないわよ」

海未 …「携帯電話が繋がらないなら、外に行っても、砂漠で宝石を
探すようなものです」

真姫 …「そうね、まずは校内を探したほうがいいわね」

海未 …「はい！…とはいえ、全員バラバラになってもあれなので…
私は穂乃果と周ります」

穂乃果 …「うん！」

真姫 …「凜、一緒に行くわよ」

凜 …「了解にや！」

希 …「じゃあ、ウチはえりちと、にこつちの3人で…」

絵里 …「ええ、行きましょう」

にこ …「アタシたちが行くまで早まったマネをするんじゃないわ
よ!!」

…

ことり …「かくよちゃん！」

花陽 …「!!」

ことり …「なにしてるのかな、こんなところで」

モブA：「南先輩!？」

モブB：「どうしてここに!？」

ことり：「ふふふ…どうしてだろうね?…」

花陽：「…ことりちゃん…」

ことり：「なあに?」

花陽：「申し訳ないですけど…ここは席を外してください。μ、Sのメンバーを巻き込むつもりはないですから」

ことり：「…巻き込む?…その二人を…どうするつもりなのかなあ?…」

モブA：「み…南先輩、聴いてください!小泉さんが…」

モブB：「私たちを『殺す』って…」

ことり：「…殺す?…へえ…かよちゃんか?…ふふふ、おもしろい冗談だね?…」

…

希：「何か『事を起こす』なら…人目に付かないところやろうと思っただけど…」

絵里：「アルパカ小屋にはいないみたいね」

にこ：「逆にもっとも疑われる場所じゃない?」

希：「それもそうやね」

…

海未　：「この間、花陽はひとりどこかで会ってました」

穂乃果　：「弓道場で？」

海未　　：「内容はわかりませんが…はい…」

穂乃果　：「こんなところに連れてくるかな？結構、人通りあるよ？」

海未　　：「ええ…ですが練習が始まってしまえば、部員は休憩以外の時間、中から出てくることはありませんので…」

穂乃果　：「そっか…」

海未　　：「…ですが…いないみたいですね…」

穂乃果　：「うん…」

海未　　：「しかたありません、他をあたりました」

：

凜　　　：「体育館の裏？」

真姫　　：「定番じゃない？人を呼び出すときの」

凜　　　：「確かに」

真姫　　：「花陽！いるの？いるなら隠れてないで返事なさいよ」

凜　　　：「かよちくん！かよちくん」

くつづく

キレたのは…

：

穂乃果：「花陽ちゃん…こんなところにいたんだあ…」

凜：「探したにや〜」

花陽：「!!」

モブA：「!!」

モブB：「!!」

にこ：「どうやら、まだ何も『起こってない』みたいね」

希：「いや、花陽ちゃん、めっちゃ『怒った顔しとる』やん」

絵里：「希…あなたって人はこんな時まで…」

希：「にひっ…ウチ、シリアスな場面って苦手なんよ」

海未：「花陽…『お礼をする』…という割には、随分無粋な場所を選びましたね」

真姫：「どんなことをしてあげるつもりだったのかしら?」

花陽：「…ことりちゃんにも言いましたが…これは花陽の、ごくごく私的な問題なんです。なので…みんなは、何も訊かずに席を外してください」

にこ：「アホか!この状況で『はい、そうですか』って引き下がるバカがどこにいるのよ」

海未：「おおよそ、検討は付いてますが、ひとまず状況を説明してください」

凜　　：「本当はその二人に呼び出されたんじゃない？理由はわからないけど、かよちん、ずっと『死ぬ』って言われてたんでしょ？」

モブA：「勝手なこと言わないでよ」

モブB：「逆だつて！小泉さんにここに連れて来られて『殺す』って言われるのは、私たちの方なんだから」

凜　　：「嘘だ！かよちんは『殺す』なんて言葉、絶対に言わないよ！」

モブA：「嘘だと思ったら、南先輩に訊いてみれば？」

モブB：「うん、先輩の前で宣言したんだから」

穂乃果：「えっ？ことりちゃんの前で？」

ことり：「殺す…とは言っていなかったかな」

モブA：「南先輩!？」

モブB：「聴いてましたよね？」

穂乃果：「うん、やっぱり花陽ちゃんは、そんな言葉を使…」

ことり：「でも『死ぬのは私じゃなくて、あなたたちかも知れない』って言葉は聴いちゃった♡」

凜　　：「かよちん？」

真姫　：「花陽…」

モブA：「…っていうことです！」

モブB：「こんな人が、sにいるなんて、どう思いますか？」

穂乃果：「どうもこうも、ないよね?…」

海未：「物騒な言葉だとは思いますが…」

希：「花陽ちゃんが、そんな言葉を口にしたのやら、よつぽどのがあつたんやろうな…くらいにしか」

絵里：「そのよつぽどのが、おにぎり…つてところが花陽らしいけど」

モブA：「さすが、先輩!よくわかつてるじゃないですか!まさにそうなんです!自分がお弁当を忘れたのにも関わらず、なぜか私たちに逆ギレして」

モブB：「こんなところに連れて来られて」

希：「嘘はあかんよ、嘘は」

モブA：「いえ、嘘など…」

ことり：「ねえ?…お二人さんは嘘つきは泥棒の始まり…つて言葉、知ってる?」

モブA：「えっ?…あ…も、もちろん…」

モブB：「は…はい、知ってます…」

ことり：「それはそうだよな?だって、もうなっちゃったんだもんね…泥棒さんに♡」

真姫：「ことり?」

モブA：「は、はい?」

モブB：「な、何をおっしやってるのか…」

ことり：「へえ…じゃあ、二人はかよちゃんのお弁当を盗って『いっ!』」

に捨てたりしてないんだね？」

モブA : 「あ、当たり前じゃないですか！」

モブB : 「南先輩ともあろう人が、つまらない冗談を！」

真姫 : 「あら、私もそう思ってるんだけど。体育の時間、保健室に行くフリをして教室に戻り…花陽のお弁当を盗って、ここに捨てた…でしょ？」

モブA : 「西木野さんまで？人間きの悪いこと言わないでよ」

モブB : 「だいたい、『そんなもの』が『ここに捨てられていた』なんて、初耳だし」

花陽 : 「…そんなもの？…」

モブA : 「そうそう！それにどうして、西木野さんがそんなことを知ってるのよ」

モブB : 「もし盗まれたって言うなら、小泉さんはなんでそう言わなかったの？自分で『忘れた』って言ったんじゃない！」

ここ : 「それね…それがコイツのバカなところなのよ」

絵里 : 「にー！」

ここ : 「まあ、何かあると『誰か助けて〜』って言ってただけの弟子が、随分遅しくなったもんだ…と嬉しくも思うけど」

海未 : 「はい、私もそう思います」

穂乃果 : 「私も花陽ちゃんも、相当シゴかれたからねえ…そりゃあ、強くなるよ…」

海未 : 「なにか？」

穂乃果：「こつちな話だよ…つてか、敵さんはあつちでしょ？」

モブA：「えっ？敵さん…つて…ちよつと待つてくださいい？おかしくないですか？今、ここに連れ出されて『死ぬ』と脅されてるのは、私たちなんですよ」

モブB：「それなのに、どうして、こつちが悪みたいになってるんですか？」

希：「花陽ちゃんを脅してたのは…キミたちちゃうん？」

海未：「屋上のあの落書きは…あなたたちが書いたものですよね？」

にこ：「『コメデブは死ぬ』か…まったくナメたマネしてくるわ」

真姫：「花陽の上履きを隠したのも、あなたたちね？」

絵里：「私たちのも」

希：「それはウチのスーパースピリチュアルパワーのお陰で、未遂に終わったけどな」

モブA：「なんのことでしよう？」

モブB：「落書き？上履き？」

穂乃果：「穂乃果って人を見る目、ないのかな？ふたりは、sのこ
と、真剣に応援してくれてたと思ったのに…もう、差し入れしてもら
えないのかと思うと、残念で仕方ないよ」

海未：「そこですか！」

モブA：「何か皆さん、凄い勘違いしてますよ。私たち、μ、sの
こと、本当に好きなんです！心から応援してます」

モブB：「それなのに…そんな言い方酷いです」

モブA：「むしろ、そんなμ、sをこんなこととして裏切ろうとして
るのは小泉さんの方で」

モブB :「私たちが訴えて、警察沙汰にでもなったりしたら、ラブライブどこの話じゃなくなっちゃいますよ」

モブA :「だよねえ！だから、一刻も早く、小泉さんをクビにするべきです！なんなら今この場で！」

モブB :「表では大人しそうにしていますけど、ウラで、どれだけ汚い言葉を使ってるか知ってます？」

モブA :「園田先輩には『虐待された上に、餓死させられそうになった！』とか言っていましたし」

穂乃果 :「あはは…うん、それは間違ってるね」

海未 :「穂乃果！」

穂乃果 :「いや、だから敵さんはあっちだって…」

にこ :「…で…アンタたちの言いたいことはそれだけ？」

モブB :「えっ？…あ…いや…」

にこ :「花陽、戻るわよ！もう、アタシたちがゴイツらのこと知っちゃったからには、これ以上アンタに手出しはしてこないわよ」

絵里 :「そうね…色々嫌な思いをしたかも知れないけど、ここで何かしたところで、後々後悔するだけよ」

海未 :「はい」

真姫 :「私も花陽と同じくらい頭に来てるけど…相手にしないのが一番よ」

凛 :「凛だって…凛だって、同じだよ！かよちゃんがどれくらい怒ってるか、凛は知ってるよ！絶対許さないって、気持ち、凛だってわかるよ！だけど、相手にしたら負けなんだ。だから…ね？かよちゃん、戻ろう！」

花陽 ……」

モブA …「いい加減にしてください！何を根拠に小泉さんを庇うんですか！」

モブB …「そうですよ！私たちが小泉さんのお弁当を盗んだって
いう証拠があるなら見せてくださいよ！」

海未 …「証拠…ですか…」

穂乃果 …「犯人って開き直ると、必ずこういうこと言うよね」

モブA …「先輩たちのこと、見損ないましたよ！それは…仲間が大
事…っていうのはわかりますけど」

モブB …「推測だけで犯人扱いされたら堪らないですよ！」

ことり …「証拠なら…あるよ…」

一同 …「えっ!？」

ことり …「さて、これは、なんでしょう?…じゃ〜ん♡」

一同 …「SDカード?」

ことり …「せいか〜い♡じゃあ、このSDカードには、何が入ってる
でしょ?」

一同 …「…?…」

ことり …「正解は…監視カメラの映像でしたあ♡」

一同 …「!？」

真姫 …「監視カメラの…」

海未 …「映像…ですか？」

絵里 …「この学校に、そんなのあったかしら？」

ことり …「なかったから…ことりが仕掛けちゃった♡」

一同 …「はい？」

ことり …「凄いよね！電気街に行けば、みんなにわからないように撮影出来るカメラとか、いっぱい売ってるんだよ♡」

にこ …「アンタ、それ監視カメラじゃなくて、盗撮カメラじゃない…」

希 …「…なんか怖いんやけど…」

ことり …「まあまあ…細かいことは置いといて…で…ここにバツチり映っちゃってるんだあ…そっちの娘が、授業を抜け出して、花陽ちゃんのバッグの中を漁ってる様子が…」

モブA …「あっ！…ああ…」

ことり …「それだけじゃないよ！絵里ちゃんと希ちゃんの上履きを、花陽ちゃんのとこに入れたのとか…」

モブB …「うああ…」

ことり …「アルパカさんの前で、花陽ちゃんを虐めてるところとか…」

モブA …「ち、違います…な、何かの間違いです…」

モブB …「そ、それはきつと別の人じゃ…」

ことり：「往生際が悪いんだよ!!」

モブA　：「ひい!」

モブB　：「ひゃあ!」

μ, s　　：「!!」

ことり：「だったら、てめえの目で、この中の映像、確かめて見るか？ああん？グダグダ言ってるよ…」

モブA　：「…」

モブB　：「…」

μ, s　　：「…」

ことり：「ことりのおやつにしちやぶぞ」
「♡」

くつづく

真相究明

穂乃果：「…ここ、ことりちゃんのおんなセリフ、初めて聴いたよ…」

凜　　：「…ここ、怖かったにや…」

にこ　　：「…お、怒らせたなら、絶対ダメなタイプの人間ね…」

ことり：「…で？…ふたりは、まだ言い逃れしちゃうのかなあ？」

モブA　：「…」

モブB　：「…」

モブA　：「…す、すみませんでした…」

モブB　：「…ご、ごめんなさい…」

ことり：「あは、もう認めちゃうんだあ」

希　　：「そりゃあ、あんな凄まれ方されたら、やってなくても、やった…って言ってしまうやん」

絵里　　：「確かに…」

真姫　　：「…そのSDに証拠があるって…じゃあ、あなたは初めから全て知ってたってこと？」

ことり：「うくん、始めから…っていう訳じゃないけど…」

海未　　：「では……ことりが独りで行動していたのは…」

ことり：「みんなにバレないようにカメラを仕掛けてたんだ…」

穂乃果：「もう！なんで言ってくれなかったのさ…」

凜　　：「そうにや！そうにや！」

ことり：「ごめんね…だけど…」

真姫　：「花陽が止めたのね？」

一同　：「!!」

にこ　：「みんなに迷惑掛けたくなかったから？」

凜　　：「かよちゃん…」

絵里　：「どういふことか説明してくれるかしら？」

花陽　：「…」

絵里　：「仕方ないわね…花陽は教えてくれそうもないから…あなたたちに話を聴く方が早そうね」

海未　：「あなたたちは花陽に何をしていたのですか？」

モブA　：「…う、羨ましかったです…」

モブB　：「…えっと…その…クラスでも一番大人しそうな小泉さんが、ステージで輝いてるのを観て…」

モブA　：「…最初は…素直に凄いなあ…って思ってたんですけど…そのうち…」

モブB　：「騙された…ってというか、裏切られたような気分になって…」

真姫　：「騙された？」

凜　　：「裏切られた？」

モブ A : 「普段の姿が嘘なんじゃないかっていう…」

希 : 「それで上履きを隠したん？」

モブ B : 「ちよつと悪戯して、困らせてやろう…くらいのつもりだったんです…」

モブ A : 「だから、翌日にはすぐ返したんですけど…でも…作戦は失敗しました…」

真姫 : 「失敗？」

モブ B : 「星空さんのところに入れたハズの上履きが、どういう訳か小泉さんのところから見つかった…って…」

真姫 : 「ああ、それ？入ってたわよ、凜のところには…」

モブ A : 「えっ？」

モブ B : 「えっ？」

真姫 : 「色々と騒ぎになるのが面倒だから、花陽のところから見つかったようにしただけで」

モブ A : 「そうだったんだ…」

モブ B : 「知らなかった…」

海未 : 「…ところで、なぜわざわざ、凜のところに戻したのですか？」

モブ A : 「それは…小泉さんが星空さんを疑えば、仲、悪くなるかな…って…」

海未 …「やはり…ふたりの関係性を知ったのことでしたか…」

凜 …「呆れたにや…凜とかよちんの仲はそんなことで、壊れないにや！」

真姫 …「それで…思い通りの展開にならなくて、第2段の犯行に及んだ…って訳？」

モブA …「…少し違うかな…実は…小泉さんを狙った理由がもうひとつあって…」

希 …「花陽ちゃんが、ことりちゃんと仲良くしてるのが、気に入らなかった？」

モブA …「…はい…」

モブB …「…その通りです…」

海未 …「嫉妬…ですか…」

モブB …「以前、外でふたりが仲良く買い物してるところを見てしまつて…それからずっとモヤモヤしてたんですけど…」

モブA …「私たちが上履きを隠した次の日…屋上でお昼食べてる時に、南先輩が小泉さんのところに来て…買い出しに誘ったんです」

モブB …「その時までは、南先輩に近づける方法を探っていたから…会えて話せたことは嬉しかったけど…それと同時に…」

モブA …「小泉さんに軽く『殺意を抱いた』というか…」

一同 …「!!」

モブB …「…いえ、本当に『殺してやろう』なんて思っていないですよ…なんて言えбайいんだろう…」

モブA …「本気で憎らしくなっちゃたんです…小泉さんのことが。」

どうしてこんな人が南先輩みたいな人に可愛がられてるんだろう
：「って思ったら：存在自体が許せなくなっちゃって：」

真姫　：「はあ：勝手過ぎるわ：」

絵里　：「ことりは、それを知ってたの？」

ことり：「ううん：まだ、この時は…。でもね、かよちゃんの上履きがなくなった：「って聴いて、直ぐにカメラを買って、靴箱の上の方に仕掛けたんだあ：「そうしたら：」

希　　：「ウチらの上履きを悪戯するふたりの姿が映ってた？」

ことり：「うん！」

海未　：「偶然にも、ことりがふたりに会ってしまったことで、彼女たちの嫉妬心に余計な火を点けてしまった：「ということですか？」

絵里　：「どうして私たちの上履きを？」

真姫　：「それは学校の中で一番影響力のあるふたりなもの」

穂乃果：「生徒会長と副会長の上履きが悪戯されたとなれば、それは学校に対する一種の反乱だもんね！」

凜　　：「それが、かよちゃんの靴箱に入ってたなんていったら、大騒ぎになるにや」

ことり：「幸いにも、たまたま絵里ちゃんたちが学校に来るのが遅くて、大きな騒ぎにならなかつけど」

希　　：「なるほど。ウチのスピリチュアルスーパーラッキー危険回避能力のお陰で、事件にならずに済んだ：「ってことやね」

ここ　：「いや、むしろ証拠を抑えてたんなら、事件にした方が良かったんじゃない？」

絵里　：「でも：「学校の体面上：「それは避けたかった？」

ことり：「せいはいー！…お母さ…理事長にも相談したんだけど…結果として何も起きなかつたんだから、事を荒立てるのはよしましよ…う…つてなつて…」

穂乃果：「だけどさあ…ふたりがそういうことをした…つてわかつてたんだつたら、注意くらいするべきだつたんじゃ？」

ことり：「今、思えばそうだつたかも…。…でも、その時はまだ、ふたりの意図がわからなかつたし…行為に及んだのは確かだけど、何か別の理由があるかも…つてことで」

真姫：「暫く様子を見た？」

海未：「つまり…ふたりを『泳がせた』ということですか？」

ことり：「言葉は悪いけど…そうなるかな？」

凜：「ことりちゃん、ふたりの事はかよちに伝えたんでしょう？」

ことり：「もちろん、伝えたよ！でも『何かの間違いかも知れないし…μsも大事な時だから』つて」

穂乃果：「花陽ちゃんらしい…つて言えば花陽ちゃんらしいけど…」

希：「下手に藪を突つついて逆ギレされても困るしなあ」

海未：「私たちもライブ前に変な噂は立ってほしくないと思つていましたから…」

真姫：「そつちのふたりも、きっとそれをわかつてた…つてことね」

モブA：「…」

モブB ……」

海未 …「ふたつの悪戯が上手くいかなかったからかどうかはわからないですけど…それから大人しくなったのですね」

ことり：「それが…」

真姫 …「そこから、花陽に、sを辞めるよう、直接脅すようになつた…」

海未 …「真姫…」

真姫 …「あれだけ、ことあるごとに花陽を呼び出していれば、そう考えるのがスジじゃない？もつとも、今だからそう言えることだけ…」

希 …「アルパカ小屋で見つけた『おにぎりのゲー』は、花陽ちゃんがそのストレスで吐いたもの…」

絵里 …「おにぎりのゲー？」

希 …「詳細は聴かんでおいて…」

絵里 …「？」

海未 …「ことりが花陽と弓道場の脇で話をしていたのは…その後だつたんですよね？」

真姫 …「花陽はあの時、アルパカ小屋に行つてた…って言つてたけど、本当はあなたと居たんでしょ？」

海未 …「私には花陽がことりを呼び出した…と言つていましたが、実際は逆だつたのではないですか？」

希 …「花陽ちゃんが告白したんやなかったんやね」

ことり：「うん…アルパカさんのところにもカメラを仕掛けておい

たから…ことりも…花陽ちゃんが虐められてるのに気が付いて、話をしたんだけど…」

穂乃果…「虐められてた…って言うけど、叩かれたり、蹴られたりはしなかったの？」

海未…「そういうことをすれば、私たちに直ぐ気付かれますから…」

希…「バレたら警察沙汰になるやろうし…そこまではできんかったんやろ」

真姫…「だから…精神的に追い詰める方法を選んだ…」

海未…「ずっとμsを辞めるよう迫られていたのでしょうね」

ことり…「アンタが話をした時、花陽はそうされてることを認めなかったの？」

ことり…「認めないことはなかったけど…でも、これは自分の問題だから…μsにとっても大事な時だから…って…」

こ…「…はあ…まったく…バカなんだから…」

凜…「かよちゃんは、バカじゃないにや」

こ…「わかってるわよ、そんなこと…」

穂乃果…「アルパカの具合が悪くなったのは、やっぱり偶然なの？」

ことり…「うん…獣医さんの言った通りじゃないかな？…花陽ちゃんがストレスを抱えるようになって…アルパカさんも移っちゃんだ…。でも、それはふたりにとっても予想外だったと思うよ」

モブA…「…」

モブB…「…」

ことり…「だけど、それさえも利用しようとしたんだよね？」

モブA ……」

モブB ……」

真姫 ……なるほど…アルパカが倒れたのは『花陽の自作自演』って噂を積極的に流したのは、あなたたちだった…ってことね」

凜 ……「酷すぎるにや…」

希 ……「そやけど…花陽ちゃんの気持ちが折れることはなかったんやね」

にこ ……「強くなったわね」

海未 ……「ですが…いえ、だから…と言うべきでしょうか…ふたりは…もつと強硬な手段に出たのですね？」

絵里 ……「それがあの落書き？」

穂乃果 ……「最低だよ…」

くつづく

ああ無情（最終話）

海未 ……さて…ふたりとも、これまでの話に何か反論はありますか？」

モブA ……いえ…」

モブB ……なにも…」

希 ……「花陽ちゃんに嫌がらせをしていたことを認めるんやね？」

モブA ……「だいたい、合ってます…」

モブB ……「ただ…小泉さんを本当に殺そうなんてことは、これっぽっちも…それだけは信じて下さい！」

モブA ……「μ s から抜けてくれれば…それで良かったんです…」

モブB ……「はい…」

真姫 ……「あんたたちになんの権利があつてそんな…」

穂乃果 ……「ねえ…ふたりはμ s のことが好きだ…つて言ってくれたよね？」

モブA ……「はい…」

モブB ……「はい…」

穂乃果 ……「ことりちゃんのごとも好きなんだよね？」

モブA ……「はい…」

モブB ……それは、もう…」

ことり：「…だったら…かよちゃんがμ、sを辞めたら…私が悲しむことは考えなかったのかなあ？」

モブA ……えっ…」

モブB ……あっ…」

にこ ……私が…じゃないでしょ！」

真姫に：「私たち全員が…でしょ？」

ことり：「うん、そうだね！」

希 ……恋は盲目って言うても、行きすぎるとこんななってしまううんやね…」

にこ ……花陽：アンタがもつと早く、みんなにちゃんと話してれば、ここまで面倒臭い話にならなかったのに…」

凜 ……ごめんね、かよちゃん…凜、こんなことになってるとは、全然知らなくて…」

海未 ……いえ…凜だけではありません。私たちもあなたに何か異変があることに気付いていながら、今の今まで何も出来なかったのですから…」

花陽 ……みんな…」

にこ ……でも…よく、その嫌がらせに耐えて頑張ったわ…褒めてあげろ！それでこそアタシの一番弟子よ。アンタなりにμ、sを守ろうとしてくれたことなんですよ？」

花陽 ……にこちゃん…」

絵里　：「もし花陽が素直に話してしまつたら、ふたりはどうするつもりだったのかしら？」

希　　：「確信があつたんやろうな…花陽ちゃんの性格やら、μ、sの現状やらを考えたら…問題を大きくするハズない！って」

凜　　：「本当に卑劣にや」

にこ　：「言っておくけど…アンタたちふたりがどう思ってるかは知らないけど…アタシたちはねえ…この9人だからμ、sなの！誰かひとり欠けてもダメなの！！ヤツに、μ、sが好きだなんて言つて欲しくないわ！」

花陽　：「にこちゃん…」

にこ　：「当然でしょ」

絵里　：「それより…問題は…」

にこ　：「どうやって落とし前を付けるか？つてことね？」

希　　：「罪に問うとするならば…脅迫罪と窃盗罪…つてとこやろうな…」

モブA　：「…あう…」

モブB　：「…うう…」

海未　：「花陽に精神的苦痛を与えていたのなら、傷害罪も適用されるのではないでしょうか？」

真姫　：「いずれにしても刑罰は免れないわね」

モブA　：「…あ、あの…すみませんでした…」

モブB　：「小泉さん、ごめんなさい…」

モブA　：「…本当に…本当に…ごめんなさい…」

モブB　：「もう、二度とこんなことはしないから…」

凜 …「そんなこと言っても許せるわけないにや！」

モブA …「本当にすみません！…ここ、これからは心を入れ換え
て、もつともつと^{ts}tsを応援しますから…」

にこ …「応援なんてしてもらわなくて結構よ!!」

モブB …「いえ、裏方でもなんでも手伝いますので…どうか…」

にこ …「むしろ、一生関わらないで欲しいわ」

希 …「うくん…まあ…現実的な話として…刑罰云々は大袈裟な
んかなあ…」

海未 …「…はい…」

にこ …「まあ、コイツらのことを許すつもりなんてサラサラないけ
ど…正直なところ、こんな時期に警察沙汰になつても迷惑なだけだ
し」

真姫 …「ラブライブもそうだけど、学校の評判もガタ落ちになるわ
ね」

絵里 …「折角の入学志望者も、いなくなることも考えられるわ」

穂乃果 …「そんなあ…せっかく廃校を阻止したのに…」

海未 …「そういう意味では、花陽はよく耐えてくれました」

希 …「ほんまやねえ」

海未 …「となりますと…ふたつにひとつかと…。このまま、花陽の
我慢に免じて不問に付すか…学校に報告して判断を仰ぐか…」

ことり …「残念だけど…学校はもう知ってるよ♡」

一同 …「!!」

ことり …「学校というよりは、おかあさ…理事長は…だけど」

海末　：「ああ、そうでした。ことりが報告していたのでしたね」
穂乃果　：「今日のことも？」

ことり　：「先生が『おにぎり散乱しました』…つて、理事長に報告が上げたから…。まさかと思ってカメラを確認したら、そっちの娘が映ってたの…。先生たちにはまだ知らさえてないけど…」

絵里　　：「なるほど。…それで、理事長の判断は？」

ことり　：「被害にあったのは小泉さんだから、彼女がどうしたいのかが大事だ…つて。教育者として、この状況に目を瞑るわけにはいかないから、本来なら親を呼び出すなどして、適正に処分することが望ましいけど…」

にこ　　：「適正に処分する？」

海末　　：「停学ですか」

にこ　　：「まあ、そんなことしなくても、この話が学校に広まれば、勝手に辞めていくだろうけど」

真姫　　：「よっぽどの神経をしてない限り、普通に通うことなんて出来ないもの」

にこ　　：「かと言って…あとで逆恨みされても困るのよのよねえ。私たちが辞めさせた…みたいになってもイヤじゃない」

ことり　：「それは大丈夫じゃないかなあ？そんなことはしないよね？だって逆にこの映像を世に晒されたら…二人の人生終わっちゃうもん♡…それくらいはわかるよね？」

モブA　　：「…はい…」

モブB　　：「…もちろんです…」

モブA　　：「…ですから、どうかこの件は…」

モブB ……本当に許してください…」

凜 ……「どうする？かよちん」

花陽 ……「さつきも言ったんだけど…花陽に辞めて欲しい…とか
…ことりちゃんと仲良くするな…とか言われたことは、もう、どうでも
いいんだ。デブって言われたことも…自覚してることだし」

凜 ……「そんなことないよ！どう考えても希ちゃんの方が…」

希 ……「ん？凜ちゃん？」

凜 ……「おっと、口が滑ったにや…」

花陽 ……「でもね…でもね…おにぎりを捨てたことだけは、絶対許さないんだからあ!!」

一同 ……「!!」

花陽 ……「それだけはどんなに謝っても許さないよ!!今回のこの無
礼な振る舞いは、おにぎりを作ってくれたお母さん！精米してくれた
お米屋さん！八十八の手間暇掛けて、お米を育ててくれた農家のみな
さん!!私に対してでなく、このおにぎりに携わったすべての方々に対
する冒瀆です!!」

希 ……「気持ちわかるけど…」

絵里 ……「熱くなりすぎじゃないかしら…」

花陽 ……「…この恨み、晴らさず置くべきかあ!…です」

真姫 ……「花陽!」

凜 ……「か、かよちん…ちよ、ちよつと落ち着くにや」

花陽 …すちや

穂乃果：「あれ？ポケットから何か出したよ」

絵里 …「折り鶴？」

海未 …「花陽の特技は折り紙であることは知っていますが…あれをどうするつもりでしょう」

にこ …「構えたわ」

希 …「はっ！…あ、あれは『折り鶴の結花』や！」

一同 …「折り鶴の結花？」

希 …「昔、そんなドラマがあつたんよ。金属製の折り鶴を飛ばして武器にして戦う女子高生の…」

穂乃果：「えっ!?!じゃあ、あの折り鶴も？」

花陽 …「いけえ!!」

一同 …「あっ！」

ひゅっ！

モブA …「うそっ！」

モブB …「嫌あ！」

ひよろひよろひよろ…
ぽとん

一同 …「えっ?！」

一同 ……」

一同 ……」

花陽 ……」あはは…さすがに普通の折り鶴じゃダメだったみたいですねえ」

ことり ……」うくん…やっぱり重さが足らなかったのかな？」

花陽 ……」リリアンの方が良かった？」

ことり ……」ビー玉じゃないかな？」

花陽 ……」今度試してみよう」

ことり ……」うん」

にこ ……」どういうこと？」

絵里 ……」私たちは何を見ているのかしら」

海未 ……」ことり、説明してもらえますか？」

ことり ……」説明もなにも…かよちゃんと、あのふたりを懲らしめる機会を窺ってたんだあ。それがたまたま今日だっただけで…」

花陽 ……」いつかやるだろうなあ…とは思っていたけど、まさか本当におにぎりに手を出すとは思いませんでした」

ことり ……」ね？」

海未 ……」それは…なんとなくわかりましたが…」

にこ ……」いや、なに納得してるのよ！アタシたちが訊きたいのは、最後の下手なコントは何？…ってことなんだけど」

花陽 ……」へっ？真面目にやったんだけど…上手いかなかったなあ…ただ単に…練習不足です！」

ことり ……」こんなに早く来るとは思わなかったから、ぶっつけ本番だったもんね♡」

花陽 ……」はい。イメージトレーニングはバッチリだったんですけ

どね」

にこ ……あつそ…」

海未 ……あれで成敗するつもりだったのですか？」

穂乃果 ……「えつと…じゃあ、さっきのことりちゃんの怖いセリフは演技？」

凜 ……「凜、おしっこちびりそうだったにや」

ことり ……「どうかなあ？」

穂乃果 ……「いや、そこはお願いだから『演技』って言ってよ」

絵里 ……「あれが本性だったら怖すぎるわ」

海未 ……「それで…花陽は、このふたりをどうするつもりですか？」

花陽 ……「そうだねえ…今後、私たちに関わることもなく、お詫びがてらお米農家のみなさんのお役に立てることって言ったら…」

一同 ……」

花陽 ……「一生、案山子として田んぼに立ってもらおうことだね！」

モブA ……「…かかし…」

モブB ……「…って、あの…かかし？…」

花陽 ……「それ以外になにがあるのかな？ふたりが案山子になれば、もう誰とも話さなくていいだろうし、誰の迷惑も掛けないよねえ」

凜 ……「かよちん？」

真姫 ……「花陽？」

ことり：「いい考えだね♡…そうしたら…：…ことりがふたりに、お似合
いの衣装を作ってあげるね♡やっぱりかすりの着物に麦わら帽子が
いいのかなあ…」

穂乃果：「ことりちゃん？」

海未：「ことり？」

花陽：「さあ、どこがいい？新潟？山形？北海道かな？」

モブA：「…あわわ…」

モブB：「…うう…」

ことり：「それとも…」

花陽：「…地獄に行く？…」

この世界は悲しみに満ちている
く完く